

教育関係共同利用拠点  
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」  
Joint Educational Development Center  
“Educational Development Core in International Cooperation”

# 2014 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書

Joint Educational Development Center Project Report 2014

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター  
Center for Professional Development (CPD)  
Institute for Excellence in Higher Education (IEHE)  
Tohoku University





# 2014 年度教育関係共同利用拠点事業報告書

## 目 次

1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について .....	3
2. 2014 年度活動報告	
2-1. 計画の目標及び運営の基本方針.....	3
2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題 .....	4
2-3. 学内外への宣伝・広報 .....	4
2-4. 調査研究活動.....	5
2-5. プログラム開発・実施 .....	6
2-5-1. 大学教育力開発（高度教養教育）（2014 年度実施分） .....	6
2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP） .....	6
2-5-3. 東北大学 新任教員プログラム（Tohoku U. NFP） .....	8
2-5-4. 履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム（EMLP）」 .....	10
2-5-5. 大学職員能力開発プログラム（SDP） .....	12
2-5-6. PD（専門性開発）セミナー.....	14
2-5-7. PDPonline（専門性開発プログラム動画配信サイト） .....	15
2-6. 研究成果の発表・出版 .....	18
2-7. 他機関との連携 .....	19
2-8. 第 2 期教育関係共同利用拠点事業に向けて .....	19
2-8-1. 第 2 期の構想.....	19
2-8-2. 申請結果 .....	19
3. 参考資料	
3-1. 大学教育力開発事業（高度教養教育） .....	23
3-2. PDP（専門性開発プログラム） .....	25
3-2-1. PD（専門性開発）分野一覧.....	25
3-2-2. PD セミナー実施一覧.....	26
3-2-3. PD セミナー参加者アンケート結果.....	38
3-3. CPD 教職員一覧.....	67
3-4. CPD 共同利用運営委員会委員一覧 .....	69
3-5. CPD 教職員の活動.....	70



## 1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について

東北大学高等教育開発推進センターは、2010年3月に教育関係共同利用拠点の認定を受け、2014年4月にグローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション人材育成センターと合併し、東北大学高度教養教育・学生支援機構に再編された。拠点事業は、機構が後継組織として担うことになり、大学教育支援センターを実施上の原動力に、機構各組織・個人の協力を得て実施された。

2014年度も、①組織開発と教職員個人能力開発の2つを柱に、②大学教員の専門性を4ゾーン14カテゴリーに区分して包括的な専門性開発プログラムを提供、③キャリア・ステージに対応して、大学教員をめざす院生向け大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP）、大学のこれからを担うフロント・ランナーとしての新任教員プログラム（New Faculty Program; NFP）、履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）、大学教育の運営力を高める大学職員能力開発プログラム（Staff Development Program; SDP）の4つのプログラムコンテンツを拡充して提供、⑤PDPonlineにおけるセミナーの動画配信を拡大した。

また、2014年度は、拠点事業の最終年度に当たり、事業全般の見直しを行い、次期に継続するものと、その成果に基づき、新たな拠点計画の申請を行うことを重視した。

## 2. 2014年度活動報告

### 2-1. 計画の目標及び運営の基本方針

以下の諸点を基本方針として各事業を推進した。

- (1) 拠点事業の最終年度として、各活動の質を高め、まとめを行うとともに、6年目以降の拠点事業を進める新たな構想を検討する。
- (2) 特に、取り組むべき重要課題は次の通り。
  - ①キャリア別プログラムをベースに提供プログラムを整理し、PDセミナーを4ゾーン・14カテゴリーにバランスよく配置し、体系的に提供する。
  - ②履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム(EMLP)を完了し、その成果をまとめ、汎用性のあるプログラム案を作成する。
  - ③大学教員準備プログラム(PFFP)の成果をまとめ、全国的に共有できるプログラムの指針をまとめ、理論・実践の双方を含む図書を出版する。
  - ④メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを含む新任教員プログラム(NFP)を継続する。
  - ⑤東北大学新任教員研修の内容改善を図り、実施する。
  - ⑥セミナーの動画化と配信を拡大する。
  - ⑦他の教育関係共同利用拠点、大学間連携共同教育推進事業(信州大学他)「CITI Japanプロジェクト」、大学IRコンソーシアムとの連携を強め、大学教育学会大会への支援など、全国的な大学教育改革への寄与を引き続き行う。
  - ⑧大学管理職調査など現在進行中の研究をまとめ、その成果を学会等で発表する。
  - ⑨平成27(2015)年度以降の特別経費プロジェクト(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)及び、次期教育関係共同利用拠点事業の構想を検討し、申請する。

## 2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題

### (1) 目標

- ① 持続的な事業推進のために、教員組織及び職員組織を恒常化する。
- ② 新たな教職員配置が確定するまで、研究支援者を引き続き配置する。
- ③ 共同研究員、研究開発員などの体制を持続する。

### (2) 実施状況

- ① 東北大学高度教養教育・学生支援機構設置に伴う全学的な教員配置の強化のもとで、大学教育支援センターには4名配置（教授1、准教授1、講師1を増員）を要求し、内、拠点経費によって採用されていた助教を昇任し講師とする（2015年4月より）。
- ② 2015年4月より、東北大学高度教養教育・学生支援機構事務室を設置し、大学教育支援センター職員（教育研究支援者2、事務補佐員2）を事務室に統合し、国立大学改革強化推進経費による雇用に切り替える（補助金財源であり、恒常化には課題が残る）。
- ③ 大学教育支援センター長・部門長等5名（専任教員2名）、研究開発員21名、共同研究員9名（内、国外はメルボルン大学2名、イリノイ大学1名）の組織を編成した。

## 2-3. 学内外への宣伝・広報

### (1) 目標

- ① 多様なニーズに対応し、紙面、ホームページ、ソーシャル・ネットワークの充実化を図りリピーターへのリーチはもちろんのこと、新たな参加者獲得に向けた方法を試行する。
- ② PDPonline の拡大に伴い、多様な提供方法に対応できるようにユーザー・インターフェイスの利便性を高める。
- ③ 各種プログラムの発展的内容を明確に伝え、教育関係共同利用拠点活動の継続性をアピールする。

### (2) 実施状況

- ・ **広報物の作成** 「PDP 2014 年度プログラム」(8,200 部) を作成し、拠点事業における PDP のキャリア別プログラムおよび分野別プログラムの概要、また、PD セミナーの年間予定を一冊にまとめ、拠点事業で提供されている各種プログラムを利用者にとって分かりやすいパンフレットとして作成した。この他、PFFP と NFP では参加者の声を掲載し、対象者との距離を縮める内容に改編したパンフレット (7,000 部) を作成した。これらを全国の高等教育研究関連組織に配布したほか、開催セミナー、国内外における各種学会・集会、訪問調査等で活用した。
- ・ **ポスター等による情報発信** セミナーやプログラムの広報ポスターをデザインし、全国向けにデータ版にて情報発信を行った。(参考資料 3-2-2)
- ・ **ホームページの活用** 新たに整備された高度教養教育・学生支援機構ホームページの他、大学教育支援センター、東北大学、広島大学高等教育研究開発センターホームページを活用し、各種プログラム・セミナー等の情報発信を随時行った。PDP 2014 年度プログラムパンフレットのデータ版を大学教育支援センターホームページに掲載し、ダウンロード可能とした。各キャリア別プログラムの詳細はホームページを活用して公表し、募集時期はもちろんのこと、次期参加者のためのガイドとして活用した。
- ・ **ソーシャル・ネットワークの活用** 4 月に開設した大学教育支援センターの Facebook およ

び Twitter を活用し、利用者による情報の拡大を図った。Facebook では 124 人、Twitter では 115 人が当ページをフォローしており、情報は直接的、また拡散的に配信された。

- ・ **学内への広報** 学内掲示用ポスターを紙面にて随時配布したほか、ウェブ情報共有ツール「東北大学ポータルシステム」を活用し、学内の教職員への情報発信及び各種セミナー等への広報を行った。
- ・ **学内リソース集の作成** 以前より課題として挙がっていた、本学教員、特に新任教員を対象とし、学内の各種情報に容易にアクセスできるウェブページ「東北大学教員のためのリソースマップ」を作成した。本部広報課と連携し、本学ホームページの教職員用ページからアクセスできるようにする予定である。

### (3) 評価及び課題

- ・ **広報活動の改善と推進** 拠点事業は 5 年目となり、単発的に開催される PD セミナーについては安定した申込・受講者数を得ているが、キャリア別プログラムのように中・長期間の受講となるプログラムの安定的な参加者獲得には難しさが残っている。利用者が理解しやすく、各プログラム・セミナーへ受講することへ繋げる方法を大学教育支援センターの人的資源とのバランスを図りながら改善することが必要である。
- ・ **ホームページのユーザー分析** PDPonline サイトの充実化を図るため、5 月より開始したアクセス数の分析により、新ページではアクセス数による動画の順位別標記や新着情報の掲載を可能とした。

## 2-4. 調査研究活動

### (1) 目標

次期拠点事業に向け、教育マネジメントや教養教育など東北大学高度教養教育・学生支援機構の使命達成に貢献し、各業務センターの連携を強める調査研究活動を推進する。

### (2) 実施状況

- ・ **グローバル社会におけるコンピテンシーを具体化する高度教養教育の開発研究** 2014 年度から科学研究費補助金基盤研究 (A) を獲得し、学際融合教育推進センター・学習支援センター・教育評価分析センターなど機構教員 12 名、学外 6 名からなる研究チームを編成し、国内外の教養教育、学習成果測定などの研究を推進した (国際シンポジウム・研究会等 4 回、国内調査 6 大学・研究会、外国調査 3 か国 (米豪英)、高等教育・外国語教育論など 166 冊を収集)。特に、米調査ではスタンフォード大学で提供されている Think Matters や Ways of Thinking/Doing といった新しい一般教育科目について担当者に聴き取り調査及び関連資料の収集、サンフランシスコ州立大学では一般教育の提供に関わる Dean of Undergraduate Education and Academic Planning や Dean of General Education に聴き取り調査と資料収集を行った。ここから、両大学では、各歴史的な文脈及び各大学の機能を踏まえつつ、多様な提供形態やカリキュラム内容 (履修要件) が確立されていることが明らかとなった。また、カリフォルニア大学バークレー校でも、全学共通科目である American Cultures の責任者と、専門教育の代表として化学部 (College of Chemistry) の Undergraduate Dean に対して聴き取り調査を行った。その結果、他大学とは異なるバークレー特有の歴史を踏まえた科目提供をめぐる学内でも対照的な見方が存在することが明らかになった。この調査に基づく知見は、2015 年 6 月の大学教育学会で発表予定であ

る。

- ・ **大学教育の内部質保証を担うミドルマネジメント人材の専門性開発に関する国際比較研究**  
科学研究費補助金基盤研究 (B) における同研究と連携し、次年度からの拠点事業におけるアカデミック・リーダーシップについて、2015年2月にイギリスにおいて訪問調査を行った。キングストン大学、ブリストル大学において、機関レベルで提供している専門性プログラムについてプログラム担当者に聴き取り調査を行った。また、高等教育リーダーシップ財団 (Leadership Foundation for Higher Education; LFHE) では、同財団が提供するプログラム統括者より、英国高等教育におけるリーダーシップ研究の状況や同財団が提供するプログラム全体状況について聴き取り調査を行った。さらに、英国高等教育財政審議会 (Higher Education Funding Council for England; HEFCE) では、国レベルで行っている大学教育情報公開システムである Unistats の運用状況を中心に聴き取り調査を行った。この調査で、英国におけるシステムレベル、機関レベルでの質保証 (IR) や専門性開発についての動向といくつかの優良事例を把握することができた。
- ・ **メルボルン大学における訪問調査** 2015年3月21~29日に大学教員支援センター教職員4名がメルボルン大学を訪問し、各種調査を行った。アカデミック・リーダー・プログラムについては、学内者を対象としてメルボルン大学人事課が提供するプログラムの学内における位置付けや組織体制、プログラム開発・実施についてプログラム担当者に聴き取り調査を行った。学外者を対象に有料でアカデミック・リーダー・プログラムの提供を行っている LH Martin Institute では、オーストラリアの大学職員団体 (Association for Tertiary Education Management; ATEM) 会員向けのプログラムを提供しており、メルボルン大学大学院の学位につながる仕組みなどの聴き取り調査の他、次年度実施予定の当拠点事業におけるプログラムについて意見交換を行った。そのほか、各種専門性開発プログラム、自然科学・工学・数学 (Science, Technology & Mathematics; STEM) の分野についての組織的な教育内容・方法の開発、Teaching and Research Nexus の調査、委員会等会議マネジメント研修に参加した。

## 2-5. プログラム開発・実施

### 2-5-1. 大学教育力開発事業(高度教養教育)

2013年度に学内公募を行った『大学教育力開発事業(高度教養教育)』では、国際問題などを取り上げ、留学生と日本人学生とが共に学ぶ国際共修科目、専門分野全体を統合する視点を身に着ける分野総合科目、社会科学と自然科学双方のアプローチからの複眼的思考を培う学際・融合科目、科学的知見だけでは解決できない複雑な問題解決に取り組むトランス・サイエンス科目、その他、高度教養教育にふさわしい内容を備えた科目の授業開発とした。結果、8部局10件(総額3,880千円、内3件282千円は2014年度継続実施)を採択し、2014年度は昨年度に続き2ヵ年事業となった3件について支援を行った。(参考資料3-1) これらの成果は、東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要第1号(2015年夏発行予定)に成果報告される。

### 2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム(Tohoku U. PFFP)

2014年度 東北大学 大学教員準備プログラムには、国際文化研究科1名、法学研究科1



名、医工学研究科 1 名、環境科学研究科 1 名、理学研究科 1 名の計 5 名が参加し、下記に示す達成目標、プログラム活動に取り組んだ。

【達成目標】

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
- 異分野の研究や教育文化を知る

【プログラムにおける活動】

- オリエンテーション「PFFP/NFP へようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計する-授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる-マイクロティーチング」
- セミナー「米国の大学教育制度と役割について考える～日・米の比較」
- バークレー集中コース
- ワークショップ「自分の授業をみつめる-模擬授業」
- 先達教員による個人コンサルテーション
- リフレクティブ・ジャーナルの作成
- 課題論文の提出

図表 1 Tohoku U. PFFP のスケジュール

	日時	概要
オリエンテーション 「PFFP/NFP へようこそ」	2014 年 10 月 4 日 (土) 10:00～17:00	参加者顔合わせ、プログラムの目的、大学教育の課題と教員の役割に関する講義、比較教育学の視点を組み入れたワークショップ、本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など
授業の基礎知識を得る 「大学の授業を設計する -授業デザインとシラバス作成」	2014 年 10 月 15 日 (水) 15:00～18:00	大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える
先達から学ぶ「授業を見る 聞く学ぶ」	2014 年 10 月 ～2015 年 1 月	授業経験豊かな教員の授業を参観し、授業後のディスカッションを通して、教育活動について考えるヒントを得る
自分の授業をみつめる- マイクロティーチング	2014 年 11 月 11 日 (火) 13:00～17:00	一人 7 分間のマイクロティーチングの実践とファシリテーター、他の参加者からのフィードバック、および授業リフレクションの実施
自分の授業をみつめる- 模擬授業	2015 年 2 月 3 日 (火) 13:00～17:20	一人 17 分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック、および授業リフレクションの実施
比較の視点を養う「大学 教育制度と役割について 考える～日・米の比較」	2015 年 2 月 10 日 (火) 13:30～16:20	アメリカの高等教育について学び、バークレー集中コースに向けて準備をする。参加者同士のディスカッションを通して、日本の高等教育との比較を行う
バークレー集中コース出 発前案内	2015 年 2 月 10 日 (火) 16:30～17:30	バークレー集中コースに先駆けて、出発前案内として旅程、日程の確認、危機管理と質疑応答を実施する

比較の視点を養う 「バークレー集中コース」	2015年2月25日(水)～ 3月5日(木)	カリフォルニア大学バークレー校において、1週間の集中コースに参加
先達教員コンサルテーション	2015年3月10日(火) 14:00～17:00	先達教員による個人コンサルテーションとグループディスカッション
成果報告会／修了証授与式	2015年3月21日(火) 16:00～19:00	参加者による報告と、プログラムOB/OGとの質疑応答、先達教員からの激励

#### 【評価および課題】

参加者へのアンケート調査の結果からは、プログラムは有効であったとの評価を受けた。特に、オリエンテーションやシラバス作成セミナーに対する評価が昨年度から大幅に改善した。これは、本プログラムの目的やそれと各セミナーとのつながり等を複数回にわたり丁寧に説明することを実践したことが効果的であったと考えられる。昨年度は、その位置づけが必ずしも参加者と共有できているとは言い難かったバークレー研修についても、今年度は、プログラムにおける意図を十分に反映した理解がなされていることが伺われた。

今年度から新たに導入した「先輩の知恵」（過去のプログラム参加者の声やアドバイスをまとめた冊子）に対する評価も高く、これらのリソースを用いて効果的な取組みができたことが報告されている。また、バークレー研修参加前に毎日メールで研修に関する情報を配信する新たな取組を実施したが、「もう少し早めに送ってほしい」「研修前でバタバタしてしっかり読めなかった」という声が寄せられた。提供するタイミングや内容の量について引き続き検討する必要がある。

課題としては、参加者から「提供を7月からに前倒しし、負担感を軽減してほしい」「プログラムの節目にコーディネーターや先達教員との面談の機会を設けてほしい」といった要望が挙げられており、これら対応する必要等を精査していく必要がある。また、今年度は参加者数が5名と少数であった。学内における認知度の向上、学外からの参加者の受入等に力を注いでいくことも考えたい。

#### 2-5-3. 東北大学 新任教員プログラム(Tohoku U. NFP)

2014年度 東北大学 新任教員プログラムには、環境科学研究科 助教1名、教育学研究科 助教1名、学際科学フロンティア研究所 助教1名の計3名が参加した。また、メルボルン大学の講師を招いての合宿セミナーには、全国から5名が参加した。

#### 【達成目標】

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
- 異分野の研究や教育文化を知る

#### 【プログラムにおける活動】

- オリエンテーション「PFFP/NFPへようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計するー授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」

- ワークショップ「自分の授業をみつめる-マイクロティーチング」
- 国内合宿セミナー「教育を科学する（メルボルン大講師による）」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる-模擬授業」
- 先達教員による個人コンサルテーション
- リフレクティブ・ジャーナルの作成
- 課題論文の提出

図表 2 Tohoku U. NFP のスケジュール

	日時	概要
オリエンテーション 「PFFP/NFP へようこそ」	2014 年 10 月 4 日 (土) 10:00~17:00	参加者顔合わせ, プログラムの目的, 大学教育の課題と教員の役割に関する講義, 比較教育学の視点を組み入れたワークショップ, 本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など
授業の基礎知識を得る 「大学の授業を設計する—授業デザインとシラバス作成」	2014 年 10 月 15 日 (水) 15:00~18:00	大学の授業における目標・活動・評価について, 事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える
先達から学ぶ「授業を見る聞く学ぶ」	2014 年 10 月 ~2015 年 1 月	授業経験豊かな教員の授業を参観し, 授業後のディスカッションを通して, 教育活動について考えるヒントを得る
教育を科学する: 合宿セミナー	2014 年 11 月 1 日 (土) ~ 3 日 (月・祝)	メルボルン大学の高等教育研究センターの講師陣を迎え, 教授法, 学習, 授業設計等に関する理論を学び, 自身の授業のシラバスの改善に取り組む
自分の授業をみつめる— マイクロティーチング	2014 年 11 月 11 日 (火) 13:00~17:00	一人 7 分間のマイクロティーチングの実践とファシリテーター, 他の参加者からのフィードバック, および授業リフレクションの実施
自分の授業をみつめる— 模擬授業	2015 年 2 月 3 日 (火) 13:00~17:20	一人 17 分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック, および授業リフレクションの実施
先達教員コンサルテーション	2015 年 3 月 10 日 (火) 14:00~17:00	先達教員による個人コンサルテーションとグループディスカッション
成果報告会/修了証授与式	2015 年 3 月 21 日 (火) 16:00~19:00	参加者による報告と, プログラム OB/OG との質疑応答, 先達教員からの激励

#### 【評価および課題】

2014 年度は, 高等教育に関する参考文献をまとめた「推薦図書集」を新たに教材として作成し, 参加者に配布した。また, 過去のプログラム参加者 (プログラム OB/OG) のプログラムへの参加を積極的に促し, オリエンテーション後の同窓会, 授業参観への参加, 成果報告会への参加を呼び掛けた。さらに, 月一回程度「OB/OG メール」を送付し, プログラムやその他 PD プログラムへの参加を呼び掛けた。この流れにより, OB/OG をファシリテーターとしてプログラムに参加してもらうことが可能となり, プログラム参加者にとっても非常に有益である様子が伺えたことから, 今後も継続して取り組んでいきたい。

育児や学会参加などですべてのセミナー等に参加できなかった参加者がいたこともあり, プログラムに対する評価は, 昨年度の評価から若干下がった。しかしながら, メルボルン大講師を迎えての合宿セミナーは, PD プログラムとしても開放し, 計 8 名の参加者から好評

を得ることができた。また、昨年度から力を入れている過去のプログラム参加者との交流や、ファシリテーターとしての招聘は非常にうまく機能しており、プログラムの効果を高めるうえで役立っている。この取り組みは今度も継続していきたい。

PPFP 参加者よりも NFP 参加者の方が、よりニーズや悩みの内容が具体的になっていることもあり、参加者からの要求としては、分野別の個別対応やコンサルティング窓口の開設などを求める声が寄せられた。例年、プログラムとして提供する内容の量と、ニーズに応えることのバランスが課題になっている。CPD で提供している PD プログラムや、その他学内のサービスなどに誘導することで解決する内容については、積極的に情報提供をしていきたい。また、オリエンテーション時に配布する資料や、提供している情報が必ずしも活用されていない場合も見受けられた。これらを活用してもらえよう、周知を徹底するしくみを検討していきたい。

#### 2-5-4. 履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム(EMLP)

2011 年度から始まった大学教育マネジメント人材育成プログラムは、2013 年度から新たに履修証明プログラムに再編し、履修期間も 2 年間（計 120 時間以上）とした。本プログラムでは、各種セミナー・ワークショップで大学教育の教育・学習活動やマネジメントに関する知識を広く学ぶこと、各受講者が各所属機関の教育改善・改革の「課題」を持ち寄り、相互に情報交換しながら議論を行うことを通して、改革案を有効で実現可能なものに高めて実際に実施すること、その経験を通して各機関レベルで改善・改革を担えるリーダーへと成長していくことを目指している。

そのために、本プログラムでは、セミナーを通して、高等教育の動向や教育・学習のマネジメントについて基礎的・発展的に学ぶとともに、ワークショップにおける議論を通して、受講者の改革案が実行可能なものになることを企図して構成した（図表 3）。

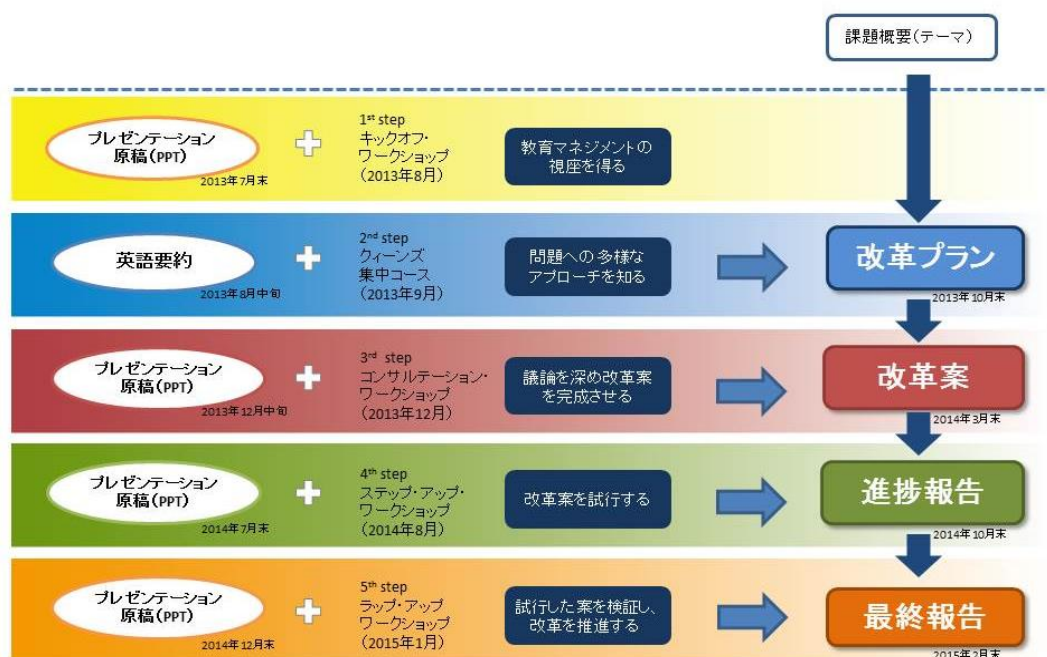
本プログラムは、全体が 5 つの段階（図表 3 参照）から構成されており、実施期間は、2013 年 8 月から 2015 年 3 月までの 2 年間である。プログラム内容は、段階を経るごとにステップアップできるように構造化し、2013 年度は第一ステップから第三ステップまで、2014 年度は第四ステップ、第五ステップを行った。

受講者は、全国から公募し、教員 4 名、職員 4 名の計 8 名（東北大学 1 名、東北大学を除く国立大学 1 名、公立大学 4 名、私立大学 2 名）が参加した。プログラムの活動内容・日程等について以下に示す（図表 4）。

##### 【プログラム構成】

- 1st Step： キックオフ・ワークショップ  
～教育マネジメントの視座を得る～
- 2nd Step： Queen's – Tohoku Joint Program  
～問題への多様なアプローチを知る～
- 3rd Step： コンサルテーション・ワークショップ  
～議論を深め改革案を完成させる～
- 4th Step： ステップアップ・ワークショップ  
～改革案を試行する～
- 5th Step： ラップアップ・ワークショップ  
～試行した案を検証し、改革を推進する～

図表 3 大学教育人材育成プログラム（EMLP）の構造



図表 4 EMLP のスケジュールと概要

プログラム名称	日程	概要
1 キックオフ・ワークショップ	2013年8月2日(金) ～8月4日(日)	プログラム趣旨説明, カナダ教育事情, データの分析・解釈の技法, 大学教育論, リーダーシップと意思決定等に関するセミナーの受講, 及び課題の発表と受講者・アドバイザーとのディスカッションを行った。
2 Queen's-Tohoku Joint Program	2013年9月21日(土) ～9月29日(日)	カナダ・クイーンズ大学における1週間の集中コースに参加し, 教授学習やマネジメントに関するセミナー受講。また, 受講者各自の課題について現地調査を行い, 課題の整理や問題分析に取り組んだ。
3 コンサルテーション・ワークショップ	2013年12月21日(土) ～12月22日(日)	大学管理運営論, データに基づく教育改善に関するセミナーの受講。また, クイーンズでの学習を踏まえて作成した改革プランの発表と受講者・アドバイザーとのディスカッションを行った。
4 ステップアップ・ワークショップ	2014年8月23日(土) ～8月24日(日)	比較から見る世界の高等教育, SD/PD論に関するセミナーの受講。また, 各自が取り組んできた改革の進捗状況の発表と受講者・アドバイザーとのディスカッションを行った。
5 ラップアップ・ワークショップ	2015年1月11日(日) ～12日(祝・月)	これまでの改革案に関する成果と課題を整理するとともに, さらなる改革推進に向けた今後の活動の展望について発表しディスカッションを行った。

## 【評価および課題】

EMLP は、2011 年度からの 2 年間におけるプログラムの試行経験を踏まえ、2013 年度から 2 年間の履修証明プログラムとして学習時間及び内容を拡大・発展させたことで、各受講者が所属機関で直面する課題を真正面から深く掘り下げて議論し、フィージビリティの高い改革課題に鍛え上げることが可能となった。また、その結果、大学における教育・学習の実践と改善、マネジメントやリーダーシップのありようについて、受講者が広範かつ多面的に学ぶ機会が充実し、アプローチすることが可能となった。

こうした点から、プログラムの内容や運営に対する受講者からの評価は高い（各ステップ後のアンケート結果）。とりわけ受講者による自由記述内容からは、大学の教育学習及びマネジメントの改革・改善に精通したアドバイザー 3 名から厳しくも的確なコメントをもらい、さらに受講者同士でも互いの課題を共有し議論を繰り返すことで、初年度の活動を通して、各受講者が自らの改革課題を深く掘り下げていくだけの力や姿勢を獲得していることが判断される。

2 年目には、受講者同士のつながりがますます強固なものとなり、特に国際関係部署に所属している教職員間では、情報交換に加え、海外の大学への紹介や新たなプログラム開発の相談などでも協力関係を築いていたようである。また、2 年目に入ると、アドバイザーから他の受講者へのコメントを、自らの取組みの参考にするという姿勢も多くみられるようになり、思考のスコップが広がっている様子が観察された。今回の受講者は、教員・職員両職種から参加があったことで相互に新たな発見をもたらし、またどのような点に気遣って改革を進めていく必要があるかなど多様な視点からの気づきが得られたようである。

2 年間の活動における受講者からの評価として、受講後のアンケートにおいて、全受講者が有益な情報や知識を得ることができて「満足」だと回答している。また、本プログラムで身についた力として、回答数の多いほうから、①多角的に分析する力、②課題の原因を構造化する力、③幅広い視野で俯瞰する力、④多様なアプローチ方法、⑤改革案を構想する力を挙げている。これは、2 年間にわたるプログラムのなかで、年に 2 回行ったワークショップでのアドバイザーと 1 対 1 でのディスカッションやプレゼンテーションにおける他の受講者からのコメントが大きな影響を与えているものと推察される。

このような高い評価を得たプログラムではあるが、いくつかの課題も見えてきている。それは、遠距離からの参加に付随する負担感が大きいこと、時期によって日常の業務と課題遂行（レポート作成、ISTU（東北大学インターネットスクール）による動画視聴）の両立が難しくなること、セミナー等で提供した知識やアドバイザーからのコメントを実践に応用する際に支援が必要となる場合があること等である。

これらについて、次期プログラムでは、ISTU 等 ICT のさらなる有効活用、開催時期の見直し（作業期間の十分な確保）、プログラム担当者からの日常的支援の強化等によって改善を図る予定である。

### 2-5-5. 大学職員能力開発プログラム(SDP)

2014 年度は主に 2 つのプログラムを実施した。一つ目は、昨年度から開始した若手職員を対象としたセミナー／ワークショップ・シリーズ「若手職員のための大学職員論」（2014 年 12 月 20 日開催）では、若手・中堅レベルの職員が中心になって大学改革を進めている私立

大学課長級の大学職員 2 名を講師に迎え、具体的な経験に学んだうえで、それぞれの持ち場で若手職員がどう行動していけばいいのかをワークショップで考える機会を提供した。この会には、東北大学職員有志メンバー4名もワークショップの企画・運営・ファシリテーターとして参加してもらうことで、各メンバーの企画・運営力育成の機会とした。この他、平成 26 年度東北地区大学図書館協議会合同研修会に共催として企画・運営に協力し、大学教育支援センターより講演に教員 1 名、ワークショップにスタッフ 1 名を派遣した。

二つ目は、「東北大学職員のための『大学変革力』育成講座」として 2014 年度新規に立ち上げた、本学職員の係長級以上課長補佐級以下を対象としたプログラムである。世代・職階ともに「中堅」に位置づく係長等の職員が、変化の激しい多様な時代的ニーズを踏まえつつ、本学の強みを活かした新たなイノベーションを創出できる「大学変革力」を獲得・育成することを目的とし、総務系（法規含む）4 名、教務系 4 名、経理系 3 名の計 11 名が参加し、下記に示すプログラム活動に取り組んだ。

図表 5 プログラム活動およびコンセプト図



図表 6 SDP 東北大学職員のための「大学変革力」育成講座スケジュール

	日時	概要
第 1 回目： ワークショップ I ～課題を抽出する～	2014 年 10 月 11 日（土） 13：00～17：00	大学機関別認証評価 自己評価報告書を基に、各チームにおいて改善すべき課題を挙げ、実現可能な課題を抽出する。各チームにおける課題、改善に向けた方向性、改革案作成までの流れを全体共有する。
第 2 回目： ワークショップ II ～議論を深め改革案を磨く～	2014 年 12 月 6 日（土） 13：00～17：00	各チームで進めてきた改革案を全体共有し、議論する。着目点、改善案は妥当か、会場全体から出された多様な意見をどのように集約し実現へと運ぶか。改革案の実現に向け、チームにて再度議論する。

<p>第3回目： 企画提案会議 ～改革案の実現に向けて～</p>	<p>2015年1月31日（土） 13：00～17：20</p>	<p>完成した改革案を，アドバイザーを含めた別チームのメンバーに発表する。改革案を，会議構成員に対してどのように説明し，説得するのか，また，会議にて出された指摘や意見に対し，どのように対処するのか，会議マネジメントの経験も積む。 企画提案会議後，会議にて指摘された事項について，再度チームに持ち帰り，案の練り直し・発展を経て，最終全体発表を行う。</p>
--	--------------------------------------	---

### 【評価および課題】

『大学変革力』育成講座の参加者へのアンケート調査の結果からは，受講動機や受講を決めた理由の半数が上司からの薦めであったにも関わらず，全体評価として概ね有効であったとの評価を受けた。プログラム全体がチーム活動であり，通常業務では密に協働することの少ない異なる職種によるチーム編成にしたことで，解釈や考え方の違い，それに伴って企画提案の進め方の難しさを感じつつも，様々な意見を取り入れる姿勢が観察された。

第2回目ワークショップではサブ・アドバイザーとして職員職の部長1名，教員1名の計2名が参加し，各チームの企画提案について助言をいただいた。また，第3回目では模擬発表と正アドバイザーとして学内外より高等教育専門2名と本学本部事務機構課長1名の計3名から助言を得た後，最終発表を全体で行ったことで，短い修正時間ながらより磨かれた案が発表された。アドバイザーから経験に基づく的確な指摘や説得力ある意見をいただけたなど，有効な機会であったことが参加者から評価されている。

他方，改善に向けた課題も散見された。本講座は4ヶ月間に及ぶ3回シリーズと自主的なチーム活動で改革案を作成する構成であったが，各ワークショップのワーク量が多く，参加者が消化し終えないままに次の活動に移ることがあったため，内容の振り返りと消化時間を設けてほしい，助言を活かすためにも再考の時間を十分に確保してほしいとの要望がいくつか寄せられた。また，アドバイザーからは，チーム発表のみではなく，個人としての活動成果が見える方法を取り入れる必要があるのではないかと指摘を受けた。これらのことから，来年度は，ワーク量や時間配分の改善を図る一方，理解を深める機会や，各参加者の考えを構造化し言語化する作業を組み込むことについても検討する必要がある。

### 2-5-6. PD(専門性開発)セミナー

- ・ **コンセプトと構造の明確化** キャリア別プログラムにおいて提供される各種セミナーを可能な範囲で一般公開とし，PDセミナーとしてバランスよく企画・配置し，セミナー構成を精選する方向で一層の徹底を図った。
- ・ **実施状況** 2014年度は，計49件のセミナーが実施された（参考資料3-2-2）。PD分野一覧の分野（ゾーン）別では，高等教育のリテラシー形成関連（コード：L）が16件，専門教育での指導力形成関連（コード：S）が3件，学生支援力形成関連（コード：W）では保健管理センターが主体となって継続的に実施している「健康科学セミナー」4件含め計6件，マネジメント力形成関連（コード：M）が7件，枠組み外として昼休みの時間帯に短時間でスポット的に実施した「正午PD会」が11件，また，共催を含めその他が6件であった。内容としては，国内外の高等教育における先端的な課題を取り上げたほ



か、継続的に開催しているセミナーについても更なる改善を行って実施した。

- ・ **参加者による評価** 実施セミナー49 件の内、22 件については受講者アンケートによる評価データが収集された（参考資料 3-2-3）。受講者数で重みづけた受講満足度の平均値は 3.56 点（4 点満点）、新しい知識・情報を知った 3.58 点、新しい見方ができるようになったは 3.42 点であり、例年同様、高い評価を得た。
- ・ **次年度以降に向けた課題** 課題である専門教育指導力のカテゴリーについては、専門教育指導者を指導する教員が不足していることがあり、これについての調査研究などの理論的活動の強化も含め、構造的、実質的課題の洗い出し、また、当機構の特色でもある語学教育の指導力向上を踏まえ、機構内外の資源を活用してプログラムを開発していく必要がある。

## 2-5-7. PDPonline(専門性開発プログラム動画配信サイト)

PDPonline は、東北大学インターネットスクール (ISTU) の公開動画機能を用いて配信を実現している。各セミナーの動画は、トピックの内容毎にチャプターとして分割し、10～15 分前後の動画として順を追って再生できるように編集している。これらのコンテンツの利用は無料であり、講演者の許諾を得たうえでアクセス制限を設けることなく、広く一般に公開している。

2013 年度までには 19 件のコンテンツを公開していたが、2014 年度には、コンテンツの更新や追加を行い、26 件の公開を実現した。公開しているコンテンツを図表 7 に示す。

また、2014 年度には PDPonline のサイトのリニューアルを行い、「新着動画」や「よく見られている動画」をトップページに配置するとともに、タグクラウドによるキーワードによる関連動画一覧の生成や、カテゴリ毎の動画一覧のページを新たに設置した。加えて、各種 SNS の機能との連携も図り、Twitter 上でのシェア、Facebook のいいね！機能およびシェア、Pocket（後で参照するためにページの情報を保存しておく機能）ボタン、g+1 ボタンを新たに設置した。これにより、動画を他者に勧めたり共有したりすることが可能となった。なお、ページ独自の評価用ボタンも設置し、動画を評価している視聴者数が表示される機能を付加した。リニューアル後の PDPonline のトップページ、および個別のコンテンツのページの例をそれぞれ図表 8、9 に示す。

さらに、2014 年 5 月 23 日から、アクセス数についてのログの取得を開始した。これによりアクセス元やアクセス数についてのデータを分析対象とすることが可能となった。

図表 7 PDPonline における動画コンテンツ一覧（2015 年 3 月）

	セミナー名	講師（所属は講演当時）
1	世界の高等教育政策	杉本 和弘 准教授 (東北大学高等教育開発推進センター)
2	大学教育論： 教養と専門の二項対立を越えて	小笠原 正明 教授 (北海道大学名誉教授)
3	認知科学と学習の原理・応用	佐伯 胖 教授 (信濃教育会教育研究所長，東京大学名誉教授)
4	Designing Your Courses for More Significant Learning	Dee Fink 教授 (高等教育コンサルタント)

5	授業作り：準備と運営	邑本俊亮 教授 (東北大学 災害科学国際研究所)
6	研究不正と学問的誠実性	羽田 貴史 教授 (東北大学高等教育開発推進センター)
7	授業デザインとシラバス作成	串本 剛 講師 (東北大学高等教育開発推進センター)
8	大学教授職とはどのような職業か	羽田 貴史 教授 (東北大学高等教育開発推進センター)
9	Classroom English: Pronunciation and Expressions	トッド・エンズレン講師 (東北大学高等教育開発推進センター)
10	Classroom English: Pronunciation and Expressions	ヴィンセント・スクラ 講師 (東北大学高等教育開発推進センター)
11	Finding Common Ground	Sophie Arkoudis 准教授 (メルボルン大学高等教育研究センター)
12	Managing internationalisation	Richard James 教授 (メルボルン大学)
13	IR を活用した教育改善へのステップ	鳥居 朋子 教授 (立命館大学)
14	データに基づく教学改革をどのように進めるか	山田 剛史 准教授 (愛媛大学)
15	リーダーシップと意思決定	吉武 博通 教授 (筑波大学)
16	オーストラリアにおける研究倫理政策と実践	Marc Fellman 教授 (豪州ノートルダム大学)
17	研究と実践のインタラクション	山田 礼子 教授 (同土社大学)
18	学術分野の男女共同参画のポジティブ・アクションの課題	辻村 みよ子 教授 (東北大学大学院法学研究科)
19	研究者育成と研究倫理教育の課題	市川 家國 教授 (信州大学)
20	大学教育と青年期発達	鈴木 敏明 (東北大学高等教育開発推進センター)
21	大学教員の役割とキャリア・ステージ	羽田 貴史 教授 (東北大学高等教育開発推進センター)
22	学問的誠実性—世界と日本の動向	羽田 貴史 教授 (東北大学高等教育開発推進センター)
23	歴史から見た大学：中世から現代まで	寺崎 昌男 教授 (立教学院)
24	アカデミック・ライティングを指導する	井下 千以子 教授 (桜美林大学)
25	学習と教育の科学	市川 伸一 教授 (東京大学)
26	研究倫理シリーズ第2回 院生指導においていかに研究倫理を育てるか	Gabriele Lakomski 教授 (メルボルン大学高等教育研究センター)

図表 8 PDPonline のトップページ (http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/)

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター Center for Professional Development  
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

専門性開発プログラム(Professional Development Program)の動画配信を行っています。

キーワード検索

**新着動画** ▶ すべて表示

- 学習効果高めるICTの活用方法 ～反転授業も含めた授業設計～**  
講師：向後 千春 (早稲田大学)  
実施日：2014.11.17
- 人文・社会科学における研究キャリア形成～現状と若干の提言**  
講師：佐藤 裕 (国際教養大学)  
実施日：2014.10.16
- 東北大学生の履修行動と学修成果**  
講師：串本 剛 (東北大学)  
実施日：2014.09.10

**よく見られている動画** ▶ すべて表示

- 学習効果高めるICTの活用方法 ～反転授業も含めた授業設計～**  
講師：向後 千春 (早稲田大学)  
実施日：2014.11.17
- 認知科学と学習の原理・応用**  
講師：佐伯 祥 (信濃教育会教育研究所長, 東京大学名誉教授)  
実施日：2013.10.08
- 授業づくり：準備と運営**  
講師：邑本 俊亮 (東北大学)  
実施日：2014.07.11

キーワード タグクラウド

**カテゴリ**

- 高等教育リテラシー形成 (13)
- 専門教育指導力形成 (2)
- 学生支援力形成 (3)
- マネジメント力形成 (8)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構  
東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター

図表 9 個別のコンテンツのページ例

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター Center for Professional Development  
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

キーワード検索

教育関係共同利用拠点  
国際連携を活用した大学教育開発の支援拠点  
Educational Development Core in International Cooperation  
Joint Educational Development Center

**授業づくり：準備と運営**  
邑本 俊亮  
(東北大学 災害科学国際研究所 教授)

00:01 | 07:14

前のチャプター 次のチャプター

**授業づくり：準備と運営 (チャプター1)**  
講師：邑本 俊亮 (東北大学)  
実施日：2014.07.11 全99分 視聴数：320回

学生の前で授業を行うことは大学教員の当然の職務となっています。しかし、授業が思ったようにならない、悩んでいる教員もいることでしょう。準備したことが十分に話せなかった、学生が授業内容を理解してくれない、おしゃべりが多い、居眠りしている、などなど、教員の頭を悩ませる状況は数多く存在します。授業を成功させるためにはどうすればよいのでしょうか。本動画では、1回の講義形式の授業を念頭に置いて、学生が集中し、内容を十分に理解できるような授業をつくるためにはどのような点に留意する必要があるのか、どんな準備をして、いかに授業を展開するとよいのかについて、学習者の認知面・心理面から解説を行います。

カテゴリ： 高等教育リテラシー形成

**この動画のチャプター**

- ▶ (1) 講義概要
- ▶ (2) 伝わらない理由
- ▶ (3) 理解の認知プロセス
- ▶ (4) 授業を組み立てる
- ▶ (5) 知識の活性化
- ▶ (6) メンタルモデルの構築
- ▶ (7) 学生の意欲を高める
- ▶ (8) 気持ちのコントロール

**動画をおすすめする**

ツイート 0  
いいね! シェア 10  
Pocket 1  
G+ 0

**カテゴリ**

- 高等教育リテラシー形成 (13)
- 専門教育指導力形成 (2)
- 学生支援力形成 (3)
- マネジメント力形成 (8)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構  
東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター

### 【評価および課題】

2014年度は、2013年度から導入した、講演依頼時における動画化についての説明と依頼項目の明確化、動画化マニュアルの配布、著作権への配慮を依頼する文書の配布、運営担当者用のチェック項目の作成等を継続して実施し、スムーズな運営を実現することができた。2013年度の課題となっていた、外部への編集業務委託については、2014年度については実施せず、CPDのスタッフと教員のみで実施する体制とした。スタッフ数が限られていることや、その他業務と並行して遂行する必要があるため、編集後の動画のチェック体制に一部滞りが生じることもあった。2015年度には、これらの工程、進捗状況を各スタッフが確認し合いながら業務を進められる体制を整えたい。

またPDPonlineについては、他大学の教職員からの問い合わせも増えており、これまでの設計や実現に関する質問に加え、実際に自大学のFD/SDに利用したいという問い合わせも受けるようになった。2015年度は、こうした依頼への正式な対応のプロセスを明確化するとともに、コンテンツ公開から2年以上経過している動画の公開継続の有無等に関する講師への確認の書面等の在り方を明らかにしていく必要がある。

## 2-6. 研究成果の発表・出版

### (1) 目標

- ① 研究的出版及び主に実践的な内容を中心としたPDブックレットを継続して刊行する。
- ② 研究成果を学会や研究会等で発表し、社会に還元する。

### (2) 実施状況

- ・ **大学教員準備プログラムについて（提言）の作成** 2011年度から3年間の国内調査研究および2010年から5年間のプログラムの実践から得られた知見を整理し、「日本の大学における大学教員準備プログラムについて（提言）」を作成した。
- ・ **研究成果の出版** 2014年度は、科学研究費補助金（B）「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究」（代表：羽田貴史）の成果の一環として高等教育ライブラリ9『研究倫理の確立を目指して—国際動向と日本の課題』（東北出版会、2015年3月）を叢書として刊行した。
- ・ **ブックレットの刊行** 大学教員としての人生において困難にぶつかった際、それをどう打破し前進してきたのか、ベテランの先生方に次世代を担う若手教員への励ましの意味も込めて自身のブレイク・スルーについてまとめたPDブックレットVol.6『大学教員のブレイク・スルー』（2015年2月）を刊行した。冊子は学内の教員および大学院後期課程の学生全員、また、全国の高等教育機関等、各種セミナー等で配布した。

### (3) 評価及び課題

今年度は拠点事業最終年度であり、提供プログラムの質を高めるために精撰や改善を中心に行ったこと、また、新しい人材の確保ができなかったため、新規の調査研究に着手するに至らなかった。ただし、これについては、別途採択されている「国立大学改革強化推進経費」の獲得により、次年度以降、様々な環境整備が推進されることで継続的な事業推進、成果の公表を可能とする計画である。

## 2-7. 他機関との連携

大学教職員のキャリア・ステージに対応したプログラムを提供するため、本拠点事業5年間で、大学教員準備プログラム（PFFP）にアメリカ・UCバークレー、新任教員プログラムおよび大学マネジメント分野においてオーストラリア・メルボルン大学、大学教育人材育成プログラムとしてカナダ・キーンズ大学との協働体制が構築された。また、各機関からの先進的なプログラムを国内各種プログラムに反映させ、充実化を図り、質の高いプログラムを提供することができた。

また、科研費研究「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究」をはじめた行動規範教育では、大学間連携事業「研究者育成の為の行動規範教育の標準化と教育システムの全国展開」（信州大学他）による、ICTを活用した「CITI Japan プログラム」の提供を行った。また、日本学術振興会が進める行動規範教育の普及として、研究倫理教育の教科書となる『科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得』（丸善出版、2015年3月）の作成に協力した。学士課程教育における学習成果測定開発推進として、2012年度より加入している大学IRコンソーシアム（同志社大学・北海道大学他）では、IRの推進を通じて連携大学間の「相互評価」を活かした教育の質保証の枠組み整備に貢献している。

## 2-8. 第2期教育関係共同利用拠点事業に向けて

### 2-8-1 第2期の構想

第2期は、大学教育支援センター内部の議論をもとに、第1期の基本コンセプト（①教員のキャリア・ステージに対応した能力開発プログラムを開発・提供、②職員の専門性を高めるプログラムを開発・提供、③各大学で専門性開発に取り組む中核人材を育成）を引き継ぐとともに、新たに、①専門指導力育成のための現職教育プログラムの体系化、②キャリア・ステージをジュニア・シニアに構造化し、一貫プログラムを開発・提供、④EMLPを充実したアカデミック・リーダー育成プログラム（LAD）を履修証明プログラムとして提供、⑤ポータルサイトの構築により、日本全体の教育機関にプログラムを提供する「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発」を構想した。

専門指導力育成は、大学教育の質向上には、分野の教育内容論が不可欠であり、欧米では、自然科学・工学・数学（STEM: Science, Technology & Mathematics）の分野について、小学校から高等教育まで組織的に教育内容・方法の開発が進められていることを視野に入れた。

また、その内容は、個々の授業をスムーズに遂行する能力だけでなく、学生の学習メカニズムや教授＝学習過程の理解、専門分野における最先端の研究成果をカリキュラムに構造化し、授業科目に反映させ、学生の理解を促進させる教材・教育方法を進める専門教育指導力の形成であり、高等教育における教科教育学の構築が必要である。英米圏の大学が進めている Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) の推進として構想した。

### 2-8-2 申請結果

申請の結果、採択はされたが、平成27年度の1年間で、①学生の多様性への配慮、②共同利用運営委員会の構成を東北大学以外に開くことで改めて申請する条件が付けられ、これへの対応を明確にして申請を行う。



参考資料





### 3-1. 大学教育力開発事業(高度教養教育)

#### 大学教育力開発事業(高度教養教育)の公募要項

1. **公募事業の目的** 学士課程教育及び大学院教育における高度教養教育を開発し、東北大学の教育を充実させるとともに、全国の大学にモデルとなる教育実践を提供すること
2. **高度教養教育の内容**

専門分野を超えた鳥瞰力、問題発見・解決力、異文化・国際理解力、コミュニケーション力、リーダーシップ、組織力を育成する目的を持ち、内容および方法的に次のような取組を含むもの

  - (1) 内容
    - ・国際問題などを取り上げ、留学生と日本人学生とが共に学ぶ国際共修科目
    - ・専門分野全体を統合する視点を身に着ける分野総合科目
    - ・社会科学と自然科学双方のアプローチからの複眼的思考を培う学際・融合科目
    - ・科学的知見だけでは解決できない複雑な問題解決に取り組むトランス・サイエンス科目など
    - ・その他、高度教養教育にふさわしい内容を備えた科目。
  - (2) 方法
    - ・建設的協働学習、問題解決型学習、課題探求型学習など学生の主体的能動的学習を取り入れたもの
3. **事業の対象となる科目**
  - (1) カテゴリー1

現在開講されている授業科目(全学教育科目、学部専門教育科目、大学院教育科目を問わない)において、上記2に該当し、調査研究、教材の開発、資料収集等事前準備を行い、授業の改善と充実を目的とするもの
  - (2) カテゴリー2

現在は開講されていないが、平成26年度第1 Semester以降開講予定の授業科目(全学教育科目、学部専門教育科目、大学院教育科目を問わない)において、上記2に該当し、調査研究、教材の開発、資料収集等事前準備を行うもの
  - (3) カテゴリー3

正規の教育科目ではないが、上記2に該当し、平成25年度に実施する教育プログラム(例: 学生による国内外の訪問交流学习等)
4. **応募締切** 平成25年11月18日(月)、書類審査、ヒアリングを経て11月末決定
5. **応募資格** 本学教員で、東北大学高等教育開発推進センター教員との共同事業であること。なお、高等教育開発推進センターとの共同体制についてご相談の方は、大学教育支援センターにてサポートします。(要問合せ)
6. **応募要領** 指定した書式に必要事項を記入して学内便あるいはメールで提出すること
7. **課題の採択について** 応募された課題についてヒアリングを含めた審査を行い、可否を決定する。全学で8件程度、1件あたり50万円程度の開発・実施費を提供する。予算は年度内に執行の上、具体的な成果等について報告書を提出すること。

8. 大学教育力開発事業（高度教養教育） 採択科目一覧

	申請者氏名	職名	所属	事業名称	配分額 (円)
1	出江 紳一	教授	医工学研究科	「コーチング概論」授業開発事業	498,000 H25:384,000 H26:114,000
2	石井 誠一	准教授	医学系研究科	「よくある症状から患者さんへのアプローチの仕方を学ぼう」： 医学科1年次の新しい融合型PBLカリキュラム導入	500,000 H25:360,000 H26:140,000
3	工藤 成史	教授	工学研究科 応用物理学専攻	「生命倫理」、「医の倫理」のネット配信を目指した映像記録	500,000 H25:472,000 H26:28,000
4	村上 祐子	准教授	文学研究科 国際交流室	科学を論理的に伝えあうための文系向け授業開発	500,000 H25 年度終了
5	杉本 和弘	准教授	高等教育開発推進センター	地域連携を活用したフィールドワーク型国際共修科目の開発	400,000 H25 年度終了
6	水松 巳奈	助手	グローバルラーニングセンター	韓国における短期海外研修（スタディアブロードプログラム）開発	490,000 H25 年度終了
7	本江 正茂	准教授	工学研究科 都市・建築学専攻	スタジオ形式によるデザイン教育先進事例調査	500,000 H25 年度終了
8	猿渡 啓子	教授	経済学研究科	国際共修科目によるコンピテンシー開発型授業の調査	492,000 H25 年度終了
総額					3,880,000

※平成 25 年度配分額：3,598,000 円





※平成 26 年度配分額： 282,000 円

### 3-2. PDP（専門性開発プログラム）

#### 3-2-1. PD（専門性開発）分野一覧

ゾーン	カテゴリー	エレメント
高等教育のリテラシー 形成関連 コード：L (Literacy)	高等教育論 L-01	高等教育の歴史，大学の理念，大学制度・組織，入試制度，関連法制，管理運営，国内外の動向など広く高等教育に関する知識・教養に関するもの
	大学教員論 L-02	大学教師の役割・責務，倫理，キャリア形成など大学教員に関する知識
	教育内容・ カリキュラム論 L-03	教養教育論，カリキュラム論など教授する教育内容の教育論に関するもの
	教授技術論 L-04	授業の設計，シラバスの書き方，学習と教授の心理学，教育測定の原理と方法，プロジェクトベースラーニングの進め方，論文・レポート執筆の指導など教授技術に関するもの
専門教育での 指導力形成関連 (各専門分野) コード：S (Specialty)	学習指導法 S-01	専門分野の学習方法の指導法
	実験指導法 S-02	実験の計画，準備，実施，結果の整理，施設・設備・機器類の使用，危険の防止，倫理的ガイドライン等についての指導法
	研究指導法 S-03	研究テーマの設定方法，関連文献の検索方法，プレゼンテーションの方法，論文のまとめ方，研究費の申請方法等についての指導法
学生支援力 形成関連 コード：W (Health & Welfare)	学生論 W-01	現代学生論，大学生の発達と学習，学生の生活問題，学生理解とカウンセリングなど学生理解と指導に関するもの
	学生相談 W-02	大学コミュニティへの適応支援の技術，カウンセリングの基礎，コンサルテーションの基礎，グループワークの基礎，人間関係調整法等の指導
	キャリア教育 W-03	進路選択の支援方法，キャリア形成の支援方法，経済的自立の指導
	健康教育 W-04	健康な生活習慣形成の指導法，趣味や余暇活用の指導法
マネジメント力 形成関連 コード：M (Management)	組織運営論 M-01	大学の管理運営，大学のリーダーシップ論，危機管理
	大学人材開発論 M-02	FD/SD 論、教職員開発プログラム作成，キャリア・ステージ論
	教育マネジメント M-03	質保証，入口管理，カリキュラム・マネジメント，出口管理




3-2-2. PD セミナー実施一覧

No.	開催日	事業名	備考
<b>高等教育のリテラシー形成関連 コード : L (Literacy)</b>			
1	5/16	<p><b>第20回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [11]）「グローバル人材の育成に向けて - これからの高等教育・大学教育における課題」</b></p> <p>日時：2014年5月16日（金）13:00~17:30            場所：仙台国際センター2階・大会議室『橘』</p> <p>基調講演1「グローバル社会に求められるもの」            岩本 渉（文部科学省国際総括官付国際交渉分析官）</p> <p>基調講演2「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」            山口 昌弘（東北大学総長特別補佐）</p> <p>現状報告1「英会話の先にあるもの - 批判的思考とコミュニケーション能力の育成 -」            ダニエル・アイコースト（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p>現状報告2「高大、真の接続の観点から」            松井 徹朗（北海道旭川北高等学校・教諭）</p> <p>現状報告3「グローバル化と高校教育」            東盛 敬（沖縄県立宜野座高等学校・教頭）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 171名(学内: 42名・学外: 129名)</p>	
2	6/24	<p><b>研究倫理シリーズ 第1回「盗用と言われない英語論文の執筆 - 大学教員は何を指導すべきか -」</b></p> <p>日時：2014年6月24日（火）15:30~18:00            場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 A 棟 A307</p> <p>講演「責任ある研究活動とは何か」            羽田 貴史（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>ワークショップ「盗用と言われない英語論文の執筆」            吉村 富美子（東北学院大文学部英文学科・教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 46名(学内: 9名・学外: 37名)</p>	
3	7/11	<p><b>「授業づくり：準備と運営」</b></p> <p>日時：2014年7月11日（金）15:00~17:00            場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C301</p> <p>講師：邑本 俊亮（東北大学災害科学国際研究所・教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 25名(学内: 19名・学外: 6名)</p>	
4	7/18	<p><b>「授業デザインとシラバス作成」</b></p> <p>日時：2014年7月18日（金）14:00~17:00            場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C 棟 C301</p> <p>講師：串本 剛（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 19名(学内: 13名・学外: 6名)</p>	

No.	開催日	事業名	備考
5	8/23	<p>「比較からみる世界の高等教育 ―グローバル時代の人材育成・獲得を考える―」</p> <p>日時：2014年8月23日(土) 10:00~12:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 B 棟 B201</p> <p>講師：杉本 和弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授）</p> <p>参加者数: 30名(学内: 13名・学外: 17名)</p>	
6	9/1	<p>「アカデミック・ライティングを指導する」</p> <p>日時：2014年9月1日(月) 13:00~16:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A106</p> <p>講演1「アカデミック・ライティングとは？」 井下 千以子（桜美林大学・教授）</p> <p>講演2「自然科学総合実験(授業)におけるレポート指導の取組み」 関根 勉（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>講演3「龍谷大学ライティングセンターにおけるレポート・論文指導の取組み」 島村 健司（龍谷大学ライティングセンター・スーパーバイザー）</p> <p>参加者数: 57名(学内: 33名・学外: 24名)</p>	
7	9/5	<p>「Developing Degree Programs with Tuning: The History Pre-Major at Utah State University」</p> <p>日時：2014年9月5日(金) 14:00~17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>Presentation 1 "Tuning in a Nutshell – Purpose, Process, and Policy Implications for Japan"(in Japanese) Satoko Fukahori, Senior Researcher, National Institute for Educational Policy Research.</p> <p>Presentation 2 "Developing the History Discipline Core and the History Program at USU" Daniel McInerney, Professor and Associate Department Head, Department of History, Utah State University</p> <p>参加者数: 18名(学内: 14名・学外: 4名)</p>	
8	9/26-27	<p>「Planning and Managing Active Learning in English」</p> <p>日時：2014年9月26日(金)~27日(土)</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス講義棟講義棟 C 棟 C101</p> <p>講師：Todd Enslen（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師） Daniel Eichhorst（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p>参加者数: 22名(学内: 16名・学外: 6名)</p>	
9	10/17	<p>「学習と教育の科学 ―認知理論から大学の授業改革を考える―」</p> <p>日時：2014年10月17日(金) 15:30~17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 A 棟 A307</p> <p>講師：市川 伸一（東京大学大学院教育学研究科・教授）</p> <p>参加者数: 35名(学内: 19名・学外: 16名)</p>	



No.	開催日	事業名	備考
10	11/1-3	<p>「教育を科学する－先端的プログラムから学ぶ（兼）NFP 合宿セミナー」</p> <p>日時：2014年11月1日（土）～3日（月）</p> <p>場所：宮城蔵王ロイヤルホテル</p> <p>講師：Sophie Arkoudis（University of Melbourne・准教授） Chi Baik（University of Melbourne・講師） Gabriele Lakomski（University of Melbourne・教授）</p> <p>参加者数：17名(学内：13名・学外：4名)</p>	
11	11/4	<p>研究倫理シリーズ第2回 「院生指導においていかに研究倫理を育てるか－メルボルン大学の事例－」</p> <p>日時：2014年11月4日（火）13:00～15:00</p> <p>場所：東北大学青葉山キャンパス工学研究科総合研究棟 110</p> <p>講師：Gabriele Lakomski(University of Melbourne・教授)</p> <p>参加者数：29名(学内：22名・学外：7名)</p>	
12	12/4	<p>「流動化する民主主義：グローバル社会の担い手を育てる大学の教育の課題」</p> <p>日時：2014年12月4日（木）15:00～17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 6階大ホール</p> <p>講師：猪口 孝（新潟県立大学学長）</p> <p>参加者数：25名(学内：6名・学外：19名)</p>	
13	12/17	<p>GLC セミナー「学生レポート課題を正しく評価する：ICE モデルによる授業改善」</p> <p>日時：2014年12月17日（水）16:00～17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：Sue Fostatay Young（クィーンズ大学・博士）</p> <p>参加者数：19名(学内：14名・学外：5名)</p>	
14	12/18	<p>「アクティブラーニングを促す教室空間の創造－学生の学習経験へのインパクト－」</p> <p>日時：2014年12月18日（木）13:30-15:30</p> <p>場所：東北大学 川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C103</p> <p>講師：Andy Leger(クィーンズ大学・准教授)</p> <p>参加者数：29名(学内：22名・学外：7名)</p>	











No.	開催日	事業名	備考
15	1/26	<p>「大学全入時代の大学教育の課題 –すべての学生に高い学習成果を保証するために–」</p> <p>日時：2015年1月26日（月）13:00～17:00</p> <p>場所：東北大学 百周年記念会館川内萩ホール</p> <p>報告1「学生が成長する環境とは何か -ボーダーフリー大学の現実をふまえて-」 葛城 浩一（香川大学大学教育開発センター・准教授）</p> <p>報告2「選抜力低下と大学教育 -ボーダーフリーな学生への支援とその可能性-」 三宅 義和（神戸国際大学経済学部・教授）</p> <p>報告3「学力形成と教育マネジメントの役割 -金沢工業大学の実践-」 西村 秀雄（金沢工業大学基礎教育部・教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 38名(学内: 19名・学外: 19名)</p>	
16	2/4	<p>「中国における大学教育の内部質保証 –北京師範大学の学士課程教育を事例に–」</p> <p>日時：2015年2月4日（水）13:30～15:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟 102</p> <p>講師：高 益民（北京師範大学教授、名古屋大学高等教育研究センター・客員研究員）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 11名(学内: 10名・学外: 1名)</p>	
<b>専門教育での指導力形成関連（各専門分野） コード：S (Speciality)</b>			
17	9/25	<p>「グローバル時代の英語教育 –高大5年間で伸ばす英語運用能力」</p> <p>日時：2014年9月25日（木）13:00～17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟 M301</p> <p>基調講演「高大5年間で英語教育を設計する」 浅川 照夫（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>報告1「高校におけるコミュニケーション重視の英語教育の試み」 小林 昭文（聖徳学園高等学校・教諭）</p> <p>報告2「SGH の取組みと英語教育」 村上 孝志（宮城県仙台二華高等学校・教諭）</p> <p>報告3「反転学習で伸ばす英語運用能力」 鈴木 康明（宮城学院高等学校・教諭）</p> <p>報告4「CALL システムで伸ばす英語運用能力—東北大学での実践事例」 橋 由加（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授）</p> <p>報告5「東北大学の専門教育で伸ばす英語運用能力 –工学部が求める到達点」 岡部 朋永（東北大学大学院工学研究科・教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 73名(学内: 24名・学外: 49名)</p>	

No.	開催日	事業名	備考
18	10/25	<p>「言語・文化教育センター設立記念セミナー「グローバル時代における外国語教育の新たな可能性」</p> <p>日時：2014年10月25日（土）11:00～17:00</p> <p>場所：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール会議室</p> <p>基調講演「グローバル時代に求められる大学の言語教育」 鳥飼 玖美子（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科・特任教授）</p> <p>外国語教授法セミナー「東北大学における外国語教育の新たな挑戦」</p> <p>(1)英語 橘 由加（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授） Rick Meres（同・非常勤講師）</p> <p>(2)スペイン語 Cecilia Silva（同・講師）</p> <p>(3)中国語 張 立波（同・講師）</p> <p>(4)日本語 菅谷 奈津恵（同・准教授） Todd Enslen（同・講師）</p> <p>コメント 志柿 光浩（東北大学大学院国際文化研究科・教授）</p> <p>参加者数: 70名(学内: 41名・学外: 29名)</p>	
19	12/11	<p>「Classroom English: Pronunciation and Expressions」</p> <p>日時：2014年12月11日（木）16:30～19:00</p> <p>場所：東北大学 川内北キャンパス講義棟A棟 A307</p> <p>講師：Todd Enslen（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師） Vincent Scura（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p>参加者数: 21名(学内: 15名・学外: 6名)</p>	
<p>学生支援力形成関連 コード：W (Health &amp; Welfare)</p>			
20	9/29	<p>「キャリア指導の理論と実践」</p> <p>日時：2014年9月29日（月）14:00～16:30</p> <p>場所：東北大学 川内北キャンパス講義棟A棟 A307</p> <p>講演1「新卒就職システムと大学におけるキャリア形成支援」 小杉 礼子（労働政策研究・研修機構・特任フェロー）</p> <p>講演2「大学におけるキャリア教育・支援ーこれまでとこれから」 児美川 孝一郎（法政大学経営学研究科・教授）</p> <p>参加者数: 35名(学内: 16名・学外: 19名)</p>	
21	12/16	<p>「発達障害学生への『合理的配慮』と支援の在り方」</p> <p>日時：2014年12月16日（火）13:00～16:00</p> <p>場所：東北大学 川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟6階大ホール</p> <p>講演「発達障害学生支援の現状と法が求める合理的配慮」 青野 透（金沢大学大学教育開発・支援センター・教授）</p> <p>ワークショップ 山中 淑江（立教大学現代心理学部 教授） 池田 忠義（東北大学高度教養教育学生支援機構・准教授） 長友 周悟（同・講師） 堀 匡（同・助教）</p> <p>参加者数: 41名(学内: 25名・学外: 16名)</p>	



No.	開催日	事業名	備考
マネジメントカ コード：M (Management)			
22	6/14	<p>「職員開発論 -OJD（業務開発行動）を通じた職員の企画提案力育成-」</p> <p>日時：2014年6月14日（土）13:30～15:30  場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 B棟 B201  講師：篠田 道夫（桜美林大学大学アドミニストレーション研究科・教授）</p> <p>参加者数: 42名(学内: 23名・学外: 19名)</p>	
23	8/23	<p>「SD/PD論 -大学教職員のプロフェッショナリズムをいかに育むか-」</p> <p>日時：2014年8月23日（土）13:00～15:00  場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 B棟 B201  講師：大場 淳（広島大学高等教育研究開発センター・准教授）</p> <p>参加者数: 38名(学内: 16名・学外: 22名)</p>	
24	8/26	<p>平成 26 年 東北地区大学図書館協議会合同研修会「アクティブラーニングとは何か？その実践とは？：アクティブラーニングを通じて大学図書館と大学のつながりを考える」</p> <p>日時：2014年8月26日（火）13:00～17:00  場所：東北学院大学土樋キャンパス 8号館 3階第3・第4会議室</p> <p>基調講演「アクティブラーニングの共通理解」  杉本 和弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）</p> <p>教職協働事例発表 1「数学・物理教員、工学基礎教育センターとの連携事例」  東北学院大学 間宮美智子（東北学院大学多賀城キャンパス図書館）</p> <p>教職協働事例発表 2「図書館が提案する情報リテラシー教育（データベース講習会・図書館利用講習会）」  弘前大学 藤井真嗣（弘前大学附属図書館資料管理グループ雑誌情報担当）</p> <p>教職協働事例発表 3「英語多読教育におけるアクティブラーニング」  東北大学 Ben Shearon（東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師）  Daniel Eichhorst（同 講師）</p> <p>ワークショップ・ファシリテーター：杉本和弘、稲田ゆき乃、佐藤恵、八巻千穂、寺崎宏美、芦原ひろみ、柳原幸子</p> <p>参加者数: 45名(学内: 30名・学外: 15名)</p>	




No.	開催日	事業名	備考
25	9/10	<p><b>CIR キックオフセミナー「学修成果検証に基づく教学マネジメントの推進と課題」</b></p> <p>日時：2014年9月10日（水）13:00～17:00  場所：東北大学片平キャンパス金属材料研究所2号館講堂</p> <p>「学修成果測定をめぐる国際動向」  杉本 和弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授）</p> <p>「東北大学生の履修行動と学修成果」  串本 剛（東北大学高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p>「工学部・工学研究科における6年一貫教育の推進」  須藤 祐子（東北大学工学研究科工学教育院・特任准教授）</p> <p>「理学部物理系におけるデータに基づく教育改善の取り組み」  石川 洋（東北大学理学研究科物理学専攻・准教授）</p> <p>「北海道大学における学修成果検証の取組み」  細川 敏幸（北海道大学高等教育推進機構・教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 61名(学内: 29名・学外: 32名)</p>	
26	11/17	<p><b>IDE 大学セミナー「大学教育における ICT 活用の光と影」</b></p> <p>日時：2014年11月17日（月）13:00～17:25  場所：仙台ガーデンパレス 2F 鳳凰</p> <p>基調講演「デジタル知識革命と大学の未来 ～ポスト・グーテンベルク時代の教育に向けて～」  吉見 俊哉（東京大学副学長，大学院情報学環・教授）</p> <p>講演1「学習効果を高める ICT の活用法 ～反転授業も含めた授業設計～」  向後 千春（早稲田大学人間科学学術院・教授）</p> <p>講演2「本当は怖い『コピペ』問題 ～今後の日本の国際競争力への懸念」  杉光 一成（金沢工業大学大学院 工学研究科・教授）</p> <p>講演3「情報化社会と情報倫理教育」  篠澤 和久（東北大学大学院 情報科学研究科・准教授）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 79名(学内: 52名・学外: 27名)</p>	
27	12/20	<p><b>「若手職員のための大学職員論(3) –若手の力、大学の未来–」</b></p> <p>日時：2014年12月20日（土）13:00～17:40  場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講演1「若手主導による大学イメージ戦略：名城大学が描く未来像」  本山 慶樹（名城大学入学センター・課長）</p> <p>講演2「教職協働に基づく大学教育の改善：京都産業大学が進めるコーオプ教育」  大西 達也（京都産業大学コーオプ教育研究開発センター・課長）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 19名(学内: 12名・学外: 7名)</p>	

No.	開催日	事業名	備考
28	10/11, 12/6, 1/31	「東北大学職員のための「大学変革力」育成講座（3回シリーズ）」[学内限定] 日時：2014年10月11日（土）、12月6日（土）、2015年1月31日（土） 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 参加者数: 18名(学内: 18名・学外: 0名)	
<b>正午 PD 会</b>			
29	6/11	正午 PD 会 第1回「Academic Integrity 日本と世界の動向」 日時：2014年6月11日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：羽田貴史教授（東北大学高度教養教育・学生支援機構・副機構長） 参加者数: 38名(学内: 38名・学外: 0名)	
30	6/26	正午 PD 会 第2回「工学教育院とレベル認定制度～工学部は何を考えているのか？」 日時：2014年6月26日（木）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：安藤晃教授（東北大学高度教養教育・学生支援機構・副機構長） 参加者数: 27名(学内: 27名・学外: 0名)	
31	7/10	正午 PD 会 第3回「『大学』を学ぶコンテンツの設計とアクティブ・ラーニング」 日時：2014年7月10日（木）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：杉本和弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授） 参加者数: 17名(学内: 17名・学外: 0名)	
32	10/8	正午 PD 会 第4回「高等学校ウォッチング 入試開発室の活動の一端」 日時：2014年10月8日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101 講師：鈴木 敏明（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授） 参加者数: 19名(学内: 19名・学外: 0名)	

No.	開催日	事業名	備考
33	10/23	<p><b>正午PD会 第5回「認知言語類型論と第二言語習得：移動・状態変化事象の英語表現の習得をめぐる」</b></p> <p>日時：2014年10月23日（木）12:10～12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：Ryan Spring（高度教養教育・学生支援機構・講師）</p> <p>参加者数：18名(学内：18名・学外：0名)</p>	
34	11/5	<p><b>正午PD会 第6回「今、東北大学で何が起きているのか：グローバル人材育成、スーパーグローバル大学創成支援で『私達』が起こす教育国際化イノベーション」</b></p> <p>日時：2014年11月5日（水）12:10～12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：末松和子（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>参加者数：23名(学内：23名・学外：0名)</p>	
35	11/19	<p><b>正午PD会 第7回「自然科学総合実験の運営を支える出席・成績情報システム」</b></p> <p>日時：2014年11月19日（水）12:10～12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：田嶋 玄一（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授）</p> <p>参加者数：13名(学内：13名・学外：0名)</p>	
36	12/10	<p><b>正午PD会 第8回「ともに学ぼう、ともに育とう、ともそだち」</b></p> <p>日時：2014年12月10日（水）12:10～12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C棟 C103</p> <p>講師：足立 佳菜（東北大学高度教養教育・学生支援機構・助手） 鈴木 学（東北大学高度教養教育・学生支援機構・助手）</p> <p>参加者数：20名(学内：20名・学外：0名)</p>	
37	12/17	<p><b>正午PD会 第9回「学生ボランティア支援の教育的意義～震災復興のただ中で」</b></p> <p>日時：2014年12月17日（水）12:10～12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 108</p> <p>講師：藤室 玲治（東北大学高度教養教育・学生支援機構・特任准教授）</p> <p>参加者数：16名(学内：16名・学外：0名)</p>	

No.	開催日	事業名	備考
38	1/14	<p><b>正午PD会 第10回「東北大学における学生相談、特別支援の‘今、これから’」</b></p> <p>日時：2015年1月14日(水) 12:10~12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：吉武 清實（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>参加者数：22名(学内：22名・学外：0名)</p>	
39	1/29	<p><b>正午PD会 第11回「教員に必要な医学的知識とは？」</b></p> <p>日時：2015年1月29日(木) 12:10~12:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101</p> <p>講師：木内 喜孝（北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>参加者数：23名(学内：23名・学外：0名)</p>	
<b>健康科学セミナー</b>			
40	10/28	<p><b>2014年度第1回健康科学セミナー 「保健管理に関わる最近の話題」</b></p> <p>日時：2014年10月28日(火) 16:30~17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2Fゼミナール室</p> <p>講師：木内 喜孝（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>北 浩樹（東北大学高度教養教育・学生支援機構 助教）</p> <p>参加者数：15名(学内：15名・学外：0名)</p>	
41	11/25	<p><b>2014年度第2回健康科学セミナー 「物質関連障害--薬物やめませんか？それとも人間やめませんか？」</b></p> <p>日時：2014年11月25日(火) 16:30~17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2Fゼミナール室</p> <p>講師：伊藤 千裕（東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授）</p> <p>参加者数：15名(学内：15名・学外：0名)</p>	
42	12/9	<p><b>2014年度第3回健康科学セミナー 「学生の尿を診る-学生におけるピンク尿症候群の実態-」</b></p> <p>日時：2014年12月9日(火) 16:30~17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2Fゼミナール室</p> <p>講師：小川 晋（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）</p> <p>参加者数：12名(学内：12名・学外：0名)</p>	



No.	開催日	事業名	備考
43	1/20	<p>2014 年度第 4 回健康科学セミナー 「喫煙と循環器疾患」</p> <p>日時：2015 年 1 月 20 日（火）16:30～17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス保健管理センター2F セミナール室</p> <p>講師：佐藤 公雄（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）</p> <p>参加者数: 12 名(学内: 12 名・学外: 0 名)</p>	
<b>その他</b>			
44	5/14	<p>平成 26 年度東北大学新任教員研修</p> <p>日時：2014 年 5 月 14 日（水）13:30～16:45</p> <p>場所：東北大学百周年記念会館川内萩ホール</p> <p>「研究者としての倫理・ミスコンダクトについて」 伊藤 貞嘉（東北大学・理事）</p> <p>「教育者としての倫理・ハラスメントについて」 吉武 清實（東北大学高度教養教育・学生支援機構・教授）</p> <p>「高等教育の動向と大学教員の役割」 羽田 貴史（東北大学高度教養教育・学生支援機構・副機構長）</p> <p>「東北大学の教育と学生」 花輪 公雄（東北大学・理事）</p> <p>「新任教員への期待：未来を創造する東北大学の力へ」 里見 進（東北大学・総長）</p> <p>参加者数: 291 名(学内: 291 名・学外: 0 名)</p>	
45	6/23	<p>「Seminar on University Globalization “How to Improve English Quality of Japanese Students”」</p> <p>日時：2014 年 6 月 23 日（月）10:30～17:35</p> <p>場所：東北大学片平キャンパスさくらホール</p> <p>参加者数: 名(学内: 名・学外: 名)</p>	
46	6/28	<p>「International Symposium on University Globalization 2014 - How to Foster Skilled Students and Young Staff -」</p> <p>日時：2014 年 6 月 28 日（土）10:00～17:35</p> <p>場所：東北大学東京分室</p> <p>参加者数: 名(学内: 名・学外: 名)</p>	

No.	開催日	事業名	備考
47	7/16	<p><b>グローバル化社会におけるコンピテンシーを具体化する高度教養育の開発研究「学習成果アセスメントをめぐる国際動向 TUNING-AHELO を中心に」</b></p> <p>日時：2014年7月16日（水）13:00～15:00  場所：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 101  講師：深堀 聡子（国立教育政策研究所高等教育研究部・総括研究官）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 13名(学内: 11名・学外: 2名)</p>	
48	7/25	<p><b>高度教養教育・学生支援機構発足記念国際シンポジウム「21世紀グローバル世界が求める人間像と教養教育」</b></p> <p>日時：2014年7月25日（金）10:00～16:30  場所：仙台国際センター 大会議室「橘」  趣旨説明「東北大学高度教養教育・学生支援機構の設立と展望」</p> <p>花輪 公雄（東北大学理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）・高度教養教育・学生支援機構長）</p> <p>基調講演 1「21世紀を生きるグローバル市民をどう育成するかー大学教育に期待すること」</p> <p>松浦 晃一郎（公益財団法人日仏会館理事長、一般社団法人アフリカ協会会長、元ユネスコ事務局長）</p> <p>基調講演 2「Why Liberal Education Matters: 21st Century Challenges」</p> <p>アン・フェレン（Senior Fellow at AAC&amp;U, Former Provost of American University in Bulgaria）</p> <p>パネルディスカッション</p> <p>桜井 勝延（南相馬市長）※インターネット中継  鈴木 基之（東京大学名誉教授、国際連合大学・特別学術顧問、東京工業大学・監事）  黒崎 伸子（特定非営利活動法人国境なき医師団日本・会長）  松尾 基之（東京大学教養学部附属教養教育高度化機構長）  花輪 公雄</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 126名(学内: 78名・学外: 48名)</p>	
49	10/16	<p><b>院生キャリアセミナー [学内限定]</b></p> <p>日時：2014年10月16日（木）16:30～19:00  場所：東北大学川内萩ホール会議室</p> <p>講演 1 「人文・社会科学における研究キャリア形成・現状と若干の提言」  佐藤 裕（国際教養大学・助教）</p> <p>講演 2 「理系大学院生のキャリア展望ーポストドクタ ー調査の経験から」  岩崎久美子（国立教育政策研究所・総括研究官）</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 35名(学内: 35名・学外: 0名)</p>	

2014年度PDプログラム参加者総数  
計 1,888名（学内 1,290名・学外 598名）

### 3-2-3. PD セミナーアンケート結果

高等教育のリテラシー形成関連 コード：L ( Literacy )

研究倫理シリーズ 第1回 「盗用と言われない英語論文の執筆 — 羽田 貴史 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 副  
大学教員は何を指導すべきか—」 機構長)  
(2014.6.24) 吉村 富美子 (東北学院大学文学部英文科 教授)

回収率 =79.5% (31/39)

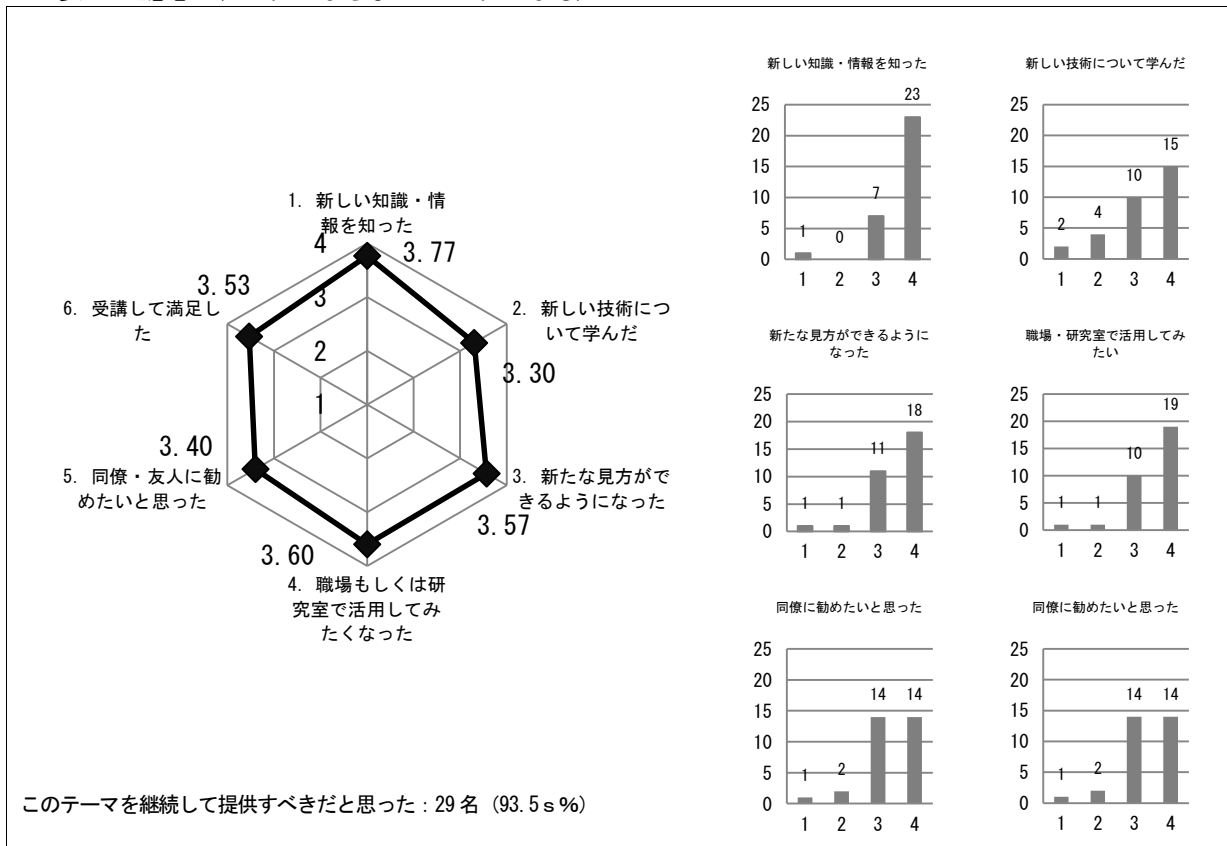
回答者属性(N=31)

【職階】教授(3)/准教授(2)/講師・助教(13)/管理職教員<学長~学部長>(1)  
/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(1)/職員<係長・主任・一般職員等  
>(1)/その他(4)/無回答(5)

【性別】男性(19)/女性(8)/無回答(4)

【学校種】東北大学(19)/東北大学外(7)/無回答(5)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・研究倫理, 研究不正を扱う業務を行っているのので, 関係するお話が開けて有意義であった。
- ・盗用の概念は相当理解した。オリジナリティーを主張する論文の核心部分に関する参考文献や類似研究成果の引用に当たっては相当の努力と注意を払うこととしたい。
- ・言い換えのテクニックは, 具体的に実践しやすそうだと感じた。
- ・名詞化について勉強になったが, 自分で使いこなすのは難しそうである。英語論文の書き方のようなセミナーがあれば, ぜひ受講したい。
- ・盗用であるか否かの判断基準
- ・具体例と exercises
- ・様々なサイトの情報
- ・文献研究の際に, 過去の論文をどのように引用するべきか理解できた点, 自分の言葉に言い換える重要性を認識した。
- ・盗用と疑われることを回避する技法
- ・盗用やライティングの考え方やサイト情報
- ・盗用と思われない英文の書き方
- ・盗用についての教え方, 学生への対応, 指導の方法について。
- ・学生への指導方法については, 大変勉強になりました。また, 役立つサイト集を紹介していただき, 活用してみようと思います。
- ・自分が思っていた以上に, 盗用の規準が厳しかった
- ・英語論文における盗用の考え方や学生指導の実際。
- ・今回のテーマにおいて, なぜそのような事案が発生するのか, 根拠を示して頂きながらの説明であったため, 理解が助けられた。「なぜ盗用がいけないのか」と倫理, モラル的なことに学生と共に考えていかなくてはならないと感じた。



- ・二次引用の方法、盗用の実際についてわかったことが参考になりました。
- ・名詞化、URL集
- ・盗用に関する情報提供サイト
- ・盗用に関する情報源
- ・海外における盗用に関する教育について
- ・名詞化
- ・高校までと大学における学習観の違い
- ・大学で期待される文章の読み方 ・名詞化
- ・「意味のまとまりごと」に英和活用辞典を利用する、自分の英語表現集を作る。
- ・盗用の判断基準が統一したものがなかった。
- ・学生への指導

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・名詞化の話と盗用の話とのつながり。
- ・盗用にならない引用のルールをもう少し詳しく知りたかった。
- ・学術分野ごとに許容量が異なるようなので、各分野で調査してもらえると助かります。
- ・盗用の判断があいまいであったところ。
- ・研究不正全体との関連、盗用認定の基準。
- ・「言い換える」ということがよくわかりませんでした。研究をしていて、そのようなことを意識したことがなく、何のために何の作業なのかわかりませんでした。
- ・論文指導者と英語教員とありますが、英語教員が研究者をサポートしていただける環境があるか？という現状では疑問です。
- ・判断基準
- ・科学技術論文と評論や論説などの著作物では盗用の扱いが若干異なるように感じたが・・・文系の分野での盗用の話が中心で理系にとっては違和感があった。
- ・盗用の基準
- ・盗用に関してもっと詳しく話が聞きたかった（具体的に）
- ・結構面白そうな箇所のスライドが資料に入っていない
- ・何が盗用と判断されるかの基準が統一したものがなく、そうすると対策も導き出せないのではないかな？

### 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・もう少し議論する時間がほしい。
- ・グループワークはグループでなくてもよいと思う。
- ・非常に有益なようでした、ありがとうございました。
- ・講義中に講演ができるのは、良いと思います、理解につながりました。
- ・なぜ英文の学術論文が苦手なのか、すっきりしました。そのメカニズムをうまく活用して、専門分野の論文（英文）に取り組んでいきたいと思いました。様々なツール（VRL）を教えていただいたので、今後活用していきたいと思います。
- ・研究の成果として論文をまとめるのが教員の仕事ですが、英語に関して教員がどこまで（スキルの的に）指導できるだろうかと不安にも思いました。教員のライティングスキルをあげることがまず先なのでは？とも思いました。
- ・大学における研究倫理教育の遅れを実感させられた。
- ・文系の人の研究の雰囲気分かって、興味深かった。
- ・大変参考になりました。ワークショップ形式もよかったですと思います。ただ、思いの他、とまどうことも多く、ワークの時間が2・3分ずつで少し消化不良気味でした。もっとも内容を濃くするためには余りゆったりとはできないですね。
- ・理工系の論文についても今後お願いします。

回収率 = 90.0% (18/20)

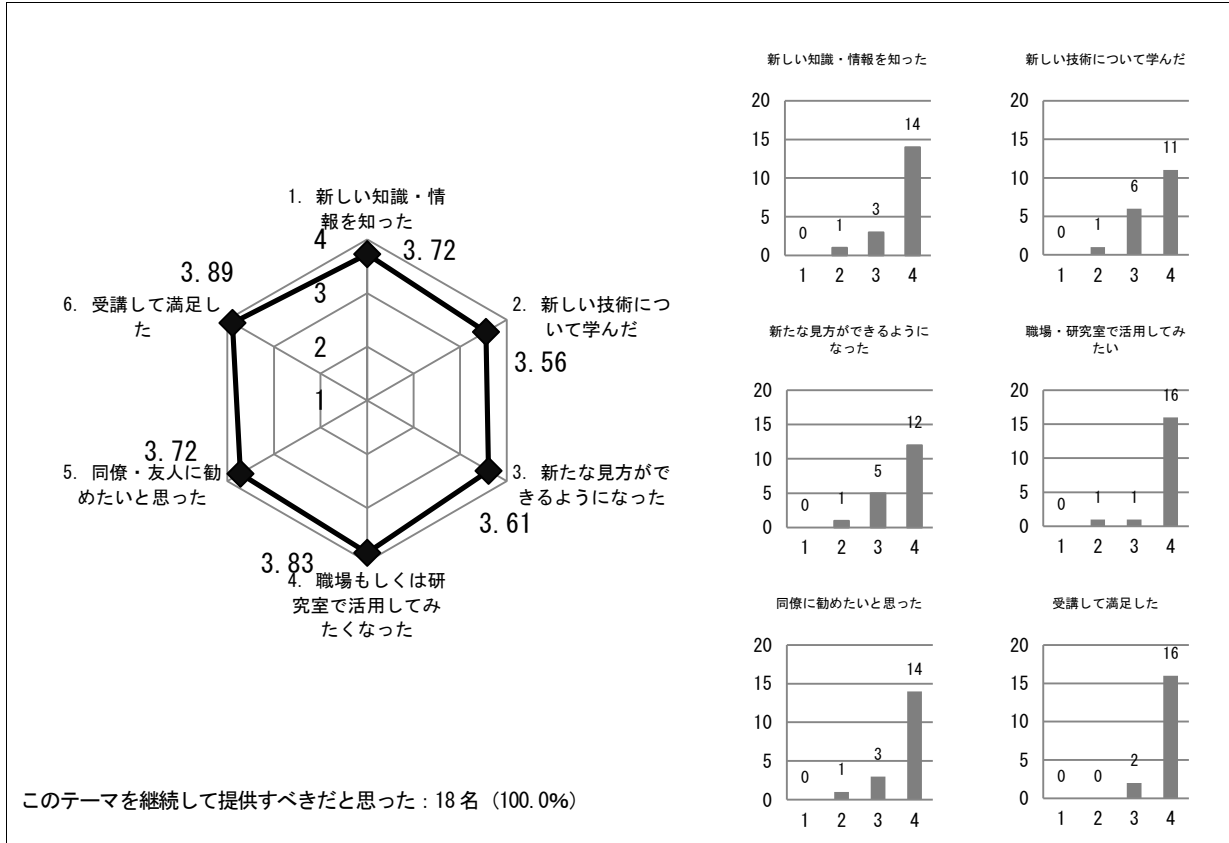
回答者属性(N=18)

【職階】教授(2)／准教授(3)／講師・助教(10)／管理職教員<学長～学部長>(0)／博士課程(1)／職員<部長・課長以上>(0)／職員<係長・主任・一般職員等>(2)／その他(0)／無回答(0)

【性別】男性(7)／女性(11)／無回答(0)

【学校種】東北大学(11)／東北大学外(7)／無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・難しすぎる、新しいことが多すぎる講義にならないように気をつけようをおもいました。
- ・意欲の高めかた、気持ちのコントロールなど今までのマニュアルでは学ぶ機会がなかったので、今後生かしたい。
- ・実践的な内容でよかったと思います。
- ・全てのポイントが役に立つ
- ・既有知識の活性化だけでなく、既有哲学や既有論理感や既有宗教観の活性化や認識的葛藤を引き起こすように試したい。
- ・具体的な方法がたくさん示されてよかった。
- ・学生の理解を支援する方法について、特に知識の活性化の支援
- ・授業内での映像資料の使い方。 具体的事象と抽象原理の授業内での行き来
- ・授業内容をしばって四つにする。
- ・なるほどと思ったこと：グループディスカッションも多用する学生が面倒くさくなったり、苦手な学生にとって負担になると考えていたのですが、今日のセミナーで「メリハリ・長さ」が大切ということをうかがい、より効果的にグループワークができるよう再検討したいと思いました。
- ・全て参考になった。
- ・授業運営の具体的な部分。
- ・役立ちます。これから学校でも教員に広めたい。
- ・教員自身を語ることで、学生に「お得感」を感じさせ、さらに「自分しか学生に伝えられない、自分の授業」ができること、という概念を勉強
- ・授業の作り方。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・教員自身を語る部分について、もし先生がもっと具体的な例を挙げればよいなどの気持ちがありました。ありがとうございました。
- ・個別性への対応。
- ・これからそれらをどう実践していくのか。

#### 4. セミナーについての意見・感想

- ・大変参考になりました、ありがとうございます。
- ・とても分かりやすく、いずれ教壇に立つことを希望している者にとっては刺激的かつやる気を出させてくれるものだった。
- ・開始する前に動画撮影に関する周知が毎回必要か、途中で少し気になったので。
- ・「教職員の・・・」というセミナーは、割と教員向けのものが多いように思います。職員にとっても有意義な内容は多いのですが、職員ならではの役割や専門性もあると思うので、ぜひ「職員向け」のセミナーを充実していただきたいです。
- ・とても勉強になりました。ありがとうございました。

### 「授業デザインとシラバス作成」 (2014.7.18)

串本 剛 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)

回収率 = 100% (13/13)

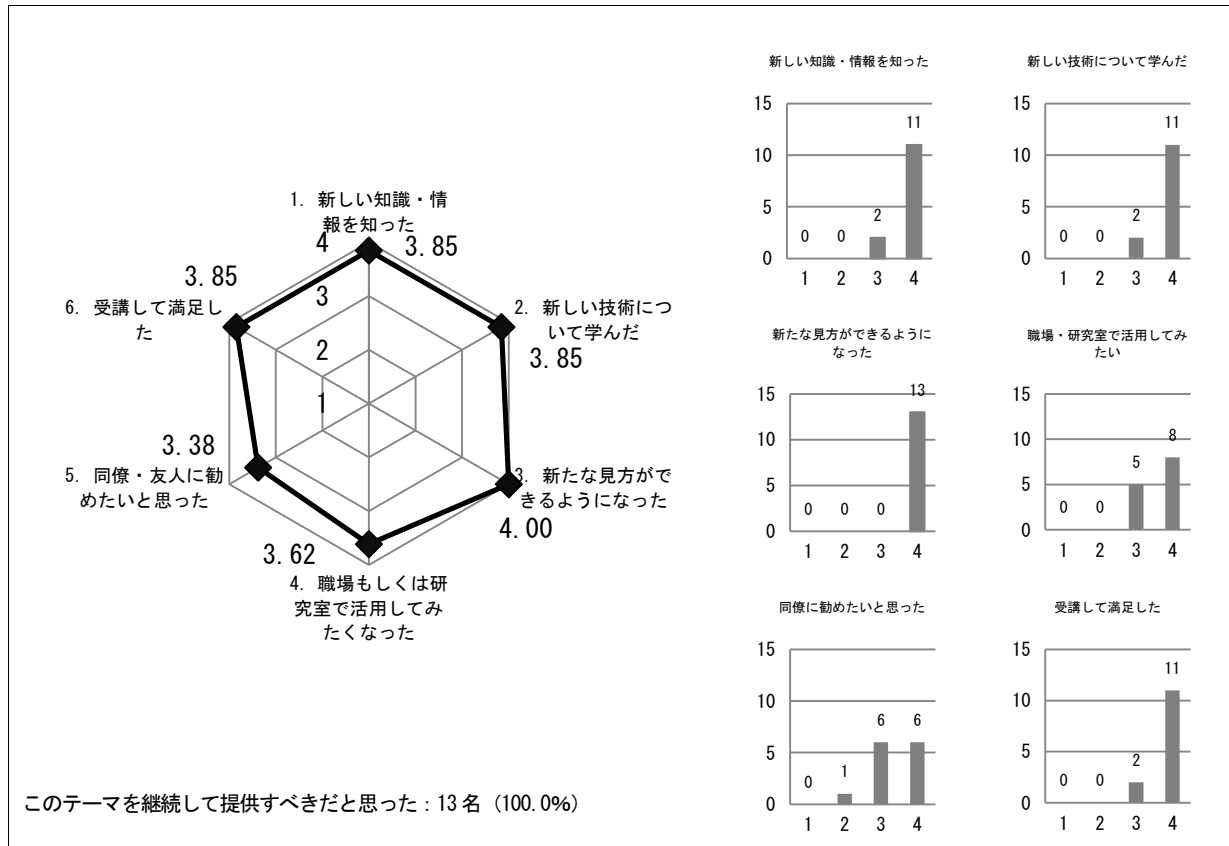
回答者属性(N=13)

【職階】 教授(3) / 准教授(4) / 講師・助教(2) / 管理職教員<学長～学部長>(0) / 博士課程(1) / 職員<部長・課長以上>(0) / 職員<係長・主任・一般職員等>(1) / その他(2) / 無回答(0)

【性別】 男性(4) / 女性(8) / 無回答(1)

【学校種】 東北大学(5) / 東北大学外(7) / 無回答(1)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・配分
- ・色々な視点からのシラバス作成
- ・シラバスの設計と言うより、むしろ「見通し方」を学べたと感じています。
- ・定量的にシラバスと授業設計を見ることができ、新しい視点を得た。
- ・学習時間も授業設計に取り入れる点。
- ・知の修得に偏らない目標をいかに設定し、目標と学習成果をいかに定合成をもたせるか。
- ・自分のシラバスを客観的にみることができ、何を大事にしたいのか自分自身もダイレクトにわかる。
- ・自分の担当科目について客観的に見つめ分析する視点を獲得することができた。
- ・合計配点・配分率のバランスが分かりやすい。
- ・目標領域など様々な面からシラバスをみれた良かった。
- ・授業デザインワークシートでチェックできること。
- ・シラバスの意味がわかった。
- ・能動的学習の重要性。「人に教える事で最も理解が深まる」。

#### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・重要さと時間配分
- ・「態度」

- ・修正点は分かったが、では「どう改善すれば良いか」について
- ・学習時間に重み付けるとよいかと思った。
- ・自分のシラバスのチェックが難しかった。修正の仕方があっているのかなどが不安。
- ・学習時間が多いほど良いのか、何度も質問が出ていたが結局よくわからなかった。

#### 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・全員、あるいはグループで1つのシラバスを作るという作業があると良いと感じました。
- ・無料でこれだけのセミナーを提供していただけるなんて感謝感激でありました。

### 「比較からみる世界の高等教育 ―グローバル時代の人材育成・獲得を考える―」 (2014.8.23)

杉本 和弘 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授)

回収率 = 52.2% (12/23)

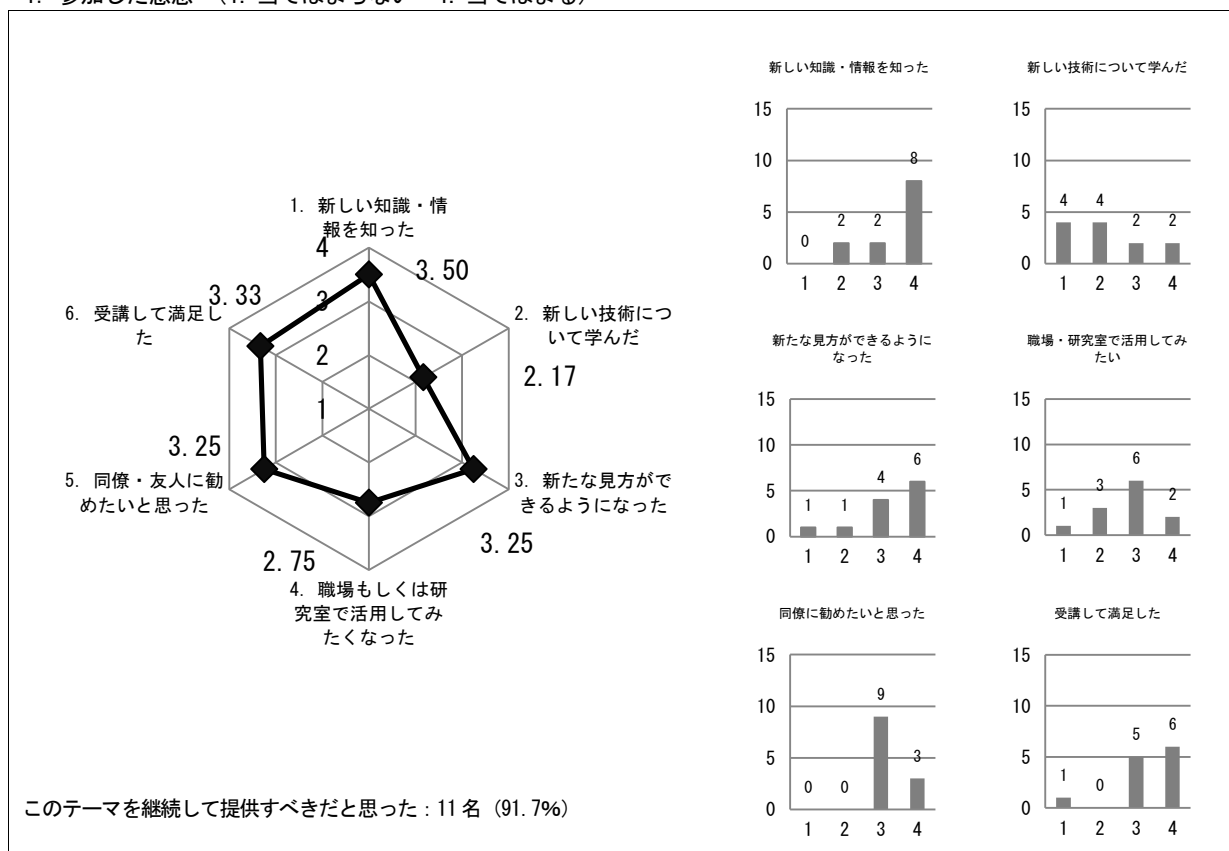
回答者属性(N=12)

【職階】教授(1)/准教授(4)/講師・助教(2)/管理職教員<学長～学部長>(0)  
/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(1)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(0)/無回答(3)

【性別】男性(4)/女性(5)/無回答(3)

【学校種】東北大学(2)/東北大学外(7)/無回答(3)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・「グローバル化」と普段使っている言葉の意味の正しい理解ができるようになった。これまでは曖昧だったと思う。
- ・グローバル人材の意味、日本での役割など、より明確にしていくと助かる。討論が大変役に立った。
- ・高等教育機関にとってのグローバル化/国際化について
- ・グローバリゼーションと高等教育の関係で、参加者のいろいろな意見と視点が語られた点、非常に勉強になった。
- ・人的移動に対する新しい視点を持てたと思う。
- ・グローバル化について、各国の比較ができた。
- ・すぐに役立つものではないが、大変質は良かった。・理系レポートの実践の方法がよく分かりました。ありがとうございました。

#### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・講師の考えが見えにくい。
- ・グローバル化/国際化の定義。

#### 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・今後も特に若手研究者・教育者向けのセミナーを実施して下さい。
- ・PDプログラムは参加してみたいものが多く、興味深いです。

- ・質疑応答、意見交換が有意義でした。
- ・お疲れ様でした
- ・2時間のうち、1時間が課程、1時間が質疑という時間配分はたまたま勘違いでそうなったようですが、むしろ、のぞましいと思います。今後も、講義/Discussion 半々ぐらいがいいと思います。

「アカデミック・ライティングを指導する」  
(2014.9.1)

井下 千子 (桜美林大学 教授)  
関根 勉 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授、学習支援センター長)  
島村 健司 (龍谷大学ライティングセンター スーパーバイザー)

回収率 = 66.7% (30/45)

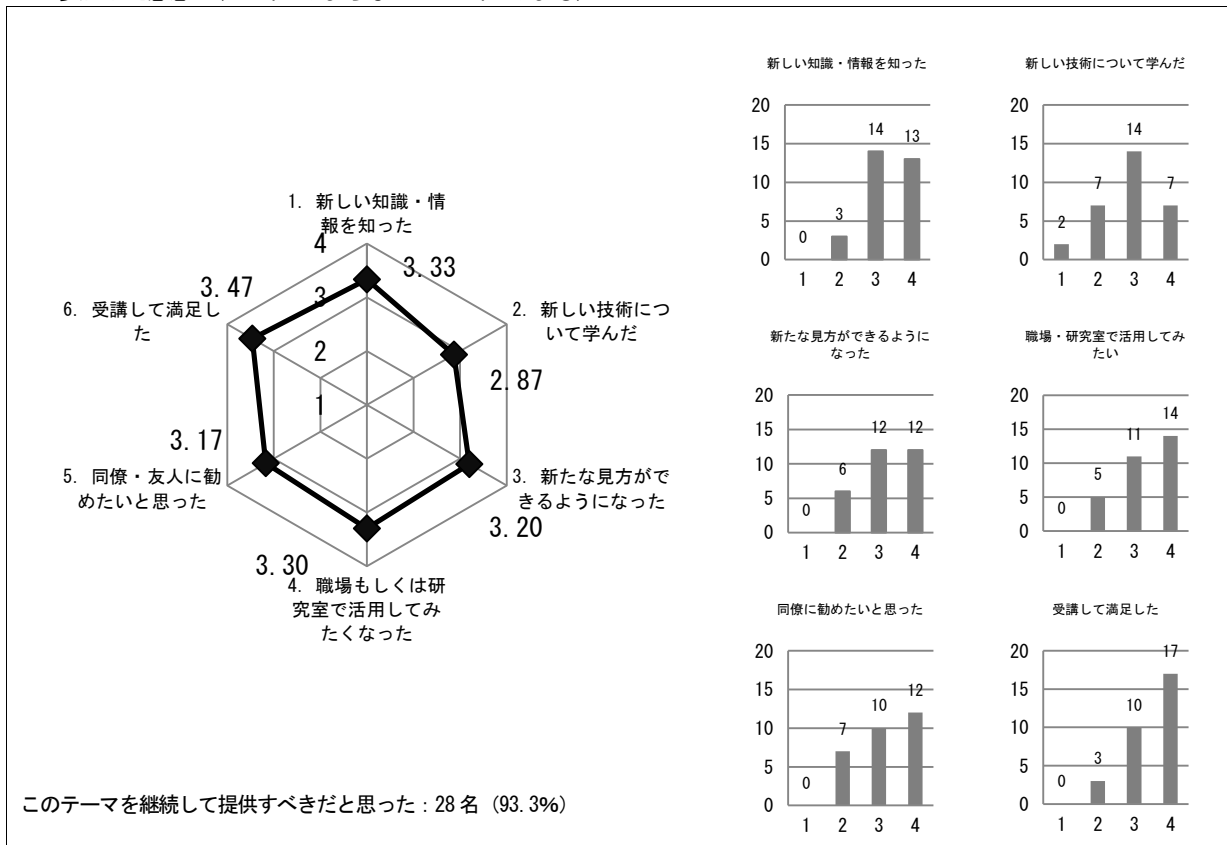
回答者属性(N=30)

【職階】教授(4)/准教授(4)/講師・助教(8)/管理職教員<学長~学部長>(1)/博士課程(2)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(8)/その他(2)/無回答(1)

【性別】男性(17)/女性(13)/無回答(0)

【学校種】東北大学(12)/東北大学外(17)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・フォーマットによる論文指導
- ・ライティングセンター
- ・定型フォーム学習
- ・ライティングセンターは東北大にもあると良いと思った。
- ・龍谷ライティングセンターでの実践
- ・龍谷大学での取り組みの具体例
- ・自然科学実験の現状について
- ・自分で考えさせる工夫 (頭の中にあることを書き出す, 読書をさせる, 見出し, 接続詞, 文末にマーカーをつける)
- ・learn-unlearn-relearn, 再構築など, 頭の中で感じていたことを具体的にお話しただいてすっきりしました。できるだけ教員間で共通認識をもてるようにしたいのですが, 上にその理解をもってほしいと願います。
- ・レポートの書き方相談への対応の仕方。
- ・龍谷大学の事例が非常に具体的で, 参考になりました。本学ではこれからライティング支援を考えていく予定ですが, ポイントをつかむことができました。特に読書の重要性について言及されていましたが, 私の所属(図書館)でもアカデミックスキル(ライティングのための読書術など)に対する支援の可能性について考えさせられました。また, 井下先生の“learn-unlearn-relearn”, “学びほぐし”ということばが, アカデミック・ライティングを考える上で明確な方向づけを与えてくれるのではないかとおもいました。ありがとうございました。
- ・方法論を詳しく知ることができた。
- ・レポート作成と学修課程の関係が明確になりました。(思考仕様のアウトプットによるメタ認識)

- ・教員個人での取り組みでなく、カリキュラムとして、組織的に体系的に行う必要性を再確認できたこと。そして、体系的にプログラムするが、学生への対応は個別のやり取りをせざるを得ない、ということも再確認できた。
- ・井下先生の「書く力考える力」を拝読して、さらに直接ご講義を頂き、本学での①初年次教育、文章表現教育の今後の方向性 ②教養教育と専門教育の有機的連携と実質化させる手がかり を得られました。
- ・井下先生の本を持っていたが、直接先生の話を聞くことで、背景がわかった
- ・いずれの先生方からも有益な知財を得ることができました。(・井下先生：四事象による整理。 ・関根先生：学生アンケートによる成果。 ・島村先生：具体的な指導方針と資料。
- ・理系レポートの実践の方法がよく分かりました。ありがとうございました。

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・アカデミック・ライティングとは？またそれをいかに行うか、教員側の視点、発問方法。
- ・日本語表現とアカデミック・ライティングの関係
- ・難しいと思いますが、実例をもう少しみたかったです。
- ・自校で実践することにはいいという、現場での導入法をもっと知りたいと感じた。
- ・いずれも、大変わかりやすかったです。
- ・アカデミック・ライティングを大学で指導する際に、高校からの「学びの転換」ととらえているようですが、高校でもこのようなことを教えていきたいと考えています。高大連携の見解も教えて頂きたいです。

### 4. セミナーに関する意見・感想

- ・ハウリングをおこさない様にしていきたいです。教員の“レポート課題を出す力”について知りたかった。
- ・大学1、2年生を対象とした指導の話だと思ったシステムの話よりテクニックの話を知りたかった。
- ・大学教育におけるライティング指導について、整理できたとともに自分の立場としてできること（すべきこと）とそうでないことの区別ができたように思います。
- ・新幹線や飛行機の時間もあるので、極力時間厳守で終わらせていただけると助かります。
- ・フロアーからの質問・コメントの時間がもう少しあった方がいいと思った。
- ・TAをどのように教育すればよいのかが知りたい。
- ・毎回有意義なセミナーで大変有難く思います。
- ・多少主旨がずれるかと思いつつながら書いた質問をパネルディスカッションでとりあげて頂きありがとうございました。講師の先生方からの回答が少なく残念でした。
- ・アンケートの質問を短時間で集約され、関心の高い課題に答えるパネルディスカッションを運行いただきました。
- ・大変充実しておりました。

回収率 = 80.0% (8/10)

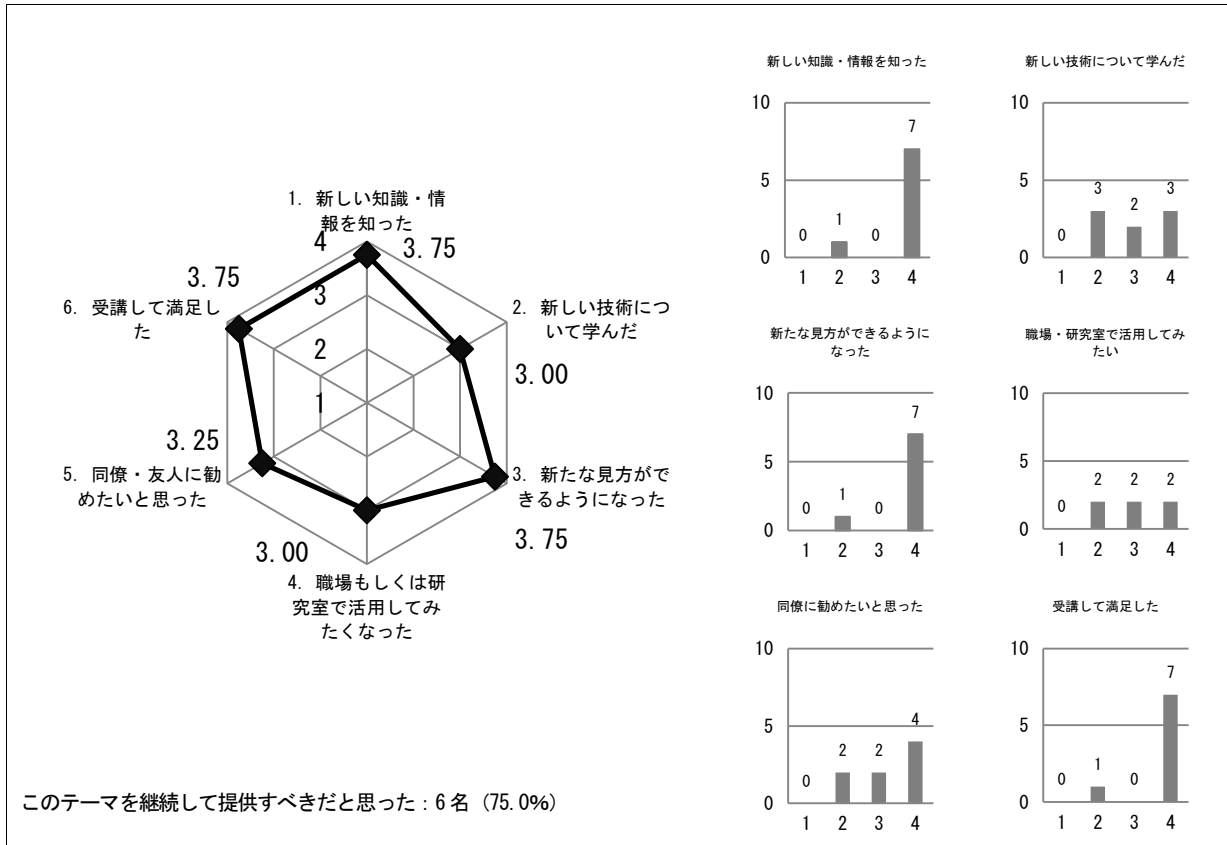
回答者属性(N=8)

【職階】 教授(1)/准教授(1)/講師・助教(3)/管理職教員<学長～学部長>(0)  
(0)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(1)/無回答(1)

【性別】 男性(2)/女性(5)/無回答(1)

【学校種】 東北大学(4)/東北大学外(3)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ tuning の実施方法・Los の設定について
- ・ Tuning の定義、ユタ州立大での取り組みのプロセス。
- ・ チューニングのためのプロセスが段階化して、説明されたところ。・理系レポートの実践の方法がよく分かりました。ありがとうございました。

3. わかりにくいと思ったこと

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・ チューニングは必要だが、誰がいかなる基準の下にそれを行うかである、言い換えれば、意思決定の問題でもある。声の大きな人だけの意志が反映されないシステムを考えることが必要ではないか。
- ・ 通訳の介し方にもうひと工夫欲しかった。

回収率 = 86.7% (13/15)

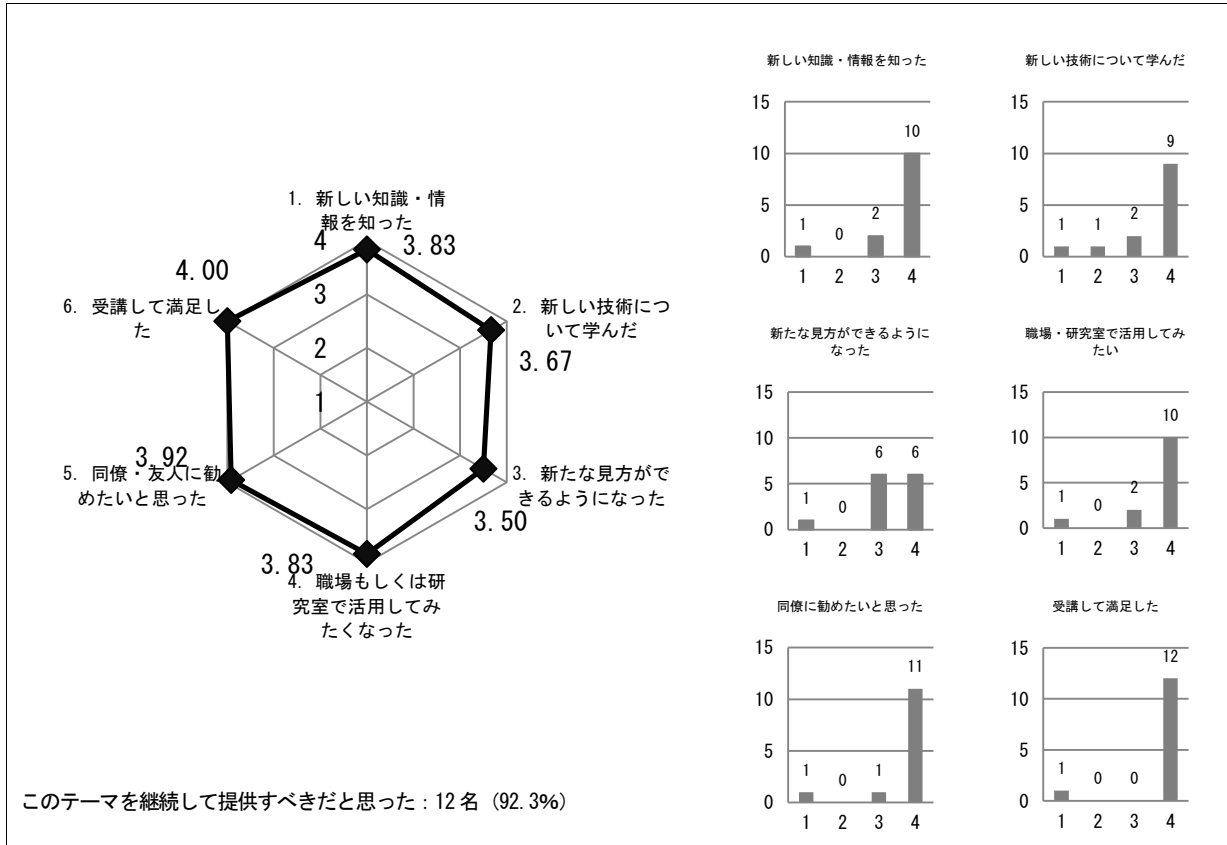
回答者属性(N=13)

【職階】 教授(1)/准教授(2)/講師・助教(4)/管理職教員<学長～学部長>(0)  
 /博士課程(3)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(1)/無回答(1)

【性別】 男性(6)/女性(7)/無回答(0)

【学校種】 東北大学(7)/東北大学外(6)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・アクティブレARNINGの概要を理解することができた。
- ・コミュニケーションクラスの概要を体験できた。
- ・Modelをつくる!
- ・モデルを作ることが有効だということ。今やっている実践が今後も他の授業や学校で有効に使えるように、モデル化していきたいと思います。
- ・ダニエル先生のモデルを使ったディスカッション練習
- ・トッド先生のブルーム・ブルーム・タキソノミーの事例、どうコミュニティを作るかという話。
- ・人の授業実践の中身を見せて体験して頂くのはめったにないことなので勉強になった、いろいろなヒントが頂けた。 ・能動的な授業のための工夫 (ビデオの見方から?)
- ・Day2-Discussion Seminar のほうがおもしろくて、自分の授業で使えるのではないかと思います。
- ・アイコースト先生の授業の方法: その応用可能性
- ・Active Learning の Discussion /Workshop は具体的で役に立ちそうと思いました。英語教員の先生方と share したいと思います。
- ・実践的な技術はとても役に立ちました。またグループワークを通じて、今までにない新しい考えを得ました。
- ・生徒にどのようなアプローチすればよいか; 実践的にどう教えるか。
- ・teacher skill, active learning の実践方法
- ・Lesson Planning について新しい見方ができました。
- ・Advice about diversity

3. わかりにくいと思ったこと

- ・フリーなディスカッション, 全般的な質疑の時間が少なかった。
- ・”Active Learning” という言葉の意味が結局最後までのみこめなかった。
- ・Diversityに関する Discussion は少し議論を発散させてしまったかなと思います。



- ・Todd先生の初日の講義について資料を拝見できると嬉しいです。
- ・active learningのメリット分野により有効性が違うと思うので、もう少し細かく分野ごとに分けて説明があるとよいかもしれないと思う。

#### 4. セミナーについての意見・感想

- ・アクティブラーニングのブックレットがあると嬉しいです。
- ・見学ツアーがあると嬉しいです。
- ・非常にわかりやすい、ためになりました。刺激的でした。
- ・具体的なノウハウもあったし、互いにアイデアを共有できる時間もあってよかった。
- ・大変楽しかったです。色々な方々とお話できたのもよかったです。ありがとうございました。
- ・大変有意義でした。ありがとうございました。
- ・もっと多くの方(特に教授レベル)に受講していただきたいと思いました。
- ・どのようにして「考える」授業を作っていくべきか、ヒントを得られたように思います。このような機会は、学校全体の英語科で共有できれば素晴らしいと思いました。参加して大変ためになりました、他の方々と意見をシェアできたのもよい経験となりました。

### 「学習と教育の科学：認知理論から大学の授業改革を考える」 (2014.10.17) 市川 伸一 (東京大学教育学研究科 教授)

回収率 = 88.5% (23/26)

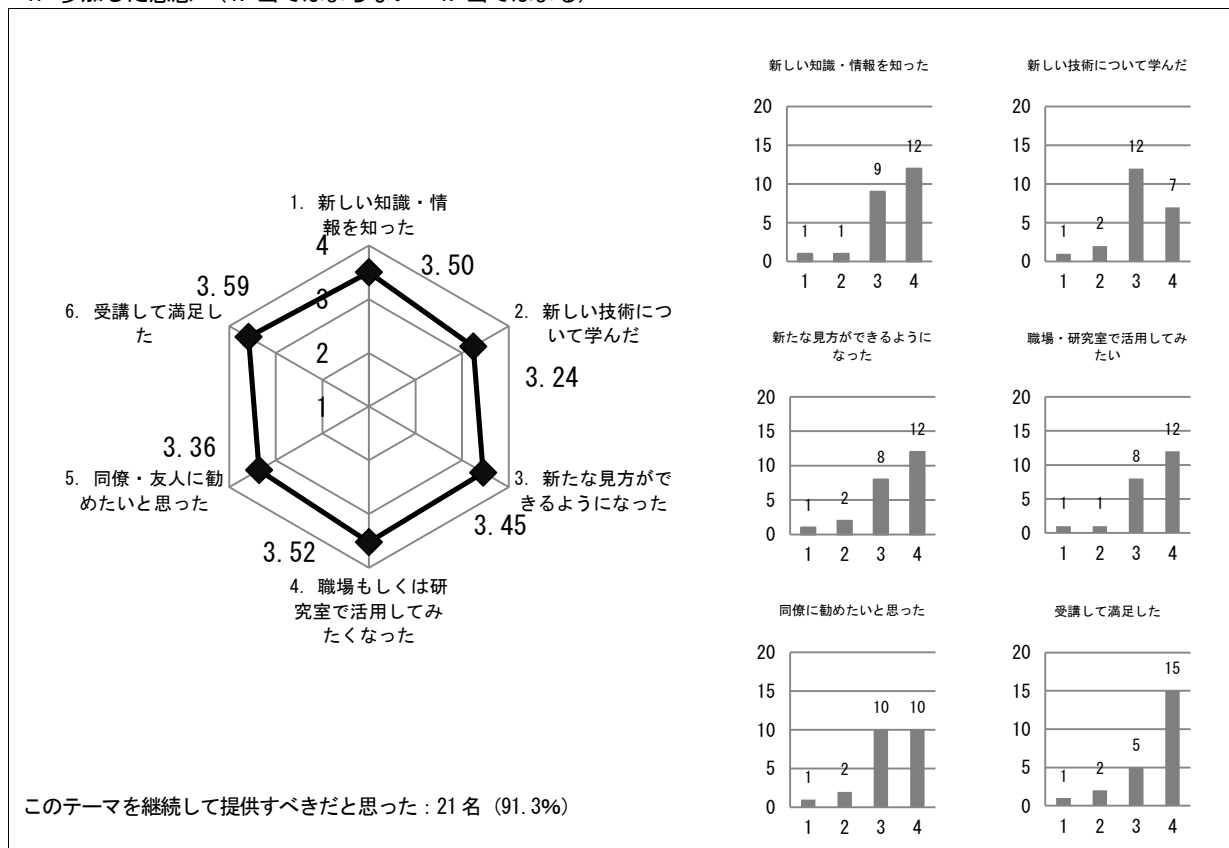
回答者属性(N=23)

【職階】教授(2)/准教授(5)/講師・助教(2)/管理職教員<学長~学部長>(1)/博士課程(5)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(0)/その他(2)/無回答(6)

【性別】男性(10)/女性(8)/無回答(5)

【学校種】東北大学(10)/東北大学外(8)/無回答(5)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・教える側にはしっかりした学習観を持つことがいかに大切なことか改めて感じました。「新しいものよりも十分ふむかためられた知識が良い」「課題設定能力こそが・・・」再確認できたことがうれしかった。
- ・最近、問題解決学習がはやりだが、それだけではダメ、ということを感じた。
- ・教えて考えさせる授業の提案(小学校から大学まで重要な視点である)
- ・①90年以降の教育現場の課題はとても参考になりました。②修得、探求サイクルを取り入れた授業実践に努めたいと思いました。
- ・学習者が自分の学習観を自覚する必要性について。
- ・学習観と深い学び

- ・認知カウンセリングが高等教育でも役に立ちそうだとわかった。
- ・習得サイクルと探求サイクルの両立、基礎に降りてくる学び。
- ・定義を理解しているか確認することの重要性。
- ・理解を深める学習指導の仕方を知れたこと。
- ・「考えて考えさせる授業」「理解を伴う暗記」の考え方。
- ・学生には様々な学習観があるということ。
- ・メモ（学びでの気付き+α（さらに追求してみたいこと、考えてみたいこと））が次の学びにつなげる。
- ・学習観に関する授業を行うこと。
- ・習得サイクルと探求サイクルのめりはりということ。
- ・学生には様々な学習観があるということ。
- ・テコの話は仮説実験授業のバネばかりと水槽の中のおもりの話よりも文型学生に向けた例題ですね。使わせていただきます、ありがとうございました。

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・いかに大学での教育に活かすか。
- ・小中での教育において時代ごとに「流れ・動向」があるとの事だったが、なぜ、教員が総入れ替わりしているわけでもないのに、そこそこ変わるのか。
- ・学習者が堅いステレオタイプを持っているときにも有効なのか、もう少し聞いてみたかった。
- ・認知心理学の方法論
- ・最近「アクティブ・ラーニング」としてフィールドワークのような活動だけを重視するような傾向があるように思うが、それについてはどのように考えるべきか。
- ・21C型スキルとの関連。

### 4. セミナーに関する意見・感想

- ・認知、知がひずんでいる方の修正って、個別でないといけないものか？
- ・半分ディスカッションでいいのでは？
- ・大変参考になりました。ありがとうございました。

#### 研究倫理シリーズ第2回

「院生指導においていかに研究倫理を育てるか —メルボルン大学の事例—」  
(2014.11.4)

Gabriele Lakomski (Centre for the Study of  
Higher Education, The University of  
Melbourne)

回収率 =68.2% (15/22)

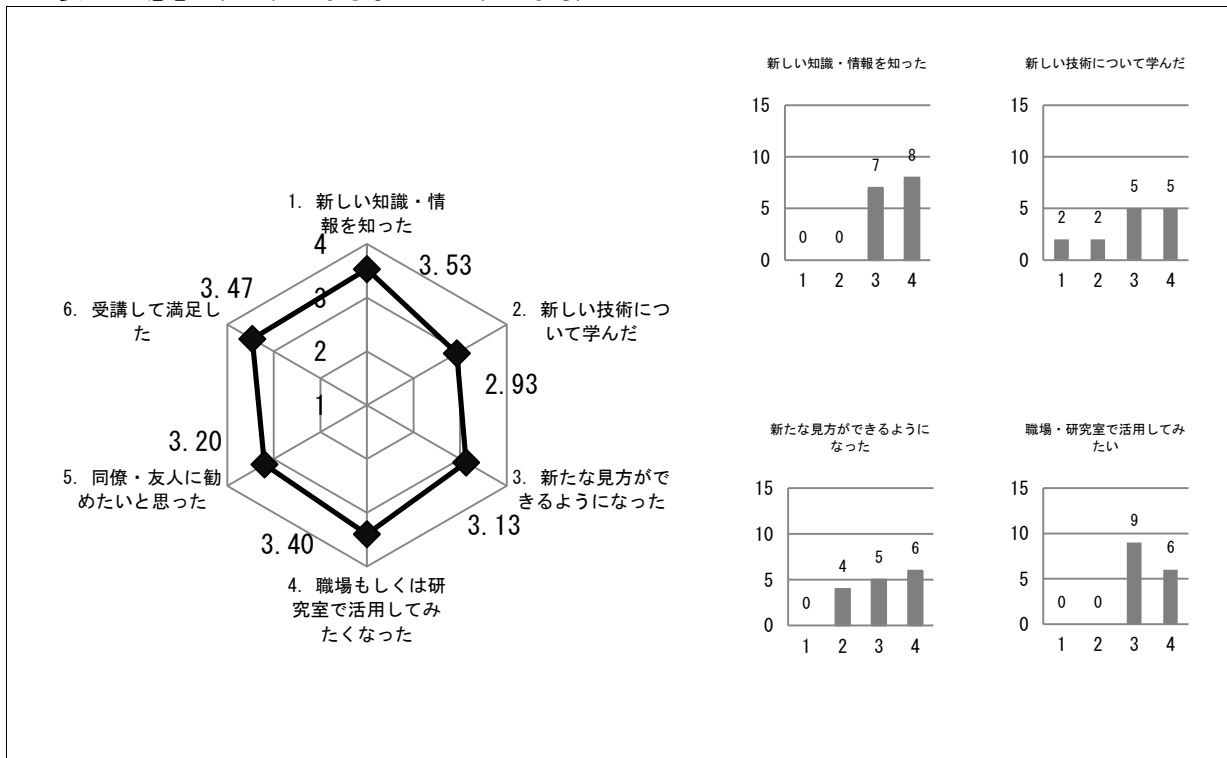
回答者属性(N=15)

【職階】教授(3)/准教授(4)/講師・助教(5)/管理職教員<学長～学部長>(0)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(1)/職員<係長・主任・一般職員等>(0)/その他(1)/無回答(1)

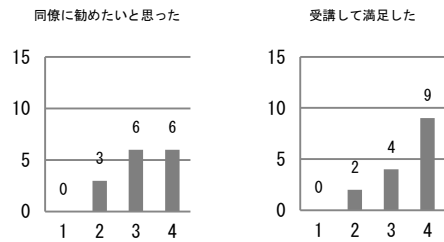
【性別】男性(11)/女性(2)/無回答(2)

【学校種】東北大学(10)/東北大学外(3)/無回答(2)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



このテーマを継続して提供すべきだと思った：14名（93.3%）



## 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・研究倫理について学生にどのように指導するか
- ・研究指導の丁寧さ、ペナルティについて明確にすること。
- ・すでに知っている内容でしたので、再確認できました。
- ・教育の再教育プログラム
- ・実践的なところ
- ・外国の事例に接することができたこと。
- ・学生に対するサポート体制の作り方。
- ・authorship に関する Q&A
- ・plagiarism にもいくつかのレベルがあって、レベルごとに対応を変える点。

## 3. わかりにくいと思ったこと

- ・論文のサポートについてももう少しケーススタディーをする必要があると思った（自分が）
- ・ethics は世界共通ですが、日本における現状（東北大学のガイドラインなど）はいかがいかわかということが疑問になりました。今日のセミナーの内容ではなく、現状について、ふれていただくのも効果的かと思います。
- ・研究の透明性を担保すること
- ・英語オンリー資料（紙媒体）がないと殆んど理解できなかつたこと。

## 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・分野ごとの開催でもかまいません、より多くの人に参加していただき、具体例を示し、警鐘をならしていただくのが重要だと思います。
- ・①皆が参加しやすいよう、通訳が入るとよいと思います。②結局質疑応答も全て英語だったのは残念でした。

**流動化する民主主義：グローバル社会の担い手を育てる大学教育の課題 (2014.12.4)**

猪口 孝 (新潟県立大 学長)

回収率 =61.1% (11/18)

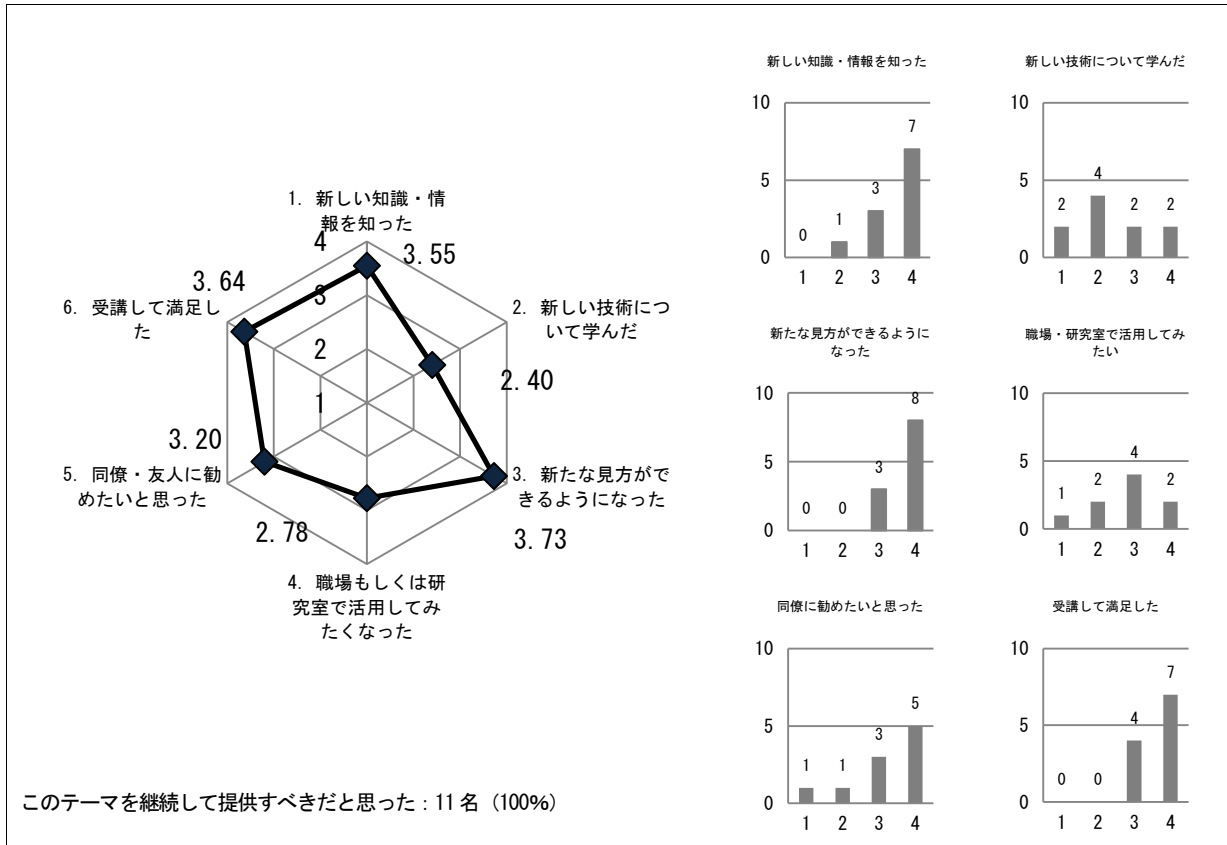
回答者属性(N=11)

【職階】教授(3)/准教授(0)/講師・助教(1)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(3)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(3)/無回答(0)

【性別】男性(7)/女性(4)/無回答(0)

【学校種】東北大学(6)/東北大学外(3)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・猪口先生のような方から、このようなお話を伺うことができ、安心というか、喜びというか・・・とても良かった。
- ・民主主義について改めて考えさせられました。協働の大切さと別の意味でとらえる視点を学びました。
- ・お人柄が伝わって来ました。印象が強いプレゼンでした。
- ・やりたいこと人をまきこんでやってみようと思った (今は遠慮しすぎたかな)。やりやすい環境づくりは大事にしながら。
- ・デモクラシーとは何かについて考える良い機会となった。
- ・日本人の「民主主義」に対する知識、意識。
- ・高名な先生のお話は、一つ一つ深い意味があり、考えさせられるものが少なくないと思いました。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・グローバル社会の担い手を育てる大学教育の課題の要点、ポイントが掴みにくかった。
- ・私は猪口さんの思考回路についていけないだけなのでノーコメント。

4. セミナーに関する意見・感想

- ・「歯に衣きせぬ」意見が聞けた、貴重な講演だったと思います。大変良かったと思う。

**アクティブラーニングを促す教室空間の創造 —学生の学習経験へのインパクト(2014.12.18)**

Andy Leger(カナダ・キーンズ大学)

回収率 =81.0% (17/21)

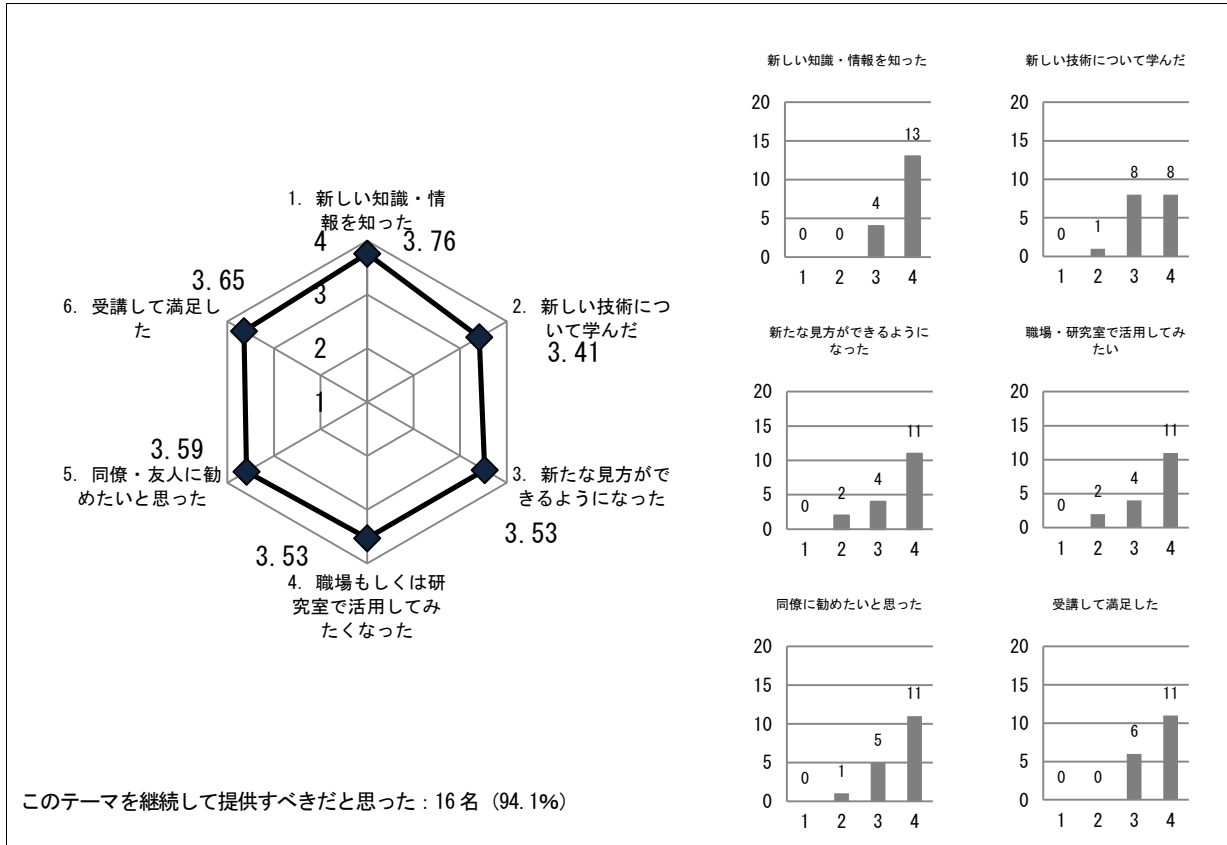
回答者属性(N=17)

【職階】教授(3)/准教授(3)/講師・助教(3)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(2)/職員<部長・課長以上>(1)/職員<係長・主任・一般職員等>(3)/その他(1)/無回答(1)

【性別】男性(8)/女性(8)/無回答(1)

【学校種】東北大学(10)/東北大学外(6)/無回答(1)

## 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



## 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- Andy(スピーカー) の presentation の内容がとても分かりやすく、英語での 2 時間のプレゼンも苦にならなく、興味深く聞けた。また来ていただきたいと思った。Wonderful speak!
- テーブルがいないというポイント。
- コストをかけなくても、アクティブな学習の空間が作れるということが大変興味深かった。
- 1つの壁を pop な色に。多様な type の room を作ること。
- 既存の部屋でも、お金をあまりかけることなく変更できる。
- 移動式のテーブル+三面の白板でもある程度いけるということ。
- スペースの重要さ
- 安い費用でもアクティブラーニングに向けた教室が作れるというのはいれしい情報でした。
- front がないというのはいれしいと思った。
- 物理的なセッティングが精神面に与える影響の大きさを認識できた。

## 3. わかりにくいと思ったこと

- Andy 先生がどういう theory をベースに classroom をデザインしたのかが分からなかった。

## 4. セミナーについての意見・感想

- 充実したプログラムで、とても勉強になりました。ありがとうございました。

回収率 =74.1% (20/27)

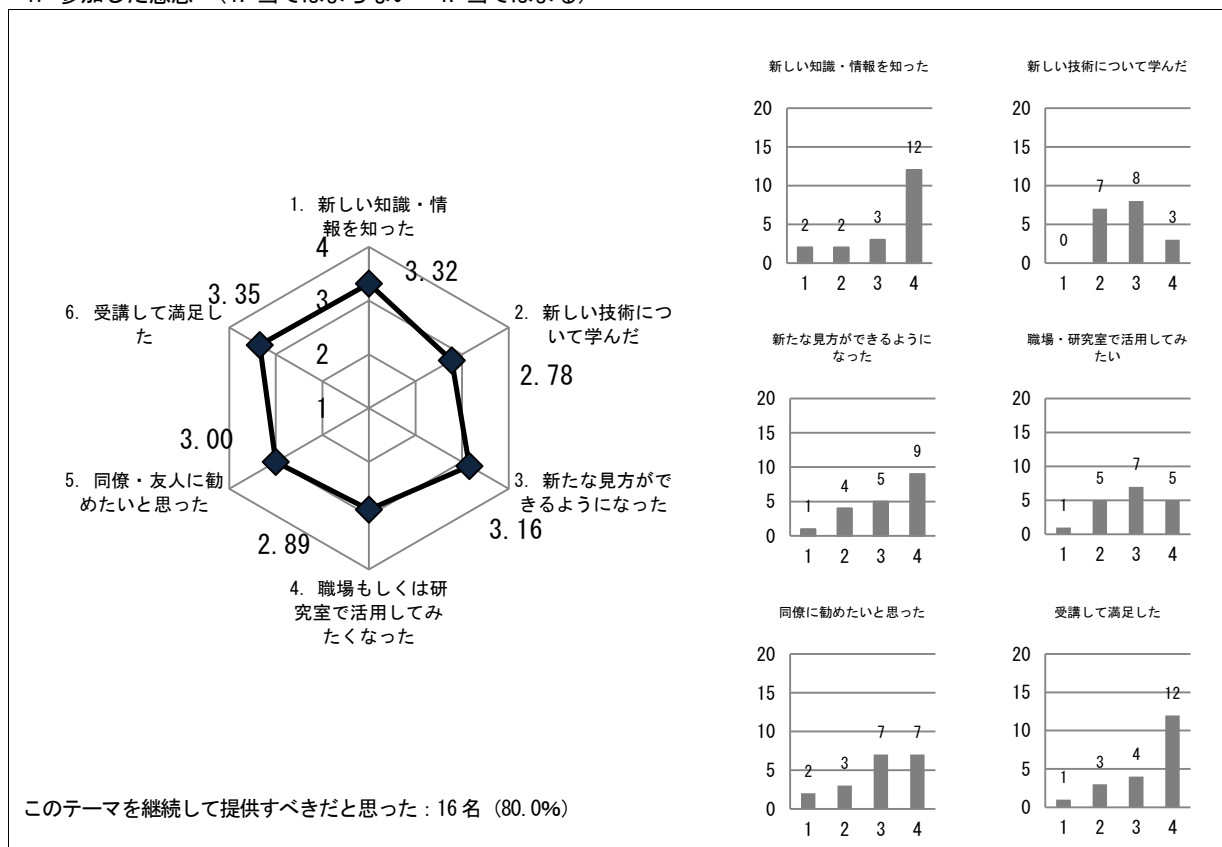
回答者属性(N=20)

【職階】教授(5)/准教授(3)/講師・助教(3)/管理職教員<学長～学部長>(1)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(2)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(5)/無回答(0)

【性別】男性(14)/女性(5)/無回答(1)

【学校種】東北大学(5)/東北大学外(14)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・BFな学生に対する接し方。
- ・大学の多様性をあらためて実感したこと。
- ・①一対一の対応→教員の質向上, ②全学的に取り組むこと。両者のバランスが大事, 法人, 教職員の協働。
- ・ボーダーフリー大学には, 能力の分散した学生がいることは身をもって感じていたが, 1人の学生の中にも能力が分散していることを知った。
- ・理念→戦略(方針)→組織・制度→方法プロセス→実行→データ収集→振り返り→戦略(方針), これを, カリキュラム構造と求める卒業時の学生像で, 科学論理的にやり続けることの大事さ。
- ・現在の学生の質について生々しいお話をうかがうことができました。組織的な取り組みが必要である点について, 今後大学でこの様な問題に対して活動する上で, 念頭に置きながら進めたいと思いました。
- ・BFに関する現況と課題。
- ・ボーダーフリーな学生に一定の教育効果を及ぼすためには, カリキュラムによりシステムチックに教育するとともに, マン・ツー・マンできめ細かく対応する必要があること。
- ・大学全入時代を目前にひかえ, 危機感を持ってはいたつもりですが, 現実には様々な事象が起こっていることを痛感しました。内容はどれも衝撃的で, 決して他事と思っていけないことを再認識しました。
- ・one to one 対応
- ・授業に関するルールについて, 「ゼロ・トレランス」な態度をとる場合には, 全学的に足並みをそろえる必要があるということは, 非常に納得がいった。もちろん, 全学的な意思統一ことが, 難題なのだと思いますが・・・

3. わかりにくいと思ったこと

- ・強選抜型大学群の問題とは?
- ・何故, 意欲のない学生を高校からそのまま受け入れるのか? 意欲が出た時に受け入れる社会になれば, この様な初歩的な課題はなくなるのでは? いわゆる, 学びたい時に学ぶ社会になる方法にはならないのか?
- ・学習障害との線引き, 管理と自主性。
- ・ボーダーの学生を引き上げるためのシステムをどのように構築するか。

・教育効果をどう検証するのか？

#### 4. セミナーについての意見・感想

- ・大学だけでなく、高校や就職先となる企業も参巻き込み形でこの課題に取り組む必要もあるのかもしれないと感じました。さらに、ドロップアウトした学生を社会として、どのように扱うかについても考えていくことも必要なのかもしれません。
- ・大変充実した時間を過ごせました、活かしていきたい。
- ・大変勉強になりました、ありがとうございました。
- ・3名の先生方、また討論では発題が適切で、大変有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・企画の狙い、内容ともに、非常に興味深く、有意義でした。

### 中国における大学教育の内部質保証—北京師範大学の学士課程教育を事例に—(2015.2.4)

高 益民 (北京師範大学)

回収率 =75.0% (6/8)

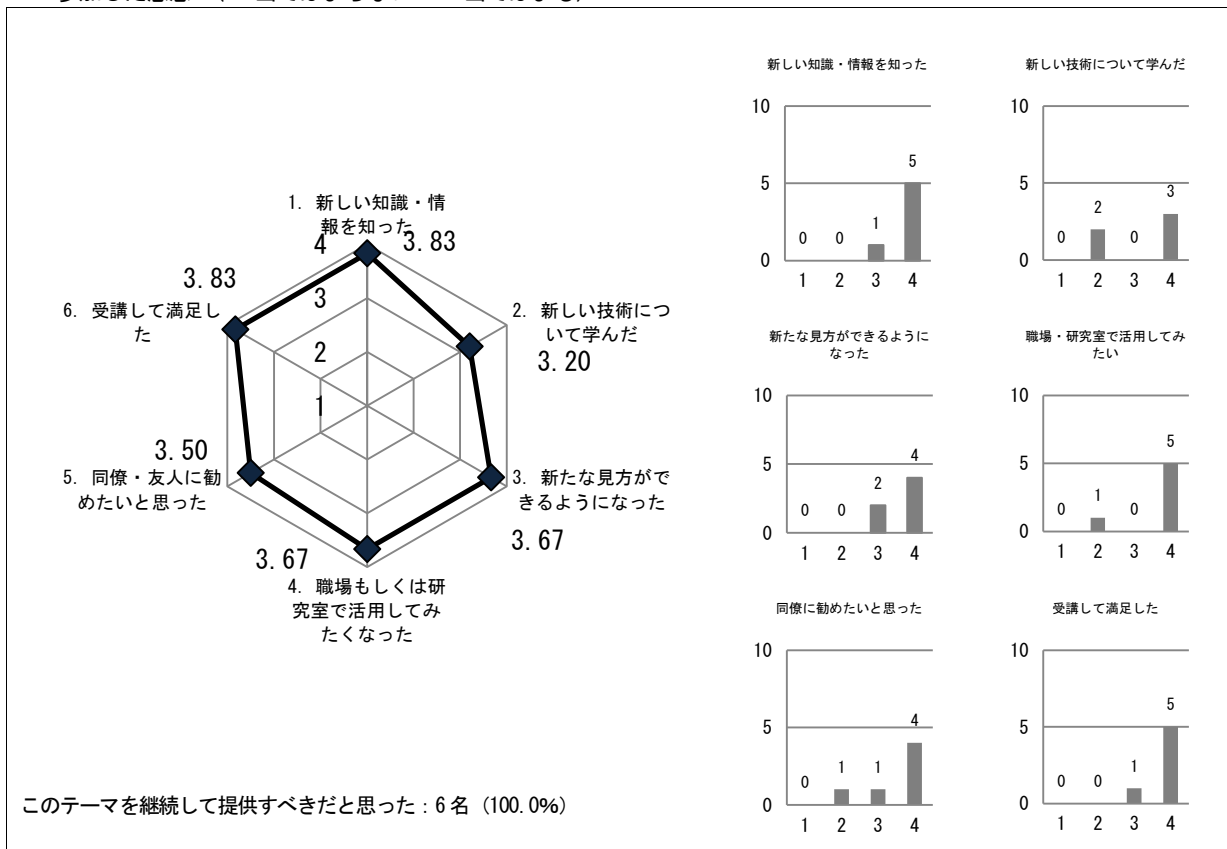
回答者属性(N=6)

【職階】教授(1)/准教授(0)/講師・助教(3)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(0)/その他(1)/無回答(0)

【性別】男性(4)/女性(1)/無回答(0)

【学校種】東北大学(5)/東北大学外(1)/無回答(0)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・中国教育（大学）現場の現状を教えていただいたこと。
- ・中国で起きていることがよくわかった。
- ・北京師範大学を事例とした中国大学の質保証制度について情報を得ることができた。
- ・中国的最新の動きを知ること。
- ・評価に用いるデータのとり方、活用法。

#### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・質の評価基準
- ・特になしが、国の方針と教育理念との関係をもっと考えたい。

#### 4. セミナーについての意見・感想

- ・具体例に富み、大変参考になるお話でした。ありがとうございます。

「グローバル時代の英語教育 — 高大 5 年間で伸ばす英語運用能力」

浅川 照夫 (東北大学言語・文化教育センター 教授)

(2014.9.25)

回収率 = 42.6% (26/61)

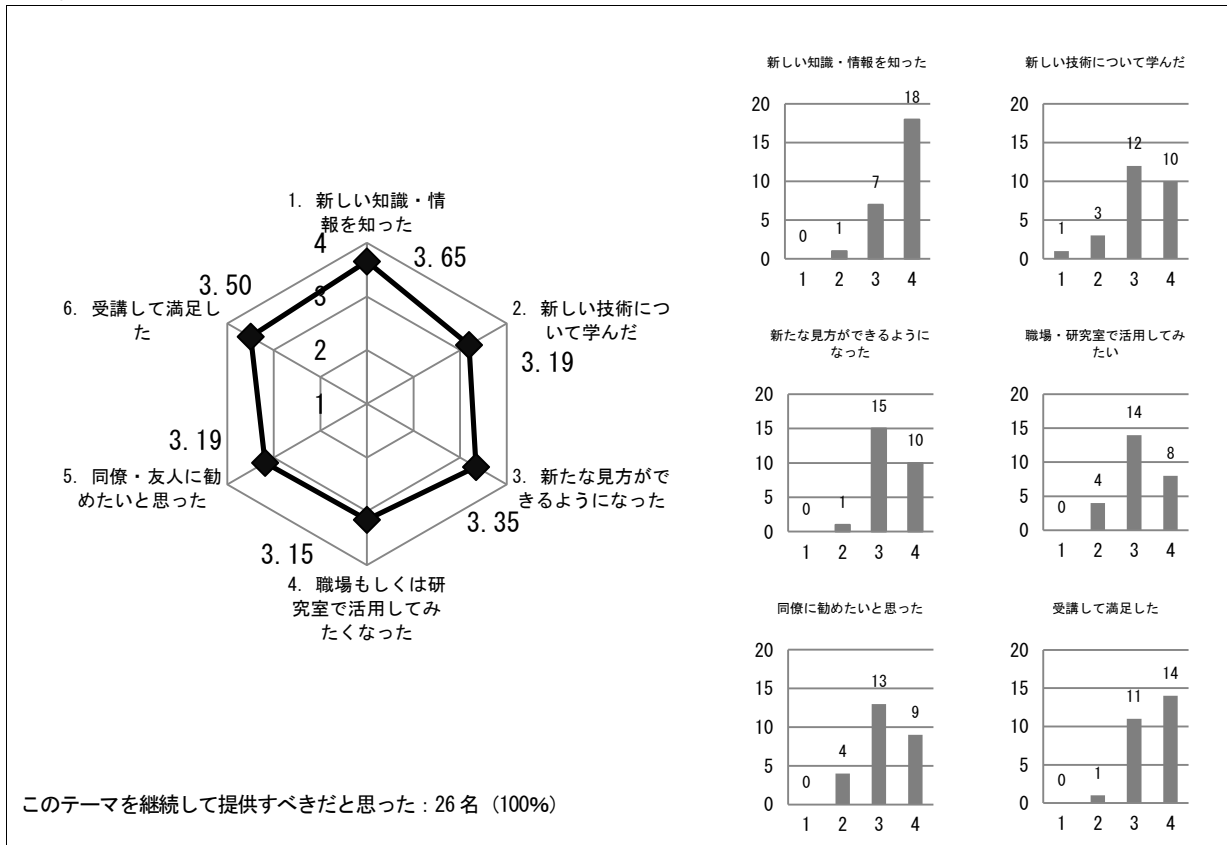
回答者属性(N=26)

【職階】教授(1)/准教授(3)/講師・助教(0)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(2)/職員<部長・課長以上>(1)/職員<係長・主任・一般職員等>(6)/その他(11)/無回答(2)

【性別】男性(13)/女性(12)/無回答(1)

【学校種】東北大学(5)/東北大学外(17)/無回答(4)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・東北大学生の TOEFL のスコアの現状, 私自身も学部留学, 大学院入学の際 TOEFL に苦しめられたので大変興味深かったです。
- ・「多読」で具体的にやることができた。
- ・高校での授業で何がされているかが分かった。
- ・高校での新たな取組みについての情報
- ・Linc English は年間 6000 円
- ・大学教育とはどういった授業を行っているのか気になっていたので, 今回非常に役立ちました。英語の授業に動機付けが大切なのかと思います。
- ・報告 1~3 について, 高校における英語教育への取組みといっても, それぞれの特色があるということが理解でき, 英語教育について考えるうえでの新たな視点を頂戴することができました。
- ・これからの英語教育に必要なこと, 学ぶ順序についてなど。
- ・①浅川先生の Reading の授業のすすめ方はとても勉強になりました!!! ②聖徳学園の小林先生もすごいなあっと思いました。わあ!こんなにできると, あせりました。
- ・Call を使って制限時間を設けて Speaking などの practice をすること
- ・宮城学院の Linc 活用法, 橘先生の授業法
- ・Linc English, 本校でも取り入れてみたいと思った
- ・実際の社会で英語がどのような位置を占めているか, 岡部教授の話はとても参考になった。また CALL システムについて, 橘先生の指導法はすばらしいと思います。
- ・東北大学で Linc English を用いた授業
- ・SGH の構想の仕方
- ・浅川先生の基調講演で, 下線部などの問いにとらわれずに, 段落ごとなどの大意把握すること, 多読のすすめ, など, すぐに出て来そうなことでした。
- ・英語の授業を行う際に, 長めの (まとまりのある) 文章を一気に読ませて, 大意を把握させる訓練が必要だということ。



- ・アメリカではオンライン学習による自学習が当たり前になっていると聞けて、いい情報になった。
- ・現在に即した英語教育へのニーズと対策について、論理的に理解できました。

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・報告 1~3 について、取組みの様子、とくに良いところは分かったのですが、取組みにおける課題や問題についてのところを積極的にお話していただきたかった。
- ・高校現場で Linc English を活用するときの細部
- ・二華高 SGH の生徒の取組み、その熱意の具合
- ・(東北大学のような) 大学の授業についてゆける英語力をどう高校でつけるか
- ・聖徳学園中高のスライドが見にくかったです。(情報量が多過ぎるため)
- ・教育現場では評価が必要なので、どのような評価が効果的か、多忙な中で効率的か、もっと理解したいと思います。
- ・もう少し具体的に入試をどう変えるか聞きたかった。
- ・大学入試対策の内での取組み方(小中高)について今後の開発にからむ部分とは存じますが、構想についてお聞かせいただければと思いました。

### 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・①場所が土地感のない私にとってかなりたどり着くのに苦労しました。タクシーの運転手さんすらよく分からず、南キャンパスにつれていかれてしまいました。やっとキャンパスに着いたものの、どのビルディングが分からず、学生に聞き、しかしまたもやそこでも入り口がよく分からず大変でした。②終了が 17:30 だと、他県から来た場合、帰りが大変遅くなり、次の日も通常授業をこなさなければならぬので、もう少し早目の終了だと助かります。 自己都合ばかり書いてすみません。
- ・4.5 時間は長すぎ
- ・大変素晴らしい研究内容だとは思いますが、発表の時間は守ってもらいたいです。
- ・今日のようなプログラムなら、このような教室でない方がよいのでは、モニター画面がむしろ邪魔です。
- ・説明報告やや盛りこみすぎた気がする。じっくりと話しを聞きたかったものもある。
- ・目の前のパソコンが大きくて、参加者の表情などが見にくかったため、その点は改善していただければと思います。今日はありがとうございました。
- ・高大の話は益々必要。最終目標の確認、戦略の確認と検証、今のままでは、これからは変わらないのでは・・・原因はどこに・・・? なぜ? なぜなぜ・・・? 「トヨタの5なぜ」で

言語・文化教育センター設立記念セミナー  
「グローバル時代における外国語教育の新たな可能性」  
(2014.10.25)

鳥飼 玖美子 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 特任教授)

回収率 =38.9% (21/54)

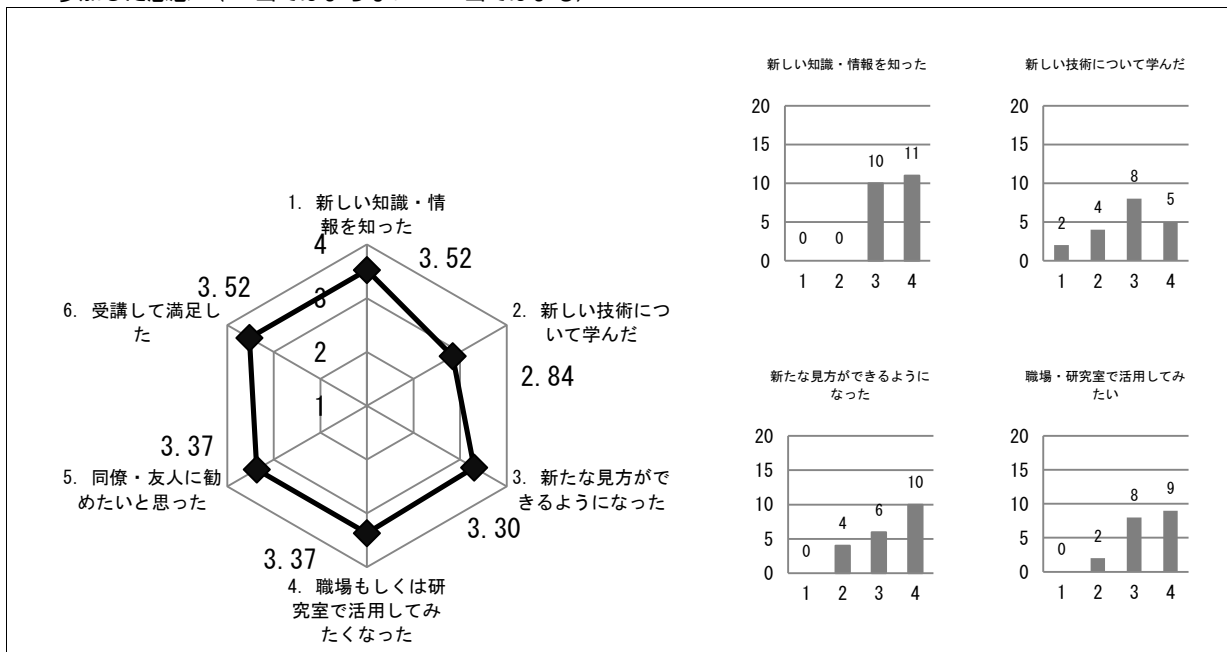
回答者属性(N=21)

【職階】教授(4)/准教授(0)/講師・助教(2)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(3)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(1)/その他(10)/無回答(1)

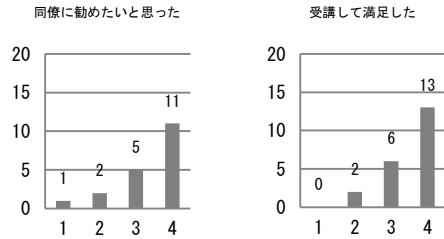
【性別】男性(9)/女性(11)/無回答(1)

【学校種】東北大学(5)/東北大学外(12)/無回答(4)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



このテーマを継続して提供すべきだと思った：19名（90.5%）



## 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・語学教育への取り組み方
- ・①「グローバル時代に求められる大学の言語教育」鳥飼先生の講義がとつても納得できる。自分も外国人として日本の社会や英語教育について、外観しながら感じていたことなどがとり上げられたので、共感するところがたくさんありました。②第2部 日本語と中国。
- ・ヨーロッパが2つ世界大戦の教訓で、二度と起こさないための異文化理解をしていることを知り、感心した。アジア、特に日本、韓国、中国の異文化理解をどの言語ですべきかについて考えさせられた。
- ・鳥飼先生のお話は、現在英語を指導している者にとって、指導法を改善しなければいけないことを教えていただいた。
- ・懂れの鳥飼先生のお話は、なぜ異文化の理解のために言語がいかに必要がわかった。
- ・鳥飼先生の講演は専門家らしく、内容が豊かで、とても勉強になりました。
- ・外国語授業は授業期間が決まっているので、授業外学習としてインターネット、ビデオ等を多くに学生に利用されることはとても効率的で自律学習を促すことができとてもよいと思いました。
- ・中央の考えと今後の動向、各言語間の習得難易度一覧があること。
- ・鳥飼先生の講演をきいて、初修外国語を大学で教えている教員として持つべき視点、姿勢について大変役に立ちました。ありがとうございました。
- ・CEFR の理念、大戦平和の構築の根本の部分と異文化理解の本質を知ることができてよかった。

## 3. わかりにくいと思ったこと

- ・スペイン語
- ・グローバル人材には異文化理解があり、学会会議は国際共通語としての英語を提言しています。政府は、共通教育に異文化体験理解を入れた排除した、どちらのカリキュラムにするつもりなののでしょうか？
- ・張先生の報告では「平成22年後期」という調査を頻りに引用しましたが、あの調査は設問項目ともかく、回収率が30%しかない調査結果ですので、アンケート調査として甚だしく信頼できるものではないと思います。あの調査をここでまだ引用しているとは驚くとともに残念です。
- ・ネイティブの英語での発表がとても速くて理解できない部分が多かったもので、日本語の同時通訳があったらよかったと思いました。
- ・第2部の発表は、「期待する効果」と「その結果」を入れてほしい、いわゆる論理的な発表になっていない。
- ・第1部のテーマとつながる内容で第2部も構成されていたらと思いました。

## 4. セミナーについての意見・感想

- ・特に、技能中心の英語学習を受けた学生達は、意外と偏る世界観や偏見を持ちやすくなるというのが私の始私見でもあります。英語学習に入れる力位の真のグローバル教育（異文化理解、足元から見つめられ、隣国と協力などいろいろな問題に議論できる場面を作り、そこに英語を組み込める工夫が必要であると思う。
- ・ありがとうございました。
- ・Q&Aはもう少し長く、回答はもう少し短めで多くの人の質問も聞きたかったです。
- ・すばらしかったです！
- ・weekendでの実施、weekdayでは授業があって、参加できない。
- ・有意義だと思われる講演は大歓迎です、イベントとして無理に組み込まれた講演は不要です。
- ・中国語学習についての発表資料（選択理由、授業学習・・・）が22年度の統計なので、ここ数年（24、25年度）の統計結果で分析していただければ、より現状に近いものを把握できるのではないかと思います。
- ・中央官庁の根本対策不足を誰かが指摘するか期待していたが、決まったからとりあえずやるしかないという空気に違和感（失望）を覚えた。全体討論で少し流れが変わった。PDCAがない中央官庁が根本の原因となりつつあり、納得した。

回収率 =53.3% (8/15)

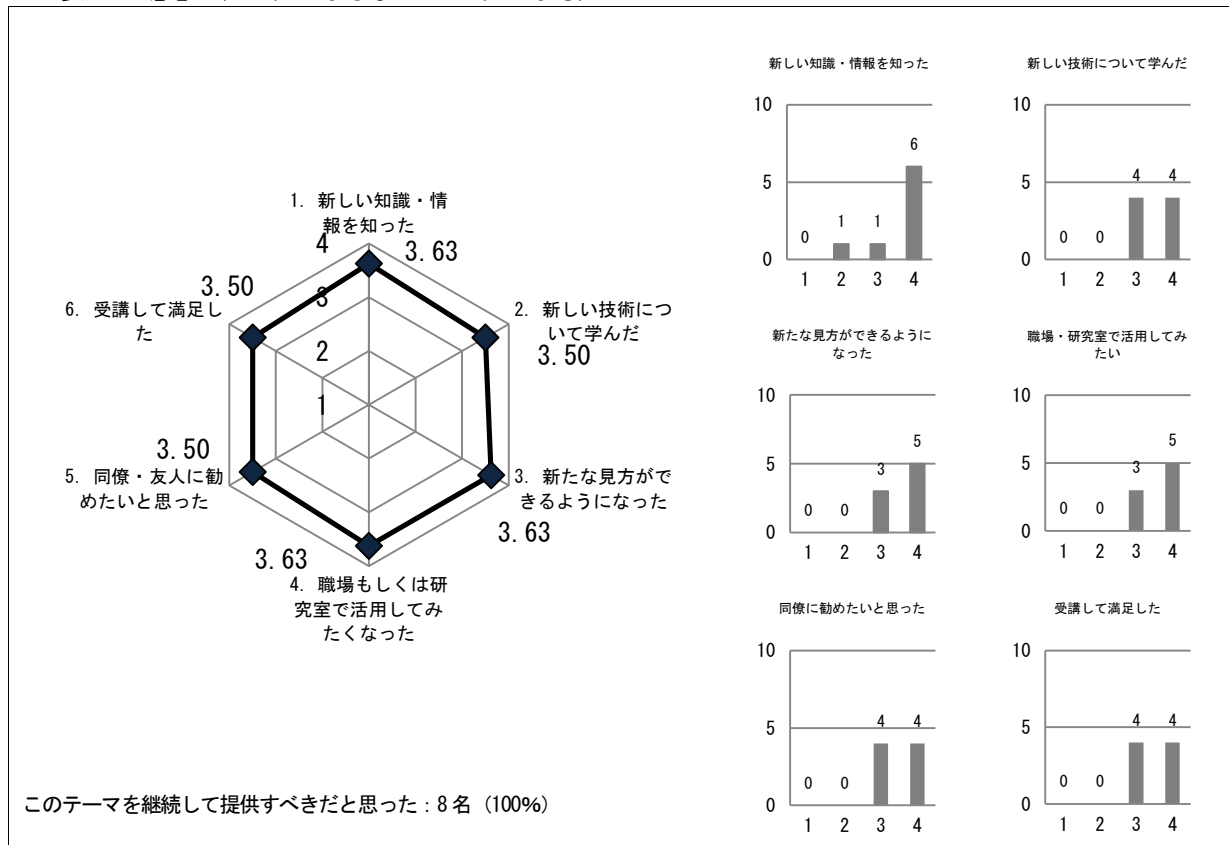
回答者属性(N=8)

【職階】 教授(0)/准教授(2)/講師・助教(4)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(0)/その他(1)/無回答(0)

【性別】 男性(4)/女性(4)/無回答(0)

【学校種】 東北大学(7)/東北大学外(1)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・発音練習のやり方 (ティッシュをつかうなど) 途中でビデオを使う。
- ・ Review some key points in effective learning; learn some new ideas of pronouncing English
- ・ English expressions in classroom. How to pronounce in English.
- ・ Positive Reinforcement.
- ・ 英語のネイティブスピーカーに対して授業をする際には、授業の個々の中身も、英語のロジックにかなったものでなければならぬということ。
- ・ 発音の練習、講義初日に使うであろうボキャブラリー
- ・ 発音の仕方, positive reinforcement の話もよかった。
- ・ Student-centered classroom

3. わかりにくいと思ったこと

- ・ わかりにくいというのではなく、シラバスに関する英単語を学びきっかけになった。終了後に自分で学ぼうという動機付けになった。
- 最後の activity があまり意味がわからなかった。Pronunciation は難しかった。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・ もう少し時間をかけてやっても良いと思った。
- ・ いつも興味のある内容が多く、大変参考になります。
- ・ もう少しゆっくり学びたいです。

「キャリア指導の理論と実践」  
(2014.9.29)

小杉 礼子 (労働政策研究・研修機構 特任フェロー)  
児美川 孝一郎 (法政大学経営学研究科 教授)

回収率 = 76.9% (20/26)

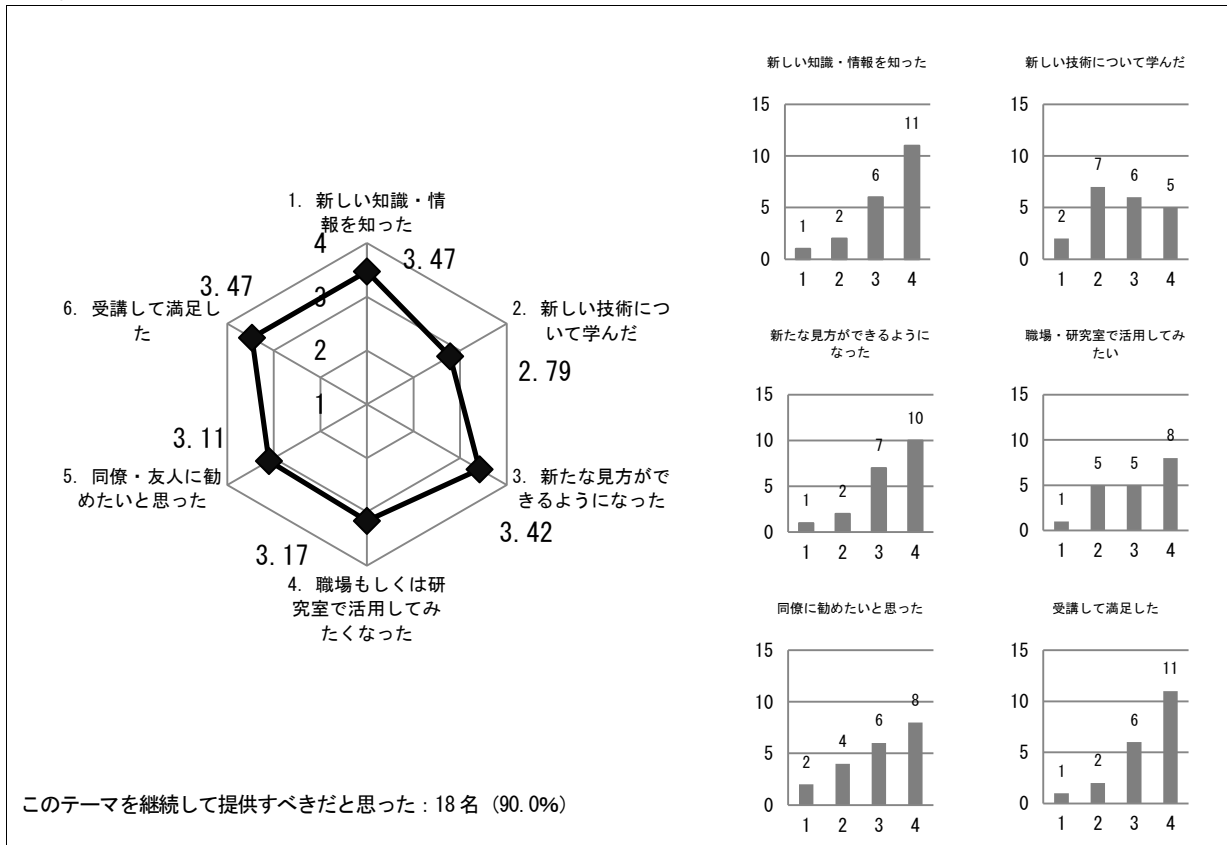
回答者属性(N=20)

【職階】教授(2)/准教授(4)/講師・助教(0)/管理職教員<学長～学部長>(0)  
/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(2)/職員<係長・主任・一般職員等>(5)/その他(4)/無回答(2)

【性別】男性(13)/女性(4)/無回答(3)

【学校種】東北大学(4)/東北大学外(14)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・中途退学の学生に対する支援は確におろそかになっていると思います、今後検討したいと思いました。
- ・それでも大学であり続けるの考え方
- ・小杉先生：後半のスライドでの各種分析。 児美川先生：スライド「何が推進力となったのか」－「民間活力」の導入 (の是非功罪)、個人的にこのあたりの問題関心とずっと持ち続けているので
- ・攻めて、本学での支援カリキュラムの見直しをする、という意欲がわきました！ありがとうございました！
- ・児美川先生のキャリアデザイン学部での初年次の取組み、及びカリキュラム見直しの5年サイクル。
- ・どの大学でもキャリア教育について、行き詰まりを感じていることを改めて感じた。
- ・データも豊富で、大変興味深いものでした。社会との接点に関連する授業
- ・結局、高等教育機関の教職員に必要なプロセスでは何なのでしょう。国公立で対策が異なりますよね？
- ・今、本学が11月までにキャリア教育の軸を構想し、大学から内外にメッセージを発信することになっており、お二人の講演内容が自分の考えとほぼ一致しておりました。イメージしていたものが確認にかわる機会となりました。大学にもち帰り主張したいと思います。
- ・キャリア教育の問い直し
- ・「キャリア教育・支援」についての体系的な考え方。
- ・就職支援の雇用統計的な理解。
- ・大学におけるキャリア教育体系の考え方。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・工学系については状況が異なると思うので、別途お話をいただきたい
- ・小杉先生の統計の解釈が微妙と思いました。
- ・説明において、英語ではなく日本語で説明すべきである。
- ・労働行政と、大学のキャリア教育の関係は、理解できたか？東北大学の目標や課題とどのように結びついているか、ほとんど見

えなかった。

- ・私はキャリア教育自体については門外漢ですので、そもそもキャリア教育自体が誰の為に、どちらを向いてやるべき（又はやらざるをえない）ものなのかにつきもう少し理解していれば、より理解が深まったと思いました。
- ・大学が担保するもののがけだが、少し分かりづらく感じました。
- ・各数値をどのように評価するのか？
- ・資料（図、グラフ等）がカラーでいただけるとありがたいです。

#### 4. セミナーに関しての意見・感想

- ・高大連携については京都堀川高校の実践には参考になるものが多い。
- ・資料は、カラーコピーにして頂きたかったです。
- ・特にありません、とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・「実践」というのは少し異なるのではないのでしょうか、ただ、内容的には非常に良かったです。

### 発達障害学生への「合理的配慮」と支援の在り方 (2014.12.16)

青野 透(金沢大学)

回収率 =86.2% (25/29)

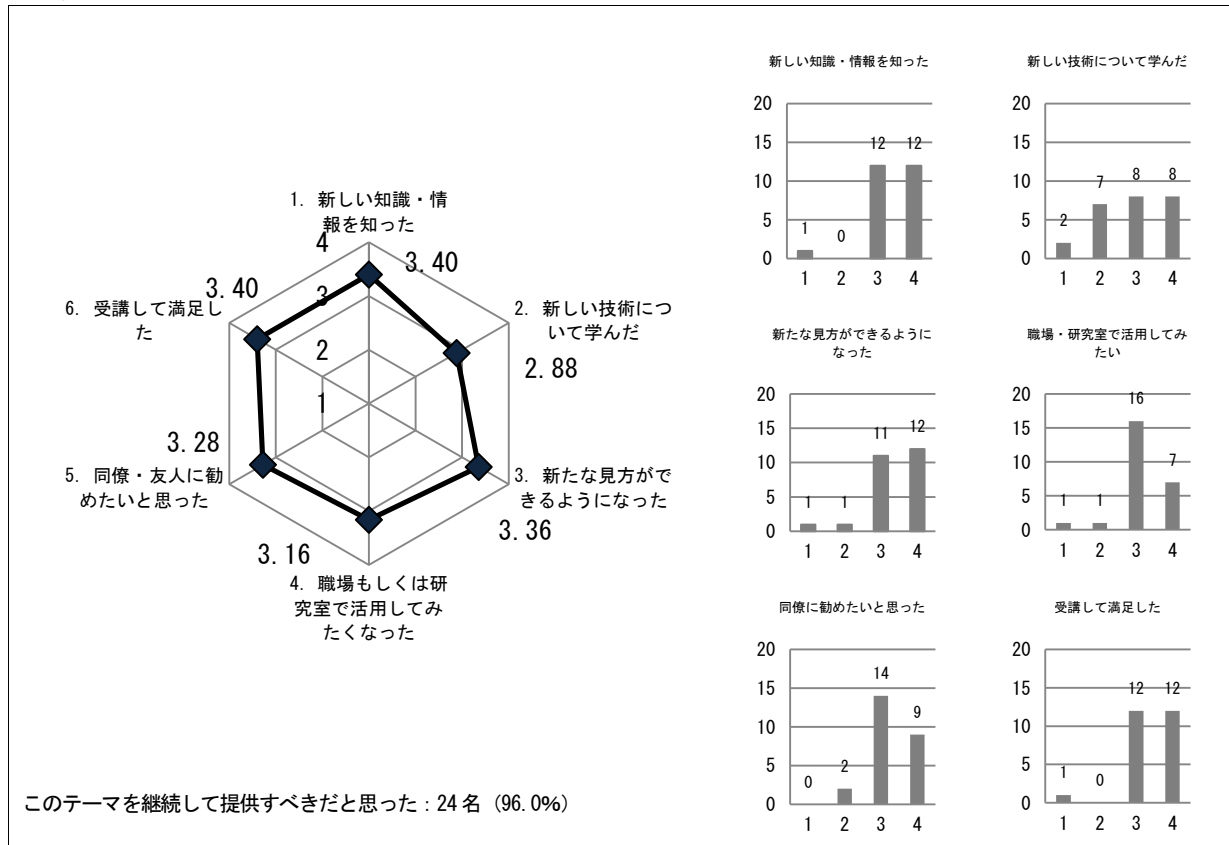
回答者属性(N=25)

【職階】教授(1)/准教授(3)/講師・助教(2)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(10)/その他(7)/無回答(1)

【性別】男性(8)/女性(16)/無回答(1)

【学校種】東北大学(10)/東北大学外(14)/無回答(1)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・大学の慣行を考えていくこと。また、青野先生が示された最後の課題は非常に意義深いものがあると感じます。
- ・青野先生の講演・・・法的立場から
- ・大学として障害者差別解消法実施に向けて、準備しなければいけないことがたくさんあると感じた（法的規程）
- ・発達障害の議論でありながら、大学教育のあり方を考える機構となった。
- ・様々な視点から意見が出たこと。
- ・特になし、マクロな話だった。
- ・他大学の事例
- ・他の大学でやられているいろいろな手立てなど
- ・診断書に基づかない支援のあり方、考えについて
- ・法的な立場からという視点
- ・青野先生の講演内容（入試時の選抜で、「教育権」としての保証をあまねく与えられるか？入試を見直したい。

- ・発達障害があるらしい本人に、そのことを自覚させる助言は有効かどうか、問題があるかどうかについて。
- ・学生自身が自らの人権を認識することが重要であるという考え方。
- ・発達障害の支援に関しては、事例を収集していく、そして対応策を検討していくしかないということの改めての確認。他大学の様々な事例を知ることができたこと。
- ・事例の提示をさせていただき、様々な職種の方々からご助言いただきとても参考になりました。ありがとうございました。
- ・発達障害学生の事例。今後似たような例が学内で生じたときに参考になる。
- ・事例内容、具体的解決策はないにしろ、問題点を深める。

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・話し合いのルールや目的、「多様な意見を出す」、「ケースで学ぶ」、「何か対応策の結論を出す」など、目標が具体化していた方が話し合いがしやすかったかもしれない。今回もファシリテータの方がよくやって下さっていたが・・・
- ・特になし、概ね既知。
- ・グループの進行
- ・わかりにくいというより、合理的配慮のむずかしさを改めて感じました。
- ・「合理的配慮」ということについてどこで線引きをするかについて（個別支援でひとくくりにはできない）
- ・何を障害とするかは、問われるテーマ。
- ・少しあわただしかったので、青野先生に合理性のお話をもう少し伺いたかったです（海外の事例、判例などあれば、もう少し具体的に）。
- ・そもそも発達障害とはどういうものなのか、説明があれば良かった。

### 4. セミナーに関する意見・感想

- ・今回のようにファシリテータがいる中でのワークショップはまとめの部分での助けもいただき、充実したものでした。
- ・発達障害学生の就職問題—就職活動で症状がひどくなることが多いと思うので—を取り上げていただきたい。
- ・受講前に法律に関する講義だということが分かりづらかった。法学の先生だということを名言していただけるとありがたかった。
- ・法律の話も大切だと思うが（そもそも知らない人も多いが）、法律に基づいて、私たちが、何ができて、何をすべきかをもっと考えられるようにするようなセミナーにして欲しい
- ・一番前の席だと、スライドを見るのに首が痛いです。
- ・ケーススタディーやJASSOの資料がためになりました。
- ・いろんな職業の方が一緒になって話すことができ、とてもよかったです。
- ・グループ討論が楽しく、有益だった。

「職員開発論 —OJD (業務開発行動)を通じた職員の企画提案力育成—」

(2014.6.14)

回収率 = 85.7% (30/35)

回答者属性(N=30)

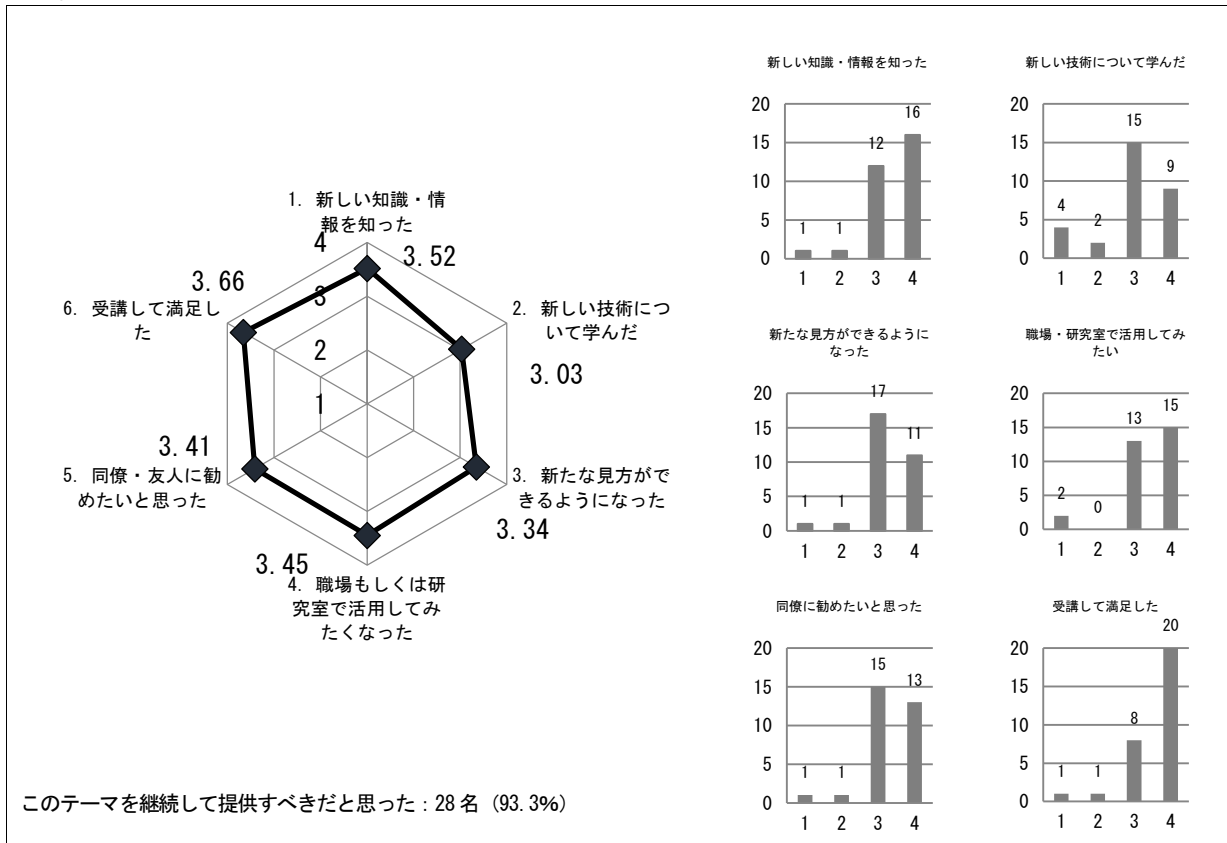
【職階】教授(2)/准教授(0)/講師・助教(2)/管理職教員<学長～学部長>(1)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(5)/職員<係長・主任・一般職員等>(19)/その他(0)/無回答(1)

篠田 道夫 (桜美林大学大学アドミニストレーション研究科 教授)

【性別】男性(6)/女性(22)/無回答(2)

【学校種】東北大学(13)/東北大学外(16)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ 職員の企画力が重要になった背景
- ・ 職員の能力が重要
- ・ 日本福祉大学の事例
- ・ 研修等で得た知識を自分でまとめ、文章にする。そしてプレゼンするというのを改めて思い直した、実践したい。
- ・ 業務開発行動の具体的方法
- ・ 職員のやる気を引き出すためのヒントを得た。
- ・ 「(ルーティンワークといった) 事務処理からの脱却」という考え方。アドミニストレータとして働く選択肢。大学職員ならではの特徵 (職員にしてできないこと)
- ・ 事業企画書を書いて改善しようという進め方。
- ・ チームで企画を作成してみたいと思う。将来のために役立つ仕事をしたいと思っているし、チームでやればみんなで成長できるかと思った。
- ・ 人事育成, 研修
- ・ 職員の能力向上方策
- ・ 政策形成, 制度確立など本学では上位者のみが任っている権限に関するテーマの中, 一般職である自身が現実的に取り組めそうな課題発見～改善策実現を示唆してくださった。
- ・ 企画書のフォーマット
- ・ 専門性の重要さを改めて感じました。
- ・ ルーチン業務に加えて政策を立案していく必要があること。
- ・ 提案していく上での心構え。
- ・ 1. プロフェッショナル職員として, 必要な能力とは。 2. 目標設定の仕方, ポイント, と事業計画書の書き方。
- ・ 企画提案力を身につけるために必要なこと。
- ・ 企業企画書。問題意識, 課題意識を文明化してみようと思えた。

- ・ 普段の自己研鑽として自分の能力を高める必要があるが、業務を通して、企画提案力を育成し、実践を積み上げていけるやり方はとても理想的だと思います。
- ・ プロフェッショナルな職員の定義が理解できた。

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・ 人事考課制度
- ・ とうとうと話されたので、昔ながらの講義形式なので、眠くなってしまって、論点を見失った。
- ・ 国立大学とはかなり事情が異なるのでよくわからないところが多かった。
- ・ No PPT, No Summary.
- ・ 職員側（特に現場レベル）から大学側に職員のマネジメントへの参画の必要性を認識してもらう方法。
- ・ OJD についてももう少し深く聞きたかった。

### 4. セミナーについての意見・感想

- ・ 事業企画書の実例が回覧されていたが、なぜか周囲の方が回してくれなかった。このようなことがないように、プロジェクターで提示していただいた方がよい。
- ・ 眠くならないようにプロジェクターで要点やイラストを出す、Active Learning 形式にする。対話形式で進行するなど。
- ・ 会場が分かりにくい。案内等（看板等）を出して頂ければありがたいです。
- ・ 事例紹介を多くとり上げて欲しい。
- ・ 同じ立場、役職ごとでセミナーがあれば、討論がしやすいかと思った。（部局が違っているとどんなことが問題なのかわからなかったりして、もったいない知識の広がりとか解決策とか、新しく理想がもてるかも。）
- ・ 色々な話聞けるので勉強になりました。ここでの話しは月曜に広めたいと思います。
- ・ 今後も目標をもって仕事に取り組んでいこうと思います。
- ・ 今後も、企画等お願いいたします。
- ・ 大変参考になりました、ありがとうございました。
- ・ わかりやすく、説明して頂いた
- ・ 自分たちが実施している活動の意義・必要性を再認識することができました。
- ・ 自分のモチベーションになりました。大変参考になりました。
- ・ ぜひ、動画配信を希望いたします。

## 「SD・PD 論 —大学教職員のプロフェッショナルリズムをいかに育むか—」

大場 淳 (広島大学高等教育研究開発センター 准教授)

(2014.8.23)

回収率 = 90.3% (28/31)

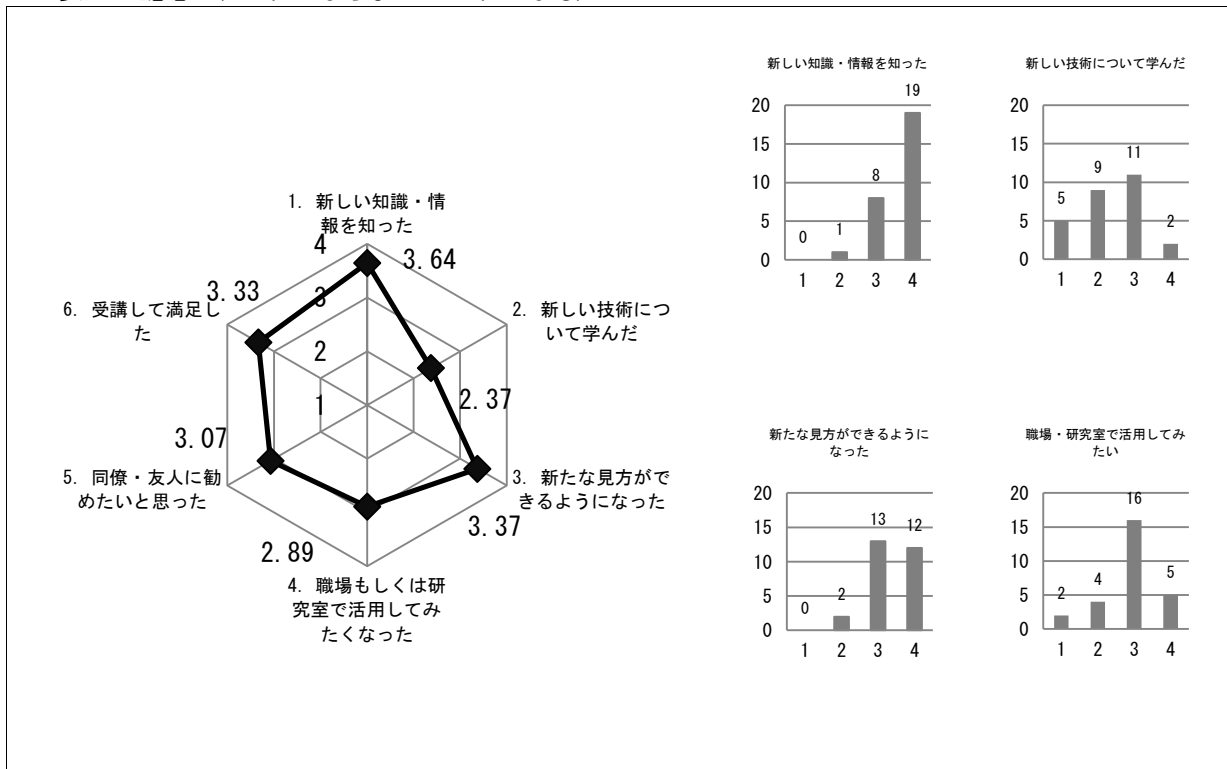
回答者属性(N=28)

【職階】 教授(2)/准教授(4)/講師・助教(1)/管理職教員<学長~学部長>(0)  
/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(5)/職員<係長・主任・一般職員等>(13)/その他(2)/無回答(1)

【性別】 男性(19)/女性(8)/無回答(1)

【学校種】 東北大学(8)/東北大学外(19)/無回答(1)

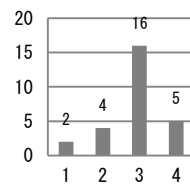
### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



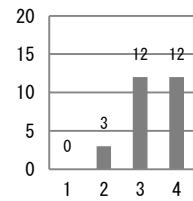


このテーマを継続して提供すべきだと思った：27名（96.4%）

職場・研究室で活用してみたい



受講して満足したい



## 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・日本と諸外国との比較（それぞれの国やその文化に合わせた国際化が必要である）。
- ・大学におけるリーダーシップのあり方（若手も含めた、いろいろな所でリーダーシップが発揮されくべき）
- ・「専門性」と向きあい意識しながら業務を行う必要性を感じました。
- ・リーダーシップの必要性。ケーススタディの有効性。
- ・大学教職員の役割と責任
- ・結論を期待して参加したが、逆に”考え方”の部分で自身の考えの裏付け、根拠をもてる講義であり、有意義であった。吉武先生のおっしゃった「経営学の視点」などはまさに、常々思いつつも他に声を聞いたことがなかったので、大変参考になった。
- ・リーダーシップ論、学長に関する日米の違いはとて有益だった。
- ・教育学と経営学とのコミュニケーションの必要性について学ぶことができたこと。
- ・米国の専門職員のあり方や団体、開発プログラム、雇用について最近の動向も合せた整理が役に立ちそうである。所属の研修委員会でも彼我の違いを説明しつつ、意見が言えそうである。
- ・プロフェッショナルの学会について
- ・大学リテラシーについて
- ・チーム学習、リーダーシップ開発
- ・プロフェッショナルリズムの養成には共に学ぶ場が必要であること。
- ・プロフェッショナルを身近に感じた。
- ・リーダーシップについて、1人ではなく全ての人がもたなくてはいけない。
- ・学内に目を向けるのではなく、学外で知識を吸収し、自立すること（大学に帰属しない）
- ・文科省答申などを引いて歴史的な流れがよくわかった（特に日本の課題について）。議論の中が多くのことを学んだ。
- ・リーダーシップについて。
- ・多様なグローバルの視点。
- ・リーダーシップ論
- ・教員と職員との第三の領域についての定義、実践などを自分でくらべ、業務に役立てたい
- ・職名や単体名の具体例、今後、必要に応じて検索のキーワードにしたいと思います。ありがとうございました。
- ・講演の中では、特に強調されていなかったが、発達障害や統合失調症系の学生に対する指導などにおいて、教員外専門職（勤務校では真の意味でのプロが居ない点も問題）との協働が重要であることを再認識した。
- ・センターと呼ばれる組織に専門性の高い職員が所属していることを知ったのは、今後の大学内活動で役に立つと思う。職員の専門性を学生・教員に宣伝して、共通認識を持つことが一歩と思う。

## 3. わかりにくいと思ったこと

- ・職員のプロフェッショナルリズムの育成と制度論の関連。
- ・プロフェッショナルリズムのあり方がわからなかった。
- ・言葉の定義が始まるのではなく、なぜこのようなテーマを学ぶ必要があるのがから説明いただきたいかった。
- ・専門職の事例について
- ・専門団体について。（まだ未知の範囲だったので。）

## 4. セミナーについての意見・感想

- ・議論の時間を多くとっていただき勉強になりました。
- ・内容を理解するためケーススタディを踏まえて、お話をして頂きたかった。理論、定義よりもっと現場ではどのように胎動すべきかと結びつけて頂けると理解が深めてくれると思った。
- ・暑かった(途中まで、かなり)
- ・意見交換の部分が有意義だと考えます。
- ・午前、午後ともテーマと講演内容にズレを感じました。そういう意味では若干期待はずれであった。ただし、いろいろ学ぶ点が多かったのがありがとうございました。
- ・事例研究（紹介）、発表も増やしていただきたい。
- ・スライドを追うのに精一杯でした。

教育評価分析センター（CIR）キックオフセミナー  
「学修成果検証に基づく教学マネジメントの推進と課題」  
(2014.9.10)

杉本 和弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授、教育評価分析センター）  
串本 剛（東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師、教育評価分析センター）  
須藤 祐子（東北大学工学研究科工学教育院 特任准教授）  
石川 洋（東北大学理学研究科物理学専攻 准教授）  
細川 敏幸（北海道大学高等教育推進機構 教授）

回収率 = 48.9% (23/47)

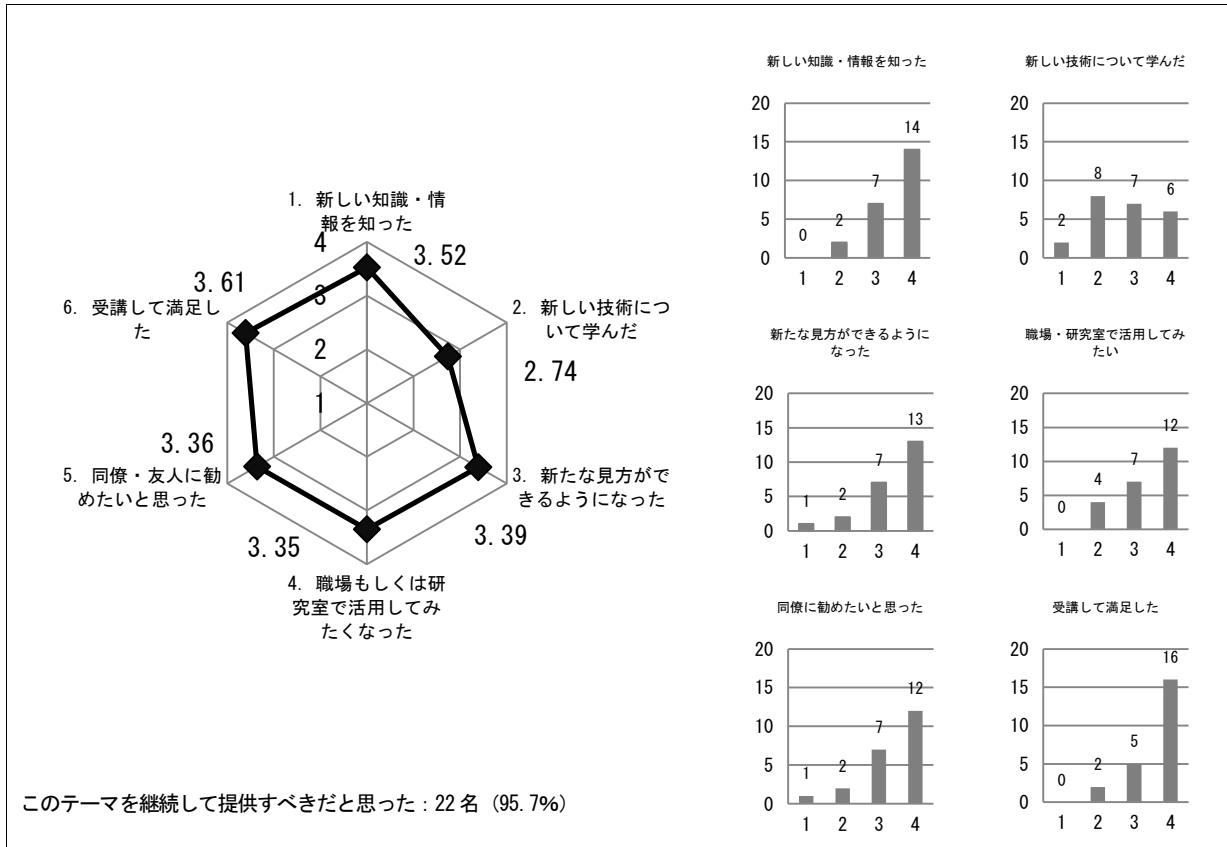
回答者属性(N=23)

【職階】教授(6)/准教授(3)/講師・助教(0)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(2)/職員<係長・主任・一般職員等>(7)/その他(3)/無回答(2)

【性別】男性(16)/女性(6)/無回答(1)

【学校種】東北大学(1)/東北大学外(21)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- IRの意義や可能性について、学内で理解を得ていくにあたって、羽田先生のお話は大変重要なことであるように思いました。
- 石川先生によるミクロな、しかし実践的事例
- 各ケースにおける視点
- 東北大ならびに北大の具体的な取り組みと課題を知りえたこと、またIRの共通の検討事項の整理が出来た点。
- 最後の羽田先生のまとめは端的で良かった。
- GPAを利用して、大学適応度を図ることができる点。
- 履修行動を通じて、学部間比較を行う点。
- 石川先生のお話で「理解度と興味の度合から、授業改善に結びつける」具体的な取組みが、とても参考になりました。
- 教務データを活用すれば、様々なことが見えてくることが分かった。
- GPAの利用法と間接データの利用を知った。
- 大学での取り組みがわかり、参考となった。
- データに基づいて議論すること、結果やデータをわかりやすくみせること。
- ①履修行動と学修成果の関係、②データに基づく教育改善 など、本学においても持っているデータを、どのように活かしていくのか、そのために参考になりました。また、IR機能をはたらかせていくことが重要と感じた。学びの多いセミナーでした、ありがとうございました。
- 北大の他大学と比較したデータが興味深かった。他大学と比べる時の自大学の特色をしるのは大事だと思った。
- ①学部でのデータ活用の実践方法(GPAの活用) ②因子分析による学修成果の領域とGPA等との関係(回帰分析)
- 機構全体の体系的な取組み
- 工学教育院のコンセプト、具体的な施策
- 学習成果の測定、アウトカム

3. わかりにくいと思ったこと

- わかりにくいという点ではありませんが、小規模大学でどのような体制でIRを実施していけば良いか、アドバイス等、うかがって見たかったです。
- データの見方。あまり説明が十分でない数字をどう理解していいのか判断できない(と感じた)。
- データ共有(公開)の方法とガイドラインをどう考えるか。

#### 4. セミナーについての意見・感想

- ・5名の先生方からじっくりと話を聞くことができ、大変勉強になりました。(わからないのでまず知りたい、という状態でしたので。)
- ・様々な視点からの議論があったので、参考になりました。
- ・ありがとうございました。
- ・理系学部の取り組みを並列して、文系学部の取り組みも紹介していただきたかったです。
- ・貴学を中心に様々なIRに関する取り組みをご紹介いただき、大変参考になりました。本学のIR活動の参考にさせていただきます。
- ・QとAは演者ごとの方が望ましいように思います。プレゼン直後の方が、質問者も臨場感を持って質問できますので・・・

**SDP 若手職員のための大学職員論 (3) ～若手の力, 大学の未来～**  
(2014.12.20)

**本山 慶樹 (名城大学)**  
**大西 達也 (京都産業大学)**

回収率 =70% (7/10)

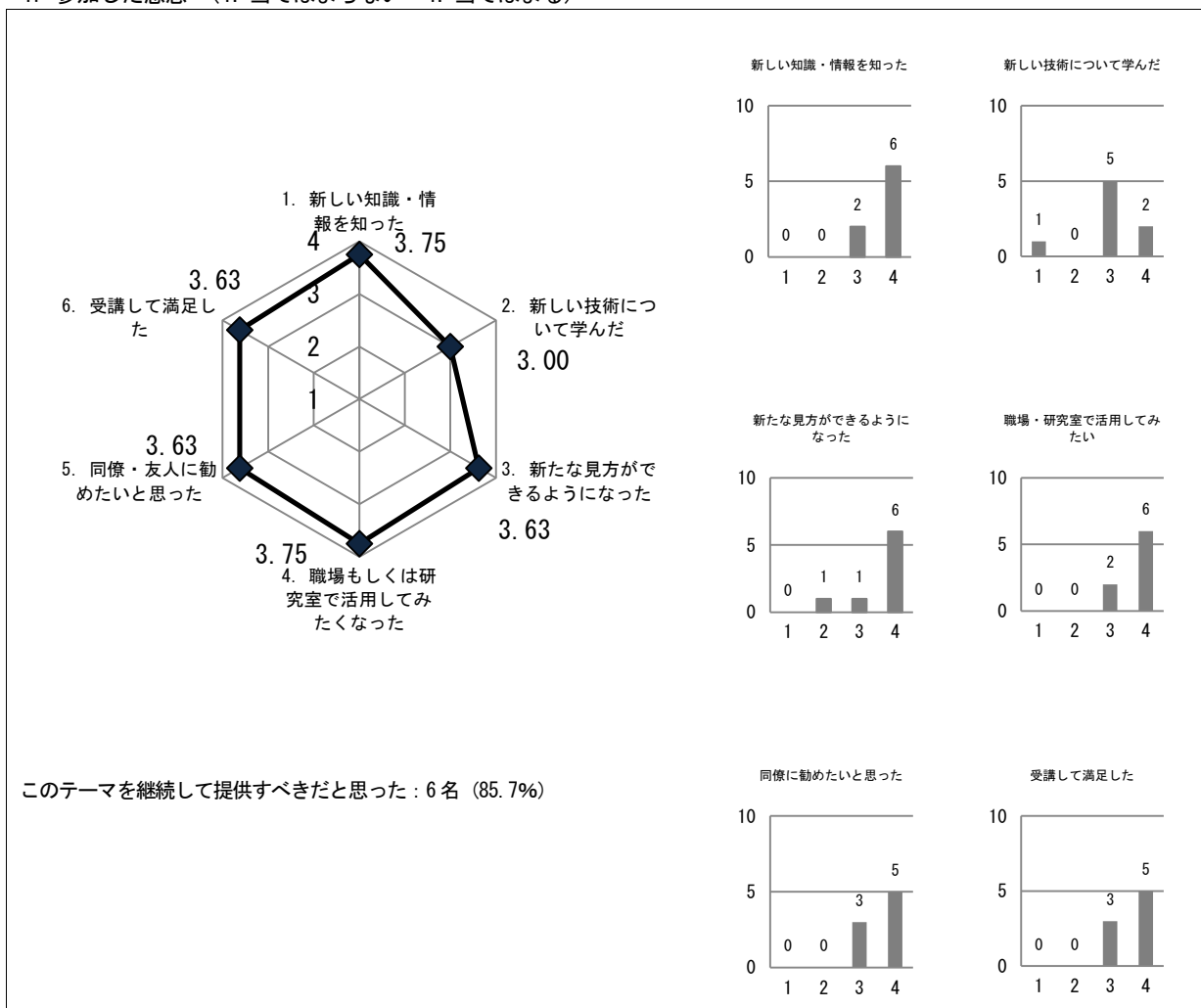
回答者属性(N=7)

【職階】教授(0)/准教授(0)/講師・助教(0)/管理職教員<学長～学部長>(0)/博士課程(0)/職員<部長・課長以上>(0)/職員<係長・主任・一般職員等>(7)/その他(0)/無回答(0)

【性別】男性(3)/女性(3)/無回答(1)

【学校種】東北大学(3)/東北大学外(4)/無回答(0)

#### 1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



#### 2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・①名城大学山本さんのプロジェクトの進め方 ②京都産業大学大西さんのCO-OP教育の考え方
- ・ワークショップを通じて新たなことを始めるための必要な手立てを実際に体感し、今後に役立つと感じた。何かを新しく始めたり、既存のものを大きく変えるためには、専門的な知識や計画力、柔軟性、人脈、高いモチベーション、など様々なものが必要になる。しかし、たとえ難しいものであっても、全てゼロから作るのではなく、あるものを組み合わせることで新たなものを生み出すこともできる。
- ・ゲストの方お二人の話を聞き、特に国立大学のような環境におかれていると忘れがちな、大学教育をめぐる急速な情勢・環境の変化に対して、若い職員の力を積極的に活用して果敢にかつ柔軟に応じようとしている事例を知り、大変刺激を受けた。少しずつでも業務のなかで活かしていきたい。

- ・会議の運営方法や学内SDの強化などの話は本学でも行っていくべき事項ではないかと思い、役立った。
- ・全般的に参考になりましたが、特に事例としてご報告いただいた「広報について」の内容は、今後の業務や課外活動においてすぐにも参考にしたいと感じました。
- ・①実際のWSの活動が、学内でWGを立ち上げ、運営していく際の参考になった。②本学の広報活動やイメージ戦略に関して見直す機会になった。③他大学の若手職員が描く将来像を垣間見れ、良い刺激になった。
- ・プロジェクト立ち上げの際に気をつけること

### 3. わかりにくいと思ったこと

- ・グループワークでのテーマ
- ・お話の内容については、やはり自分の業務とは異なる分野であることもありついていくのがやっとならなかつた。
- ・私自身がキャリア支援、教育に携わっていないため、講演の中のお話が理解できなかった。自分自身、学内の業務や世の中の流れをもっと知るべきだと気付かされた。
- ・全体を通じて適切なレベルだったと感じます。ですので、簡単すぎず、かつ難しすぎずの良いバランスだったと思います。

### 4. セミナーについての意見・感想

- ・途中退出など、いろいろとご迷惑をおかけして大変申し訳ありませんでした。さらに、セミナーのあと、そのまま休みに入っ  
てしまい、アンケートの提出が大変遅くなり申し訳ありませんでした。差し出がましいお願いではありますが、グループワ  
ークの結果などございましたら拝見させていただくことは可能でしょうか。何卒よろしくお願いいたします。
- ・自分の大学に熱い思いを持って、様々な取り組みをされている方からお話を聞かせていただき、自分自身の普段の業務への取  
組みを振り返ることができた。  
もちろん国立大学が私立大学と同じような変革を行えるとは限らないが、日々の仕事の中でも、当たり前と思ってそのまま受け  
入れるのではなく、小さなことからでも改善できる部分は変える努力をしたいと思った。
- ・スタッフの方々を含め、大学業務の現状をなんとか良く変えていきたいという若手職員が多くいらっしゃるということを知り、  
大変励みになりました。機会があればぜひまた参加してみたいと思います。
- ・1分間での自分の意見の発表、少人数でのワークグループ形式での議論は、改めて自分の考えをまとめる機会となり、さらに人  
へ伝える難しさを感じました。大学職員の中でも外部との接触のあるキャリアセンターや入試センターといった部署とは異なり、  
総務という部署では外部への意見の発表や外部への情報発信の機会が少ないため良い刺激となりました。また、その必要性  
も感じました。
- ・今回初めて参加しましたが、内容はもちろん、同じ志を持った大学の仲間と知り合うことができ、とても有意義な一日を過ごす  
ことができました。ありがとうございました。大変貴重な機会をいただきありがとうございました。WSの形態についてですが、  
定員がせっかく少人数ですので、コクダイバンのように多くの人と短い時間ではなく、違うグループになってしまった方も意  
見交換し、深く交流できればなと感じました。
- ・全員が発言したり、グループワークで全員に役割があるのは良いと思った。

### 3-3. CPD 教職員一覧

2014年4月1日付

役職	氏名	所属
大学教育支援センター長	◎羽田 貴史	高度教養教育・学生支援機構副機構長, 教授 (高等教育開発室)
同 副センター長	◎杉本 和弘	同 准教授 (高等教育開発室)
同 調査研究部門長	(兼任) 杉本 和弘	
同 プログラム開発部門長	◎北原 良夫	同 准教授 (言語・文化教育開発室)
同 プログラム実施部門長	◎芳賀 満	同 教授 (人間総合科学教育開発室)
高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門長	◎関内 隆	同 教授 (高等教育開発室), 高等教育開発部門長
同 研究開発員	◎今野 文子	同 助教 (高等教育開発室); 調査研究等
同 研究開発員	葛生 政則	同 准教授 (高等教育開発室); プログラム実施
同 研究開発員	串本 剛	同 講師 (高等教育開発室); 調査研究
同 研究開発員	足立 佳奈	同 助手 (高等教育開発室); プログラム実施
同 研究開発員	鈴木 学	同 助手 (高等教育開発室); プログラム実施
同 研究開発員	橘 由加	同 准教授 (言語・文化教育開発室); プログラム開発
同 研究開発員	ENSLEN Todd	同 講師 (言語・文化教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	SHEARON Ben	同 講師 (言語・文化教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	EICHHORST Daniel	同 講師 (言語・文化教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	藤本 敏彦	同 准教授 (人間総合科学教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	木内 喜孝	同 教授 (臨床医学開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	吉武 清實	同 教授 (臨床教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	上原 聡	同 教授 (言語・文化教育開発室); プログラム開発・実施
同 研究開発員	猪股 歳之	同 助教 (キャリア開発室); 調査研究
同 研究開発員	佐藤 勢紀子	同 教授 (言語・文化教育開発室); プログラム実施
同 研究開発員	菅谷 奈津恵	同 准教授 (語学教育室); プログラム実施

同 研究開発員	中川 学	同 講師 (人間総合科学教育開発室) ; プログラム実施
同 研究開発員	中島 平	教育情報学研究部・教育部准教授 ; プログラム開発・実施
同 研究開発員	三石 大	教育情報基盤センター准教授 ; プログラム開発・実施
同 研究開発員	邑本 俊亮	国際災害科学研究所教授 ; プログラム開発・実施
同 研究開発員	佐俣 紀仁	法学研究科助教 ; プログラム開発・実施
同 共同開発員	藤村 正司	広島大学 ; 大学教員調査
同 共同開発員	加藤 かおり	新潟大学 ; イギリスの大学教員養成
同 共同開発員	土持 法一	帝京大学 ; ポートフォリオ開発
同 共同開発員	渡部 芳栄	岩手県立大学 ; 管理職調査
同 共同開発員	丸山 和昭	福島大学 ; 大学教員調査
同 共同開発員	鳥居 朋子	立命館大学 ; 大学教育マネジメント, IR
同 共同開発員	Sophie Arkoudis	メルボルン大学 ; NFP
同 共同開発員	Chi Baik	メルボルン大学 ; NFP
同 共同開発員	Laura Hahn	イリノイ大学 ; 英語で授業
教育研究支援者	◎稲田 ゆき乃	拠点事業運営全般, SDP, PD セミナー等
教育研究支援者	和田 由里恵	EMLP, PD セミナー, 出版・編集等
事務補佐員	齊藤 ゆう	拠点事業運営全般, PD セミナー等
事務補佐員	朱 嘉琪	ICT 全般, 動画撮影編集等
事務補佐員	鎌田 裕子	拠点事業広報等

◎部門長会議メンバー

## 3-4. CPD 共同利用運営委員会 委員一覧

2014年4月1日付

所 属	職 名	氏 名
高度教養教育・学生支援機構	教 授	花輪 公雄
高度教養教育・学生支援機構	教 授	羽田 貴史
高度教養教育・学生支援機構	教 授	芳賀 満
高度教養教育・学生支援機構	准教授	杉本 和弘
高度教養教育・学生支援機構	准教授	北原 良夫
教育学研究科	教 授	柴山 直
工学研究科	教 授	湯上 浩雄
農学研究科	教 授	五味 勝也
教育情報基盤センター	教 授	静谷 啓樹
岩手大学	教 授	後藤 尚人
山形大学	教 授	小田 隆治
東北学院大学	教 授	井上 義比古
名古屋大学	教 授	夏目 達也
法政大学	教 授	川上 忠重

### 3-5. CPD 教職員の活動（2014年4月～2015年3月の主な活動）

センター長・教授 羽田 貴史

#### 〔研究業績〕

1. (単著)「FDの反省と課題」『IDE 現代の高等教育』No.559, 2014年4月, 4-10頁.
2. (単著)『『大学のガバナンス~その特質を踏まえた組織運営の在り方を考える~』へのコメント』『高等教育研究叢書 128 大学のガバナンス~その特質を踏まえた組織運営の在り方を考える~ 第41回研究員集会の記録』広島大学高等教育研究開発センター, 2014年5月, 153-156頁.
3. (単著)「教育マネジメントと学長リーダーシップ論」『高等教育研究』第17集, 2014年5月, 45-63頁.
4. (編集・執筆)「はじめに 知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究」及び「第1章 Academic integrity 保証に関する世界の動向と日本の課題」, 科学研究費基盤研究 (B)『知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究』最終報告書 (研究代表者), 1-28頁, 全197頁, 2014年6月.
5. (編集・執筆) 国立大学協会政策研究所『国立大学の多様な大学間連携に関する調査研究』研究代表者, 国立大学協会委託研究, 2014年7月, 4-13頁及び68-69頁, 全119頁.
6. 企画『大学教育における ICT 活用の光と影』IEHE Report 59 平成26年度 IDE 大学セミナー / 第21回東北大学高等教育フォーラム報告書, IDE 大学協会東北支部・東北大学高度教養教育・学生支援機構, 全体討議司会, 全157頁, 2014年11月.
7. 編集・執筆『科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得—』日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編, 丸善出版, 77-81頁および103-109頁, 2015年3月.
8. 編集・執筆, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学教員のブレイク・スルー』PD ブックレット Vol.6, 全141頁, 2015年2月.
9. 座談会「高等教育開発推進センターの到達点と展望」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第10号 (10年間の軌跡と総括), 15-41頁, 2015年3月.
10. 編集・執筆, 「はじめに」及び「研究倫理に関する世界の動向と日本の課題」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『研究倫理の確立を目指して—国際動向と日本の課題—』高等教育ライブラリ9 (東北大学出版会), 2015年3月, i-vi頁及び1-37頁, 全188頁.

#### 〔学会活動〕

1. 第17回日本高等教育学会大会自由研究発表「Academic Integrity をめぐる世界の動向と日本の課題」 (立石慎治と共同) 2014年9月13日 (大阪大学) .

#### 〔各種活動〕

1. 「社会の構造変化と大学組織改革」, 広島大学高等教育研究開発センターRIHE セミナー, 基調講演, 2014年4月26日 (広島大学).
2. 「大学教員の研究活動における倫理—責任ある研究活動のために—」, 奥羽大学特別研修セミナー, 講演, 2014年5月16日 (奥羽大学).
3. 「ポスト教養部廃止第4段階の東北大学」, 国立大学教養教育実施組織会議全体協議会, 話題提供, 2014年5月30日 (京都大学).
4. 「研究倫理確立に向けた大学・学会の責務—責任ある研究活動をめざす国際動向と日本の課題—」,



- 地域科学研究会セミナー『研究活動倫理の検証と進化策Ⅲ』, 講演, 2014年6月3日(東京).
5. 「世界のFDの課題—欧米と日本—」, 東京工科大学全学教職員会, 講演, 2014年6月18日(東京工科大学).
  6. 「Academic Integrity 世界と日本の動向」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 正午PD会 第1回, 講師, 2014年6月25日(東北大学).
  7. 「研究倫理確立に向けた大学・学会の責務—責任ある研究活動をめざす国際動向と日本の課題—」, 玉川大学FD講演会, 講演, 2014年7月30日(玉川大学).
  8. 「Academic integrity (学問的誠実性) 保証に関する世界の動向と日本の課題」, 三菱総合研究所, 講演, 2014年8月6日(東京).
  9. 「学士課程教育の課題: 日本と世界の現在」, 関東学院大学全学FD・SDフォーラム, 講演, 2014年9月3日(関東学院大学).
  10. 「研究倫理をめぐる世界の動向と日本の課題」, 東北大学東北アジア研究センター, 講演, 2014年10月27日(東北大学).
  11. 「高等教育大衆化での研究大学の役割—研究と教育を統合した高大接続の展開—」, 大阪市立大学 第22回教育改革シンポジウム, 基調講演, 2014年12月8日(大阪市立大学).
  12. 「研究倫理の国際動向と日本の課題」, 東北大学金属材料研究所, 講演, 2015年2月19日(東北大学).

**副センター長兼調査研究部門長・准教授 杉本 和弘**

**〔研究業績〕**

1. (単著)「仙台青葉学院短期大学: 地域社会のニーズに応える短大の新たな可能」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.186 (特集 短期大学の可能性), 24-27頁, 2014年5月.
2. (単著)「京都産業大学: 世界標準の産学連携教育を目指す『コーオブ教育』」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.187 (特集 インターンシップの教育効果), 20-23頁, 2014年7月.
3. (単著)「名城大学: 開学90周年に向け“動く名城大学”を伝える」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.188 (特集 進学ブランド調査2014), 50-53頁, 2014年9月.
4. (単著)「中規模大学の利点を生かした民主的教学マネジメント—宮城学院女子大学の事例」, 私学高等教育研究所編『大学の特色に応じた教学マネジメント—2013年度訪問調査の記録』私立高等教育研究叢書1, 39-44頁, 2014年10月.
5. (単著)「京都光華女子大学: EMの実現をデータで支える活きたPDCAサイクル」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.189 (特集 戦略的意思決定を支えるIR), 18-21頁, 2014年11月.
6. (翻訳) マーク・フェルマン「オーストラリアにおける研究倫理の保証—今後の方向性を探る—」, 及び「解説 オーストラリアにおける研究倫理をめぐる取組動向—フェルマン論稿に寄せて—」, 科学研究費基盤研究(B)『知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究』(研究代表者: 羽田貴史) 最終報告書.
7. (単著)「神戸学院大学: 『未来志向』による果敢なキャンパス再編と新学部創設」リクルート編『カレッジマネジメント』No.190 (特集 学部・学科トレンド2015), 32-35頁, 2015年1月.
8. (単著)「皇學館大学: 学部廃止の試練を経て地域のニーズに応える学部創設へ」, リクルート編

『カレッジマネジメント』No.191 (特集 地域で選ばれる大学), 16-19 頁, 2015 年 3 月.

#### 〔学会活動〕

1. オセアニア教育学会において紀要『オセアニア教育研究』第 20 号の企画・編集 (編集委員長).
2. 日本高等教育学会において紀要『高等教育研究』第 18 号の編集 (編集委員).
3. 日本比較教育学会において紀要『比較教育研究』第 50 号・51 号の編集 (編集委員).

#### 〔各種活動〕

1. 第 20 回東北大学高等教育フォーラム (新時代の大学教育を考える [11]) 「グローバル人材の育成に向けて—これからの高等教育・大学教育における課題」, 企画・運営, 2014 年 5 月 16 日.
2. 大学職員能力開発プログラム (SDP) 「若手職員のための大学職員論」 (東北大学), 企画・運営・司会, 2013 年 7 月 13 日.
3. 「オーストラリア高等教育における学習成果検証の現状と課題」, 河合塾勉強会, 講師, 2014 年 5 月 30 日.
4. 「『大学』を学ぶコンテンツの設計とアクティブ・ラーニング」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 正午 PD 会 第 3 回, 講師, 2014 年 7 月 10 日.
5. 「オーストラリアにおける高等教育の政策・実践とその日本への示唆」, 文部科学省生涯学習政策局第 25 回海外教育事情調査研究会, 講師, 2014 年 7 月 29 日.
6. 米国・ハワイ大学マヌア校におけるアカデミック・リーダーシップ育成プログラム及び IR 活動に関する調査, 2014 年 8 月 3-10 日.
7. 「比較からみる世界の高等教育—グローバル時代の人材育成・獲得を考える—」, 東北大学 大学教育支援センター PD プログラム, 講師, 2014 年 8 月 23 日.
8. 「SD/PD 論—大学教職員のプロフェッショナルリズムをいかに育むか—」 (講師: 大場淳), 東北大学 大学教育支援センター PD プログラム, 企画・司会, 2014 年 8 月 23 日.
9. 「学修成果測定をめぐる国際動向」, 教育評価分析センター (CIR) キックオフセミナー (東北大学), 企画・講師, 2014 年 9 月 10 日.
10. PFFP/NFP ワークショップ「比較の目を育てる」, 企画・講師, 2014 年 10 月 4 日 (東北大学).
11. 大学職員能力開発プログラム (SDP) 「東北大学職員のための『大学変革力』育成講座」, 企画・運営・司会, 2014 年 10 月 11 日/第 2 回: 12 月 6 日/第 3 回: 2015 年 1 月 31 日 (東北大学).
12. 「パネルディスカッション『実践的な職業教育を担う教育スタッフをめぐる』」, 国際セミナー『第三段階教育における質保証と教育スタッフ 一日・独・豪の比較考察をもとに—』, パネリスト, 2014 年 11 月 15 日 (TKP 天神駅前シティセンター).
13. IDE 大学セミナー「大学教育における ICT 活用の光と影」, 企画・運営, 2014 年 11 月 17 日 (仙台ガーデンパレス).
14. 「アクティブラーニングを促す教室空間の創造—学生の学習経験へのインパクト—」, 東北大学 大学教育支援センター PD プログラム, 企画・司会, 2014 年 12 月 18 日.
15. 大学職員能力開発プログラム (SDP) 「若手職員のための大学職員論 (3) —若手の力, 大学の未来—」, 企画・運営, 2014 年 12 月 20 日.
16. 「中国における大学教育の内部質保証—北京師範大学の学士課程教育を事例に—」, 東北大学 大学教育支援センター PD プログラム, 企画・司会, 2015 年 2 月 4 日.
17. 英国におけるアカデミック・リーダーシップ・プログラム及び IR (情報提供システム) に関する

る調査, 2015年2月9-19日.

18. 米国・カリフォルニア州における一般教育のカリキュラムと実施体制に関する調査, 2015年2月21日~3月5日.
19. 豪州におけるアカデミック・リーダーシップ・プログラム及び IR (情報提供システム) に関する調査, 2015年3月18~29日.
20. 東北大学 履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム」(EMLP), プログラム責任者.
21. 東北大学 大学職員能力開発プログラム (SDP), プログラム担当者.

#### プログラム開発部門長・准教授 北原 良夫

##### 〔研究業績〕

1. 『平成26年度 TOEFL ITP テスト実施報告書』, 第1部「資料」, 東北大学学務審議会外国語委員会英語教科部会編.

##### 〔各種活動〕

1. 第20回東北大学高等教育フォーラム (新時代の大学教育を考える [11]) 「グローバル人材の育成に向けて—これからの高校教育・大学教育における課題—」, 討議司会, 2014年5月16日.
2. 東北大学 大学教育支援センターPDプログラム/東北大学高度教養教育・学生支援機構言語・文化教育センター主催セミナー「グローバル時代の英語教育—高大5年間で伸ばす英語運用能力」, 企画・準備・当日運営・司会, 2014年9月25日.
3. 東北大学高度教養教育・学生支援機構言語・文化教育センター設立記念セミナー「グローバル時代における外国語教育の新たな可能性」, 企画・運営・第2部司会, 2014年10月25日.
4. 東北大学学務審議会, 学務審議会外国語委員会及び学務情報システム運営委員会などの各種委員会委員.

#### プログラム実施部門長・教授 芳賀 満

##### 〔研究業績〕

1. (単著)「研究, 教育・大学運営業務, 私生活におけるブレーク・スルー—地上的なものからりりくすることなくそれらにまみれて—」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学教員のブレークスルー』PD ブックレット Vol.6, 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 2015年2月6日, 126-132頁.
2. (単著)「人文社会科学教育室の活動記録」『高等教育開発推進センター紀要』10号, 第2部「高等教育開発推進センターの活動記録」2. センター各室の活動記録, 2015年3月31日, 83-92頁.
3. (単著)「地の塩」『高等教育開発推進センター紀要』10号, 2015年3月31日, 137-139頁.
4. (単著)「シュリーマンの魅せられた世界—ギリシア美術の歴史」, 天理大学附属天理参考館編『ティリス遺跡原画—シュリーマンの今日的評価—』平成26年度天理大学学術・研究・教育活動助成成果報告書, 天理大学出版部, 2015年2月28日, 10-16頁.

##### 〔学会活動〕

1. 日本学術会議, 史学委員会「歴史認識・歴史教育に関する分科会」委員.
2. 日本学術会議, 史学委員会「文化財の保護と活用に関する分科会」委員.

3. 日本学術会議提言「文化財の次世代への確かな継承－災害を前提とした保護対策の構築をめざして－」を政府内外に対して発出，2014年6月24日。
4. 日本学術会議，哲学委員会「哲学・倫理・宗教教育分科会」委員。
5. 日本学術会議，史学委員会，「アジア研究・対アジア関係に関する分科会」委員。
6. 日本学術会議，史学委員会，「博物館・美術館等の組織運営に関する分科会」委員。
7. 日本学術会議，哲学学委員会，「古典精神と未来社会分科会」委員。
8. 日本ユネスコ国内委員会 文化活動小委員会 ユネスコ記憶遺産選考委員会（記憶遺産事業について調査・審議する）世界記憶遺産事業について調査・審議。「東寺百合文書」および「舞鶴への生還 1945～1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」をユネスコに申請，2014年1月22日-2016年3月31日。
9. 東北大学 大学教育支援センターPDプログラム「流動化する民主主義：グローバル社会の担い手を育てる大学教育の課題」，司会，2014年12月4日。
10. 東北大学大学院生命科学科附属浅虫海洋生物学教育研究センター 東北海洋生物学教育コンソーシアム，企画，2014年12月13日。
11. 「教養教育と海～歴史的存在としての海洋生物」，第2回東北海洋生物学教育フォーラム『大学教育と海』，講演，2014年12月13日。
12. 「メソポタミア，西アジア，ギリシア，ヨーロッパ，西洋を相対化する視座～ユーラシア大陸全体からみる～」講演，2014年12月21日（京都ギリシアローマ美術館）。
13. 「未来を「考えるための標（Denkmal）」としての世界記憶遺産」，明日の京都文化遺産プラットフォーム『記録が結ぶ「時の絆」～世界記憶遺産～』，講演，2015年1月18日（立命館大学）。
14. 企画・通訳「冥界の深度と意匠～死後世界のコスモロジーとその諸相をめぐって」(Depth and Design of the Otherworld: Studies on Cosmologies and Other Aspects After Death)，空間史学研究会国際シンポジウム，2015年3月19日（東北大学川内キャンパス）。

#### 〔各種活動〕

1. 高度教養教育・学生支援機構 正午PD会 全12回，企画・運営・司会，
2. 高度教養教育・学生支援機構発足記念国際シンポジウム「21世紀グローバル世界が求める人間像と教養教育」企画・司会，2014年7月25日（東北大学）。

#### 研究開発員・助教 今野 文子

##### 〔研究業績〕

1. （共編著）『東北大学 大学教員準備プログラム／新任教員プログラム 2013 年度報告書』，東北大学高等教育開発推進センター，255頁，2014年8月。
2. （共著）今野文子，三石大，「大学教員による授業内容の決定方法に関する分析」『第39回教育システム情報学会全国大会講演論文集』，於：和歌山大学（和歌山県・和歌山市），教育システム情報学会，407-408頁，2014年9月。
3. （共著）趙秀敏，富田昇，今野文子，朱嘉琪，稲垣忠，大河雄一，三石大，「大学初修中国語ブレンディッドラーニング用教科書による実践」，『第39回教育システム情報学会全国大会講演論文集』，於：和歌山大学（和歌山県・和歌山市），教育システム情報学会，91-92頁，2014年9月。
4. （共著）Fumiko KONNO, and Takashi MITSUISHI: University Teachers' Needs of Support

for Designing and Preparation of Courses: A Focus on Differences by Academic Discipline and Rank, *Proc. of the 22nd International Conference on Computers in Education. Japan: Asia-Pacific Society for Computers in Education*, Short Paper, pp.1005-1010. (査読有) 2014年12月.

5. (共著) Xiumin ZHAO, Noboru TOMITA, Fumiko KONNO, Jiaqi ZHU, Tadashi INAGAKI, Yuichi OHKAWA, Takashi MITSUISHI: Initial development and use of materials, based on the theory of instructional design for blended learning of Chinese as a second foreign language in a Japanese university, *Proc. of 2014 International Conference of Teaching Chinese as a Second Language*, 99-107 頁 (査読有), 2014年12月.

#### 〔学会活動〕

1. 国際会議 ICCE (International Conference on Computers in Education) 2014, Local Organizing Committee, 2014年5月.

#### 〔各種活動〕

1. 東北大学 大学教員準備プログラム (PFFP), 東北大学 新任教員プログラム (NFP), プログラム担当者.
2. 東北大学 専門性開発プログラム動画配信サイト PDPonline, 設計・開発担当者.
3. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム「授業づくり: 準備と運営」, セミナー担当者, 2014年7月11日.
4. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム「授業デザインとシラバス作成」, セミナー担当者, 2014年7月18日.
5. 東北大学 高度教養教育・学生支援機構発足記念シンポジウム「21世紀グローバル世界が求める人間像と教養教育」, 南相馬からのテレビ会議中継担当, 2014年7月25日.
6. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム「Planning and Managing Active Learning in English」2014年9月26-27日開催, セミナー担当者.
7. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム「Classroom English: Pronunciation and Expressions」セミナー担当者, 2014年12月18日,
8. メルボルン大学における STEM 等に関する調査, 2015年3月21-29日.

PD コーディネーター 和田 由里恵

#### 〔研究業績〕

1. 日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014)「中国人日本語学習者による依頼の電子メール-中間言語用論の観点から-」, 2014年7月10-12日 (シドニー工科大学).

#### 〔各種活動〕

5. 東北大学履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム (EMLP), プログラム担当者.
6. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム (PDP/EMLP)「比較から見る世界の高等教育」セミナー担当者, 2014年8月23日.
7. 東北大学 大学教育支援センターPD プログラム (PDP/EMLP)「SD/PD 論」セミナー担当者, 2014年8月23日開催.
8. (編集) 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学教員のブレイク・スルー』PD ブックレ

ット Vol. 6, 2015 年 2 月.

9. シドニー工科大学, シドニー大学, ニューサウスウェールズ大学における日本語教授に関する調査, 2014 年 7 月 8-10 日.
10. 龍谷大学におけるラーニングコモンズ活用に関する調査, 2015 年 2 月 4 日.
11. 立命館大学言語教育情報研究科における TESOL プログラムに関する調査, 2015 年 2 月 5 日.
12. 東京大学大学経営・政策コース設立 10 周年記念シンポジウム「大学経営・政策人材と大学院教育」(研修), 2015 年 3 月 28 日, 東京大学.

#### コーディネーター 稲田 ゆき乃

##### 〔各種活動〕

1. 東北大学 大学職員能力開発プログラム (SDP), プログラム担当者.
2. 平成 26 年東北地区大学図書館協議会合同研修会「アクティブ・ラーニングと大学図書館」, 企画・ファシリテーター, 2014 年 8 月 26 日 (東北学院大学),
3. 専門性開発プログラム (PDP/SDP)「若手職員のための大学職員論～若手の力, 大学の未来～」, 企画・運営・ファシリテーター, 2014 年 12 月 20 日 (東北大学),
4. 大学職員能力開発プログラム (SDP)「東北大学職員のための『大学変革力』育成講座」, 企画・運営・司会, 2014 年 10 月 11 日/第 2 回: 12 月 6 日/第 3 回: 2015 年 1 月 31 日 (東北大学).
5. 大学行政管理学会第 18 回研究集会 (参加), 2014 年 9 月 6-7 日 (東北学院大学).
6. 京都大学高等教育研究開発推進センター 教育関係共同利用拠点「相互研修型 FD 共同利用拠点」FD ネットワーク代表者会議 (JFDN) 第 7 回会合 (参加), 2014 年 9 月 12 日 (京都大学).
7. 大学コンソーシアム京都「第 12 回 SD フォーラム」(研修), 2014 年 10 月 19 日 (キャンパスプラザ京都).
8. メルボルン大学におけるアカデミック・リーダー・プログラム等に関する調査, 2015 年 3 月 21-29 日.

#### 事務補佐員 齋藤 ゆう

##### 〔各種活動〕

1. 東北大学履修証明プログラム 大学教育人材育成プログラム (EMLP), プログラム担当者.
2. 京都大学高等教育研究開発推進センター 教育関係共同利用拠点「相互研修型 FD 共同利用拠点」FD ネットワーク代表者会議 (JFDN) 第 7 回会合 (参加), 2014 年 9 月 12 日 (京都大学).
3. (編集) PD ブックレット Vol. 6 『大学教員のブレーク・スルー』, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編, 2015 年 2 月.
4. 東京大学大学経営・政策コース設立 10 周年記念シンポジウム「大学経営・政策人材と大学院教育」(研修), 2015 年 3 月 28 日 (東京大学).

#### 事務補佐員 朱 嘉琪

##### 〔研究業績〕

1. (共著) 趙秀敏, 富田昇, 今野文子, 朱嘉琪, 稲垣忠, 大河雄一, 三石大, 「大学初修中国語ブレンディッドラーニング用教科書による実践」, 『第 39 回教育システム情報学会全国大会講演論文

集』, 於 : 和歌山大学 (和歌山県・和歌山市), 教育システム情報学会, pp.91-92, 2014 年 9 月.

2. (共著) Xiumin ZHAO, Noboru TOMITA, Fumiko KONNO, Jiaqi ZHU, Tadashi INAGAKI, Yuichi OHKAWA, Takashi MITSUISHI: Initial development and use of materials, based on the theory of instructional design for blended learning of Chinese as a second foreign language in a Japanese university, *Proc. of 2014 International Conference of Teaching Chinese as a Second Language*, pp.99-107. (査読有) 2014 年 12 月.

〔各種活動〕

1. 東北大学 専門性開発プログラム動画配信サイト PDPonline, 設計・開発.
2. 東北大学教員のためのリソースマップ, 設計・開発.





教育関係共同利用拠点  
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」

**2014年度 教育関係共同利用拠点事業報告書**

Joint Educational Development Center Project Report 2014

2015年 6月 11日 発行

編 者 東北大学高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
発行所

Center for Professional Development  
Institute for Excellence in Higher Education  
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
TEL : (022)-795-4471  
E-mail : cpd\_office@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所 北日本印刷株式会社  
〒984-0064 仙台市若林区石垣町 35 番 6